

広島県道徳教育指導資料



読み物教材例集・授業展開例集



平成23年3月

広島県道徳教育指導資料作成委員会
広島県教育委員会

は じ め に

今日、社会の大きな変化の中、現代の子どもたちについて、生命尊重の心や自尊感情が乏しいことや規範意識が低下していること、集団活動を通じた社会性の育成が不十分であるといったことが指摘されています。そして、こうした現状を踏まえて、道德教育の一層の充実を図ることが求められています。

新学習指導要領では、道德教育充実のためには、道德の時間の指導に大きな役割を果たす教材の充実が必要であることから、「児童生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発と活用」をしていくことが示されています。具体的には、道德の時間の目標の達成を図り、子どもたちに充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるために、魅力的な教材を多様に開発しその効果的な活用に努めることが求められています。

県教育委員会では、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、地元の身近な素材を活用し子どもたちの心に響く道德の授業の展開のために、「広島県道德教育指導資料」の作成を進めてきました。平成 21 年度は、その第一部として、地域の素材を活用した魅力的な教材の開発の手順等を掲載した「地域教材開発の手引」を作成しました。今年度は、この手引を利用して、市町の道德教育推進協議会等や各校で、地域の「ひと・もの・こと」といった素材を活用した教材づくりが積極的に行われ、県内各地で、その地域ならではの特色ある教材が数多く作成されています。

そこで、今年度は、作成した教材を効果的に活用できるように、第二部及び第三部となる「読み物教材例集」及び「授業展開例集」の作成に取り組んできました。

本書は、「先人の伝記」「自然」「伝統と文化」「スポーツ」の四つの分野を題材とした地域教材について、児童生徒の発達や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うことができるように、展開例や資料分析表、板書例やワークシートなどを掲載しています。さらには、作成した資料や地域の特色を生かし、子どもたちが道德的価値について深く考えることができるような、道德の授業における活用の仕方のヒントを満載しています。また、すぐに授業に活用できるように、教材やワークシートをホームページからダウンロードできるようにしてあります。

各学校においては、「地域教材開発の手引」(平成 21 年度発行)及び本書を活用し、道德の時間の一層の充実が図られますよう期待しております。また、本書の活用を通して、学校が発信の中心となり、地域と子どもたちを結ぶ授業実践が推進され、子どもたちの人間としてのよりよい心の成長を促すことにつなげていただけることを願っています。

最後になりますが、本書の作成にかかわり、御指導いただいた多くの先生方、御尽力いただいた道德教育指導資料作成委員会委員及び分野別作成部会員の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

広島県道德教育指導資料作成委員会
委員長 中村 弘市

目 次

広島県道徳教育指導資料―読み物教材例集・授業展開例集―の活用にあたって	1
Ⅳ 地域教材の活用にあたって	2
Ⅴ 分野別読み物資料及び授業展開例	12
「分野別読み物資料及び授業展開例」の見方	
1 先人の伝記	
(1) 「わたしが行かねば」 小学校中学年	17
(2) 「希望の花」 小学校高学年	26
(3) 「和田吉左衛門物語―新たな地を求めて―」 小学校高学年	36
(4) 「武将茶人―上田宗箇―」 小学校高学年	45
(5) 「一筋の光を求めて」 小学校高学年	55
(6) 「夢とロマンを追い求めて―彫刻家 円鋳勝三―」 中学校第3学年	65
2 自然	
(1) 「700さいの大すぎ」 小学校低学年	75
(2) 「待月」 小学校中学年	84
(3) 「時をおよぐクジラ」 小学校中学年	94
(4) 「モリアオガエルを守る」 小学校高学年	105
(5) 「恐羅漢」 中学校第3学年	117

3 伝統と文化

(1) 「みぶの花田うえ」 小学校低学年	129
(2) 「三枚の写真」 小学校高学年	139
(3) 「百試千改の夢」 小学校高学年	149
(4) 「ジブリ絵職人のアニメ筆」 小学校高学年	160
(5) 「大崎上島 東野の權伝馬」 小学校高学年	170
(6) 「日本一の琴づくりーこだわりの伝統工芸士 藤田房彦ー」 小学校高学年 ...	180
(7) 「僕らの手で」 中学校第1学年	191

4 スポーツ

(1) 「ゆめにむかってー栗原恵選手のゆめー」 小学校中学年	203
(2) 「強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」 小学校高学年 ..	215
(3) 「今を一生懸命ー日本女子体操を支えた池田敬子さんー」 小学校高学年	226
(4) 「心のたすきをつなぐ」 小学校高学年	237
(5) 「風を感じてー侍ハードラー 為末大ー」 中学校第2学年	248

VI 資料

○ 各市町素材集	261
○ 参考資料「平成22年度 開発教材」一覧 等	281

作成協力者一覧
引用・参考文献

広島県道徳教育指導資料－読み物教材例集・授業展開例集－ の活用にあたって

本書では、地域教材の活用にあたって、基本的な考え方を基に、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツの四つの分野ごとに読み物教材及び授業展開例を23市町分掲載し、各市町・学校において、地域教材をすぐに授業等で活用でき、かつ道徳の時間を構想していく上において参考となるよう編集しました。

Ⅳ 地域教材の活用にあたって

道徳の時間の指導、特に、多様な学習指導の構想や道徳の時間に生かす指導方法の工夫について整理しています。



Ⅴ 分野別読み物資料及び授業展開例

各市町で開発・実践された地域教材を、分野ごとに開発・活用例として掲載しています。（事例数：先人の伝記6，自然5，伝統と文化7，スポーツ5）

（１）開発資料の実際

教材を活用するにあたって必要と考えられる情報として、作成の要点や授業展開例等を紹介しています。

（２）活用のポイント

上記（１）に示した「作成の要点」を踏まえて、道徳の時間のねらいを達成するために取り入れた指導方法など、活用のポイントを根拠（資料の特性、児童生徒や地域の実態等）に基づいて記述しています。

（３）授業の実際

上記（２）の活用のポイントに示した項目と連動させ、児童生徒の反応をもとに授業の様子を記述しています。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

効果的な展開が図られるように、事前・事後指導をも考慮した各教科等との関連について記述しています（計画段階を含む）。

（５）心のノートを活用

事前指導、道徳の時間（導入・展開・終末）、事後指導における活用例を記述しています。



Ⅵ 資料

各市町素材集を掲載しています。これは、道徳の時間をはじめ、各教科等における指導に用いられる教材のもとになる材料を集めたものです。「地域教材開発の手順」における「素材の収集・選定」段階に当たるものです。

Ⅳ 地域教材の活用にあたって

1 道徳の時間の指導の充実 ― 多様な学習指導の構想 ―

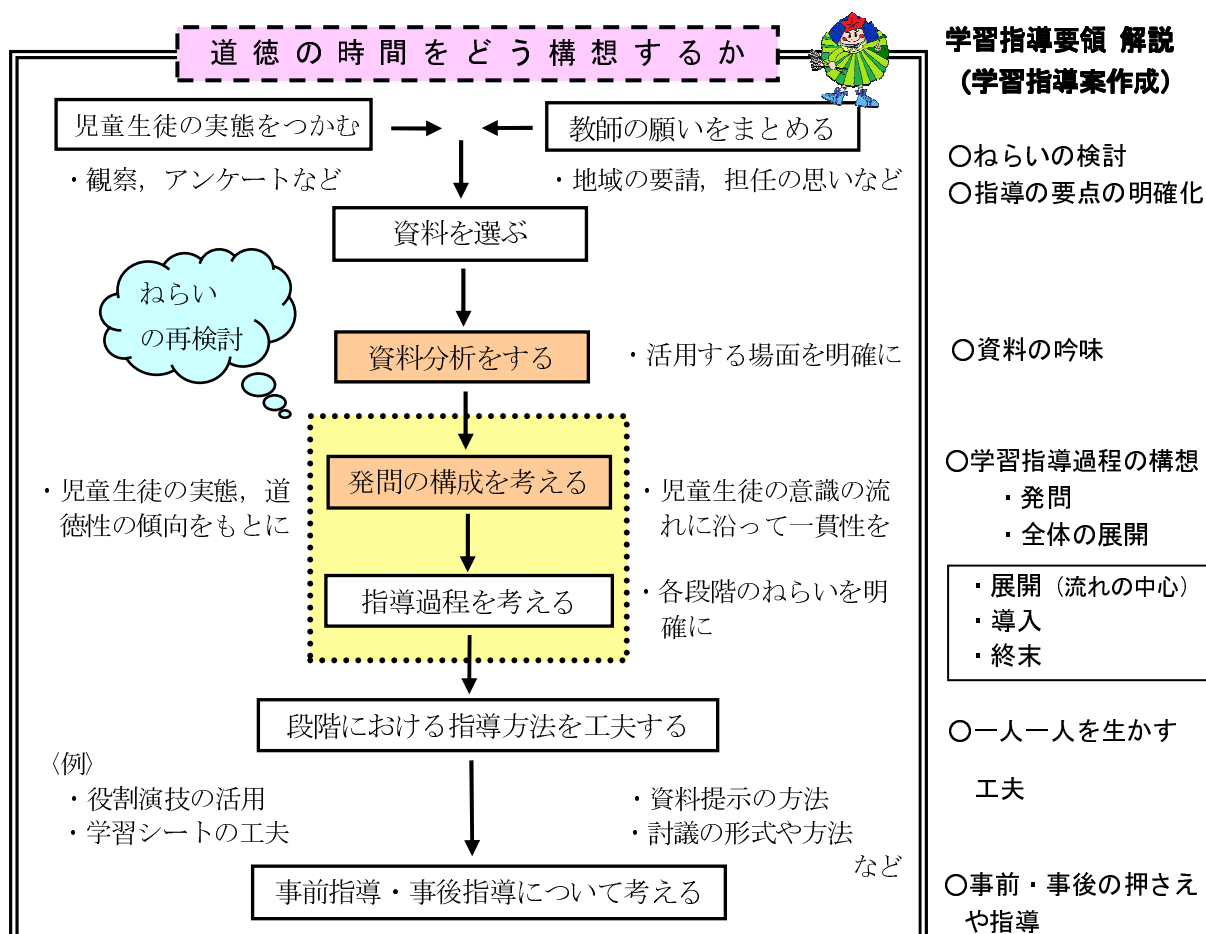
**開発した魅力的な地域教材を効果的に活用し、児童生徒に充実感を
もたらしような生き生きとした指導を進めよう**

道徳の時間は、児童生徒一人一人が道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践に結び付く内面的資質としての道徳的実践力を育成する時間である。

道徳の時間の学習指導を構想する際には、指導する学級の実態、児童生徒の発達の段階、指導の内容や意図、資料の特質、他の教育活動との関連などに応じて柔軟な発想をもつことが大切である。このことを踏まえて、各教科等との関連や家庭、地域社会との連携を生かした心に響く学習指導の多様な展開を工夫することが大切である。その際、道徳教育推進教師の指導、助言のもとに創意工夫を行うことが求められる。

(1) 道徳の時間の構想 ― 道徳の時間の特質を生かした指導 ―

主題のねらいを達成するために、児童生徒がどのように学んでいくのかを十分に考慮して、何を、どのような順序で、どのような方法で指導し、評価し、更に指導に生かすのかなど、道徳の時間の構想における各教師の創意工夫が期待される。



(2) 学習指導過程の創意工夫 ―道徳の時間に生かす指導方法の工夫―

道徳の時間の学習指導過程とは、ねらいの根底にある道徳的価値について児童生徒が内面的な自覚を深めていくための指導の手順を示すものである。すなわち、それは、児童生徒自らが望ましい人間としての生き方を追求し、道徳的価値についての見方や感じ方、考え方を深めていく過程を明らかにするものである。

道徳の時間の学習指導過程は、一般的に、導入、展開、終末の各段階を設定することを基本とするが、いたずらに固定化、形式化することなく、弾力的に扱うなどの工夫をすることが大切である。

導入段階	【学習への動機付けと道徳的価値への方向付け】 主題に対する児童生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起して、ねらいの根底にある道徳的価値の自覚に向けて動機付けを図る段階であるといわれる。 ○工夫 ・生活体験を想起させて発表させる。 ・意外性のあるアンケート調査の結果等の資料を提示して児童生徒に疑問などをもたせる。 ・資料に関する絵画や写真、VTR、DVDや小道具などを見せて視覚的に印象付ける。 (体験の投影や疑問の掘り起こしをする。) ・録音テープや音楽CDなどを使って聴覚的に印象付ける。 ・主題のねらいにかかわる新聞記事、児童生徒作文、詩や短歌などを活用して、主題に引きつける。 ・地域の人々の協力を得て、児童生徒の興味や関心を高める。 ・実験や観察など実物に触れる体験などを取り入れ、学習への意欲を喚起する。 ※ 児童生徒に反省を強いるような問いかけを繰り返し、告白的な場となり、雰囲気をも損ねてしまうことのないように気をつける。
展開段階	【道徳的価値の追求と内面的自覚】 道徳の時間のねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な資料によって、児童生徒一人一人がねらいの根底にある道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深める段階であるといわれる。 ○資料を印象的、効果的に提示する工夫をする。《※1》 ↓ ○児童生徒の話し合いの視点を引き出し、意欲的な話し合いへと巻き込む。《※2》 ↓ ○児童生徒一人一人の考えを十分に引き出す表現活動の工夫をする。《※3》 ↓ ○一人一人の違いを鮮明に浮き立たせ、多様な考えの違いを学び合わせる。《※4》 ↓ ○話し合ったことをもとに児童生徒自身の問題へと投げかける。《※5》
終末段階	【ねらいとする道徳的価値のまとめ】 ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり温めたりして、今後につながる段階といわれる。とりわけ、児童生徒一人一人が、自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感でき確かめることができるような工夫が必要である。 ○工夫 ・児童生徒の考えを整理する。《※6》 〔 児童生徒の感想を発表させたり、書く活動を取り入れる。 教師の体験談や説話をしたり、補助的な資料を提示したりする。〕 ・各教科等との関連を図り、今後の発展につなぐ。 (これからの生活に向けてどうするかという戒めや決意を要請して、性急に実践化を意図したり、教師の考え方を押し付けすぎたりしないようにする。)

心のノートを活用しつつ…

ア 発問構成の工夫

道徳の時間の指導においては、人間性についての深い理解の上に立って、ねらいの根底にある道徳的価値を児童生徒が主体的にとらえ、人間としての生き方の自覚を深めることが大切である。

資料に含まれている道徳的価値に迫るためには、教師の発問が重要な切り口である。したがって、発問は教師により十分検討され、意図的、計画的に学習指導過程の中に位置付けられなければならない。少なくとも次のような点に配慮して発問構成を工夫したい。

① 読み取りに終わらない

資料に解答が記述してあることを聞くだけの発問構成にしない。もちろん資料の筋を確認する質問は必要な場合があるが、それに終始すれば資料の読み取りに終わることになる。中心発問はねらいとする道徳的価値について考える切り口にかかわるものとして設定する必要がある。

② 行動の仕方だけを問わない

行動の仕方だけを考える発問に終わらないようにする。道徳の授業は表面に現れた結果としての行動の仕方を問うだけではなく、その根拠である心の在り方に迫るものである。

③ 副詞・副詞句に注目

資料中の副詞や副詞句に留意して発問を構成する。人間の行動は動詞で表現されるが、その動詞を修飾して内面的な心の動きを表現するのは副詞や副詞句である。そこに注目して発問を構成することで、道徳的価値への深い迫り方が可能になる。

発問を構成する場合には、授業のねらいに強くかかわる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的にとらえるようにするという手段が有効な場合が多い。

イ 多様な指導方法の創意工夫

ねらいを効果的に達成するには、児童生徒の感性や知的な興味などに訴え、児童生徒が問題意識をもち、意欲的に考え、主体的に話し合うことができるように、ねらい、児童生徒の実態、資料の特質や学習指導過程などに応じて、最も適切な方法を選択し、実施できるように創意工夫することが必要である。

道徳の時間に生かす指導方法には多様なものがあるが、以下に主な指導方法の工夫を示す。

(下記《※1》～《※6》は、上記の表中《※1》～《※6》に対応させている。)

《※1》資料提示の工夫

資料提示の方法としては、教師による読み聞かせが一般に行われている。道徳の時間で活用する資料については、資料の種類や内容の程度、更に分量などの違いがあり、提示の仕方によって児童生徒の興味の程度や理解の深まりが左右される。児童生徒が資料の内容を臨場感をもって理解することができたり、主人公や筆者の感じ方や考え方に共感するようにするなど、資料の特性を生かす資料提示をすることが大切である。

なお、多くの情報を提示することが必ずしも効果的だとは言えず、選り抜かれた情報の提示が想像をふくらませる上で効果的な場合もあることに留意する。

- ①教師による表現の工夫（教師の読み方：抑揚等、動作など）を凝らした提示
- ②大型絵（掛図）や紙芝居、映像画面等を用いた提示
- ③紙人形やパネルシアター等を用いた小劇場的な提示
- ④映像や実物を生かした提示
- ⑤地域からの講師の協力を得た提示 など

《※2》話合いの工夫

話合いは、児童生徒相互の考えを深める中心的な活動である。読み物資料を生かして行われる話合いは、道徳の時間の指導に広く行われている指導方法であり、道徳の時間においても重要な役割を果たす。この方法は、話すことと聞くことが並行して行われ、児童生徒が友だちの考え方についての理解を深めたり、自分の考え方を明確にしたりすることができるので、主体的に道徳的实践力を身に付ける上で効果的な方法である。

- ①意見を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じた話合い
- ②座席の配置を工夫した話合い
- ③討議形式やグループ、ペアによる話合い
- ④名札の活用、同じ考えをもつ児童生徒同士が集まるように座席の移動を行うなどによる一人一人の立場を明確にした話合い など

《※3》表現活動の工夫

道徳の時間に動作化や役割演技、コミュニケーションを深める活動などを取り入れることは、児童生徒の感性を磨いたり、臨場感を高めたりすることとともに、表現活動を通して自分自身の問題として深くかわり、ねらいの根底にある道徳的価値についての共感的な理解を深め、主体的に道徳的实践力を身に付けることに資するものである。

- ①発表したり書いたりする活動
- ②特定の役割を与えて即興的に演技する活動
- ③動きやせりふの真似をして理解を深める活動
- ④音楽、動作、表情などで自分の考えを表現する活動
- ⑤実際の場面の迫体験、実験や観察、調査等による表現物を伴った活動 など

《※4》板書を生かす工夫

道徳の時間は黒板を生かして行うことが多く、板書は児童生徒にとって思考を深める重要な手掛かりとなる。板書は教師の伝えたい内容を示したり、その順序や構造を示したり、内容の補足や補強したりするなど、多様な機能をもっている。

その機能を生かすために重要なことは、思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、違いや多様さを対比的、構造的に示す工夫、中心部分を浮き出させる工夫などを凝らすことである。また、教師が児童生徒の考えを取り入れ、児童生徒と共につくっていくような創造的な板書となるように心掛けることも大切である。

- ①劇場的、パノラマ的にして工夫した板書
- ②キーワードを浮き彫りにした板書
- ③構造的に構成して話合いを深める板書
- ④児童生徒が多様な形で参加する板書 など



《※5》書く活動の工夫

書く活動は、児童生徒が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として、重要な役割をもつ。この活動においては、必要な時間を確保することで、児童生徒は自分なりの取り組み方でじっくり考えることができる。また、学習の中で個別化を図り、児童生徒の感じ方や考え方をとらえ、個別指導を進める重要な機会にもなる。更に、1冊に綴じられたノートなどを活用することによって、児童生徒の学習を継続的に深めていくことができ、心の成長の記録として活用することもできる。

- ①登場人物の気持ちを書く吹き出しの枠を付けた形式
- ②吹き出し枠を各登場人物に配して対話を考える形式
- ③自分の考えについての評価欄が入った形式
- ④自分の体験を登場人物に伝える手紙の形式
- ⑤ゲーム的な内容を組み合わせた形式
- ⑥自由感想的に積み上げていくことができる形式 など

《※6》説話の工夫

説話とは、あるまとまりをもった内容を、教師が児童生徒に話して聞かせる指導方法である。教師が意図をもってまとめた話をすることは、児童生徒が思考を一層深めたり、考えを整理したりするのに効果的である。教師が自ら語ることによって児童生徒との信頼関係が増すとともに、教師の人間性がにじみ出る説話は、児童生徒の心情に訴え、深い感銘を与えることができる。

教師は、説話の効果が大きいことを鑑み、話題の選択、内容の吟味、話の進め方やまとめ方などを工夫することが大切である。なお、児童生徒への叱責、訓戒や行為の押し付けにならないように注意する必要がある。

- ①教師の体験談や願い
- ②児童生徒の日常生活における身近な話題
- ③児童生徒の関心や視野を広げる時事問題
- ④ことわざや格言、心に残る標語
- ⑤地域の自然や伝統文化に関すること など

Q：魅力的で多様な道德の授業を構想するにはどんなことに気を付ければよいですか。



A： 道德の授業が児童生徒の心に響き、やりがいのあるものになるようにするためには、次のような点に配慮しながら授業の構想に臨むことが大切である。

ア 道德の時間の特色や役割を明確にして構想する

- 道德的価値の自覚を大切にした学習指導過程
- 教師のねらいや意図を表す学習指導案の工夫

イ 授業の構想を表現する学習指導案を、教師の思いが表れるものとする。

ウ 多様な道德資料を生かすように努める。

エ 児童生徒の発達の段階や実態を柔軟にとらえて学習活動を構想する。

オ 学習の場や時間、指導体制、学習集団などを工夫する。

2 道徳の時間の指導における配慮すべき観点

心に響く道徳の時間の指導の一層の創意工夫と充実を図ろう ～道徳の時間を要として一人一人の道徳性を高めていこう～

道徳の時間の指導の一層の創意工夫と充実を図るために、道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮したい。

(1) 道徳教育推進教師を中心とした指導体制の充実

学級担任の教師が行うことを原則とするが、校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する。

道徳の時間は、主として学級担任が計画的に進めるものであるが、学校や学年として一体的に進めるものでなくてはならない。そのために、指導に際して全教師が協力し合う環境をつくるなどの指導体制を充実することが大切になる。

【工夫】

- 道徳の時間における実際の指導の場面において他の教師などの協力を得る。
 - ・校長や教頭などの参加による指導
 - ・他の教職員とのチーム・ティーチングなどの協力的な指導
 - ・養護教諭や栄養教諭などの協力
- ※学校の教職員が協力して指導に当たることができるような計画づくりなどを、学校としての方針の下に道徳教育推進教師が中心となって進めることが大切である。
- 道徳の時間を実施しやすい環境づくりに努める。
 - ・道徳の時間に用いる教材や図書の準備、掲示物の充実、資料コーナー等の整備
 - ・具体的な作業場の設置 など
- 授業実施上での悩みを抱える教師の相談役になったり情報提供をしたりして支援する。
- 道徳の時間に関する授業研修を実施する。
- 道徳の時間の授業の公開や情報発信を積極的に行う。

(2) 体験活動を生かすなどの指導の充実

集団宿泊活動や職場体験活動、ボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、児童生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。

学校では、上記のほかにも、伝統と文化にかかわる体験や勤労生産にかかわる体験、福祉に関する体験を含め様々な体験活動を、総合的な学習の時間や特別活動で進めている（小学校低学年の段階では、生活科等の中で多様な体験を通じた学習が進められる）。

これらの活動は、活動するだけで終わらせることなく、事前に体験活動を行うねらいや意義を児童生徒に十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたりすることなどにより意欲をもって活動できるようにするとともに、事後に感じたり気付いたりしたことを自己対話しながら振り返り、まとめたり、伝え合ったりすることなどにより他者と体験を共有したり、広い認識につなげたりすることができるようにする。このことは、それぞれの学習活動での工夫を図ることを通じて一層の充実が図られなければならない。

(3) 魅力的な教材の開発や活用

先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、児童生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、児童生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。

※ 詳細については、「広島県道徳教育指導資料『地域教材開発の手引』」PP.8-13 参照

(4) 言葉を生かし（表現し）考えを深める工夫

自分の考えを基に、書いたり話し合ったり（討論したり）するなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。

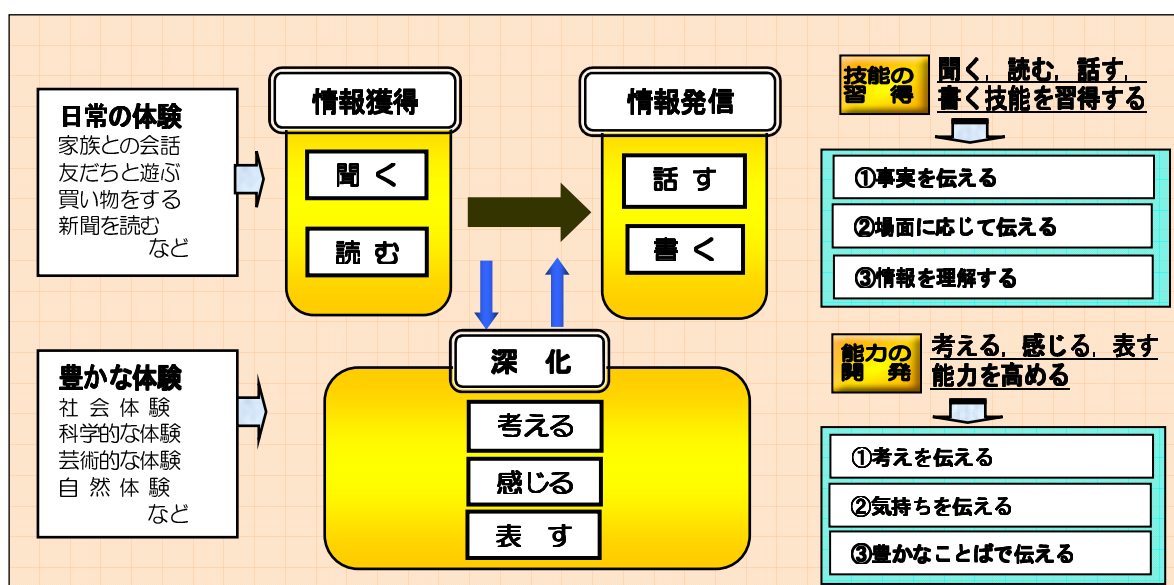
言葉は知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳の時間においても、その言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。

道徳の時間は、国語科における言葉にかかわる能力を基本に、資料や体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより意見の異なる人の考えに接し、協同的に議論したり、意見をまとめたりする。例えば、資料の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを考える。友だちの考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり、書いたりする。更に、学校内外での様々な体験を通して感じ、考えたことを、道徳の時間に言葉を用いて生かし合ったりする。これらの中で、言葉の能力が生かされ、一層高められていく。

したがって、道徳の時間においては、このような言葉の能力を総動員させて学習に取り組ませることが、ねらいを達成する上できわめて重要であると考えられる。

【参考】確かな「ことばの力」の育成（平成22年度広島県教育資料などから）

次の図は、本県における「ことばの教育」の考え方を概念図に表したものである。



児童生徒が、日常の様々な体験を通して情報を確実に理解するとともに、場面に応じて事実を

正確に相手に伝えることができるようになること、さらに、豊かな体験によって自分の考えを深め、豊かな表現ができるようになることが、「ことばの教育」の目指すところである。

(5) 情報モラルの問題に留意した指導

児童生徒の発達の段階や特性を考慮し、小・中学校学習指導要領「第3章 道徳」第2に示す道徳の内容との関連を踏まえて、情報モラルに関する指導に留意すること。

情報モラルとは情報社会で適正な活動を行うためのものになる考え方と態度ととらえることができ、その内容としては、個人情報保護、人権侵害、著作権等に対する対応、危険回避やネットワーク上のルール、マナーなどが一般に指摘される。

情報モラルに関する指導について、道徳の時間では、その特質を生かした指導の中での配慮が求められる。

指導に際しては、情報モラルにかかわる題材を生かして話し合いを深めたり、コンピュータによる疑似体験を授業の一部に取り入れたり、児童生徒の生活体験の中の情報モラルにかかわる体験を想起させたりする工夫など、創意ある多様な工夫が生み出されることが期待される。

なお、道徳の時間は、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めることを通して道徳的実践力を育成する時間であることの特質を踏まえ、例えば、情報機器の使い方やインターネットの操作、危険回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼をおくのではないことに留意する必要がある。

3 地域教材を活用した学習指導の多様な展開

地域に根ざした道徳教育を充実していこう

《ふるさと それは、わたしに やすらぎと やさしさと あたたかさをあたえてくれるところ》

文部科学省（平成21年）「心のノート」平成21年度改訂版（小学校5・6年）P.104 から

(1) 地域教材の特性を生かした指導 ―「地域」をどうとらえるか―

日本をはじめ、世界の国々や地域、さらには民族などにおいて、大切に守り誇りとしている文化や伝統がある。日本の中でも、多様な地域社会（郷土）にそれぞれの文化や伝統があり、また、家庭や学校においても独自の文化や伝統がある。家族愛や愛校心、郷土愛、愛国心なども、このような文化や伝統に基づいて育まれる。

〈参考〉中学校学習指導要領解説 社会編 から

第2節 各分野の目標および内容〔地理的分野〕2 内容 (2)日本の様々な地域

エ 身近な地域の調査（内容の取扱い）

……身近な地域は、生徒が生活舞台にしている地域であり、学習対象を生徒が直接体験できるといった特質を有している。（中略）

……なお、学習対象としての「身近な地域」は、学区を基に、生徒の日常の生活圏や行動圏を考慮して適切に設定することが大切である。

また、「市町村規模」とは、「身近な地域」の学習を通してとらえることのできる、いわば直接経験地域の規模のことであり、それを行政区を使って示したものである。したがって、この項目における学習対象地域は必ずしも行政区の市町村を意味しているわけではなく、実際には市町村より小さな学区を基にした地域であったり、複数の市町村にわたって設定したりする場合が考えられる。

【ポイント】※児童生徒にとっての地域

- ・児童生徒の発達の段階を考慮
- ・体験活動等との関連を考慮

(2) 地域教材を活用した学習指導過程の工夫〈試案〉

活 動	道徳的ねらい	留 意 点	
教科 特別活動 総合的な学 習の時間 (体験活動 調べ学習) 等	・道徳的価値 に触れ、課 題意識をも つ	○ 道徳的価値にかかわる課題意識をもたせる。 ◆素材にかかわり、見学や取材をしたり、図書室、インターネットな どで調べたりする。 ○ それぞれの思いで伸び伸びと体験活動等を行う。 ◆地域文化に詳しい人、伝統芸能や工芸の継承者等と交流を図る。 ○ 課題意識が連続するよう学習環境を整える。 ◆道徳ノートを活用したり、道徳コーナーを設置(教室等)したりする。	
道 徳 の 時 間	学 習 指 導 過 程	学 習 活 動	指 導 法 の 工 夫
	導 入	1 ねらいとする 道徳的価値に気 付く	◆映像資料や、伝統的な音楽や絵画、実物、新聞記 事などを用いて問題意識を掘り起こしたり、 <u>主題</u> への興味を喚起したりする。 ◆事前アンケート等の結果などを活用する。 ◆友だち同士で事前の体験活動等における互いのよ さ等を話し合う。
	展 開	2 資料提示 (資料との出会 いを感動的なも のにする) 3 ねらいとする 道徳的価値につ いて考えを深め る	◆地域文化に詳しい人や伝統芸能や工芸の継承者等 の登場(ゲストティーチャー)、地域素材をもと にした自作資料(BGMを流したり、実物に触れ させることなど積極的に取り入れたい)、VTR、 劇化、インタビュー、紙芝居、ペープサート、写 真、数名の教師による範読などによってインパ クトの強い資料提示になるようにする。 ◆役割演技など表現活動を取り入れたりすることに よって、具体的な模擬体験を通して相手の心情や 考えを感じとらせる。 ◆実際の体験活動や調べたこと等を想起することで、 自己のものの見方や考え方、感じ方についてみつ め、そのよさや課題に気付くようにする。 その際、小グループによる話し合いを行い、地域 文化に詳しい人、伝統芸能や工芸の継承者等に加 わっていただき支援をお願いすることも考えられ る。
	終 末	4 道徳的実践へ の意欲を高める 5 本時のまとめ	◆主人公に手紙を書いたりアドバイスをしたり、逆 に主人公の立場で自分に手紙を書いたりしてみる。 ◆地域文化に詳しい人、伝統芸能や工芸の継承者等 を招いて話を聞いたりする。 ◆教師の話を聞く。 その際、文化や伝統についての教師の体験、願 いなどを素材とするだけでなく、印象的な題材を 日常から集めておき、適宜生かすようにする。 ◆次への体験活動や日常生活に生かそうとする意欲 付けをする。
教科 特別活動 総合的な学 習の時間 (体験活動 調べ学習) 等	・道徳的実践を めざす	○ 児童生徒の主体的な活動になるようにする。 ◆授業の中からよさの芽を見出し、さらにそれを伸ばすための手立て やよさの芽が伸びるのを妨げている部分の克服に関する課題等を個 別に考えていく。 ◆道徳の授業に関すること(児童生徒の様子など)を学級通信等で保護 者等に伝え、連携を図る。 ○ 道徳的価値の内面的自覚を生かし、意欲的に活動する。 ◆具体的な体験の場を意図的に設ける。	

【学習指導構想シート】例

【多様な学習指導を構想しよう】



☆ 地域教材の特性と道徳の時間の特質を生かした学習指導の工夫

— 学習の指導過程や指導方法の創意工夫 —

学習指導要領解説

(小) p. 79-89

(中) p. 82-94 を参照

(1) 主 題 名 「 」 (内容項目 :

(2) 対 象 学 年

(3) ね ら い

(4) 資 料 名 「 」

(5) 主題設定の理由 略

(6) 学習指導過程

段階	学習活動 (※指導方法の工夫)	取り入れた理由
導 入	1 心の耕し, 課題の設定	
展	2 資料の提示	
	3 価値の追求把握	
開	4 価値の一般化	
終 末	5 学習の整理, 意欲付け	



「分野別読み物資料及び授業展開例」の

見方

分野別読み物資料及び授業展開例のポイント

教材活用例として、「先人の伝記 → 自然 → 伝統と文化 → スポーツ」の順に、(1)開発資料の実際（素材の概要、学習指導案等）、(2)活用のポイント、(3)授業の実際、(4)各教科等との関連、(5)心のノート[※]の活用について、各学校での授業にすぐに活用していただけるよう心掛け記載しています。

- ・「(2)活用のポイント」については、「(1)イ(ア)作成の要点」に記述している資料の特性、児童生徒や地域の実態等を踏まえて、ねらいを達成するために取り入れた指導方法などを各項目に整理し、記述しています。各項目は「(3)授業の実際」の項目と対応させています。
- ・資料とワークシートについては、授業ですぐに使えるように資料とワークシートの縦書き版も併せて掲載しています。ダウンロードして御活用ください。

以下、「分野別読み物資料及び授業展開例」を活用する上で、特に御留意いただきたい点について、記述します。

(1) 開発資料の実際

開発教材に込められた作成者の思いを理解し、御活用いただけるように、ア 素材の説明、イ 資料の解説、ウ 資料全文、エ 授業展開例ー学習指導案（略案）ーの流れで具体的に記載しています。

教材活用例(1)「ゆめにむかってー栗原恵選手のゆめー」
【小学校中学年 主題：ゆめにむかって 内容項目：1の(2)】

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

(素材「栗原恵さん」について)



栗原恵さんは、江田島市船渠町出身のバレーボール選手である。全日本（火の鳥NIPPON）チームの副キャプテンを務めるなど活躍している。小学校4年生からバレーを始め、高校時代にはインターハイ・国体・春のバレーに優勝し、三冠を達成した。さらに夢であったアデス、北京のオリンピックにエースアタッカーとして連続出場し、それぞれ5位入賞を果たすなど多くの実績を残している。

昭和39年	佐伯町船渠町(当時)に誕生
平成10年	兵庫県大津中学校に転校
平成12年	山口県三田女子高校に進学
平成14年	インターハイ・国体・全日本大会で優勝の高校3年
平成15年	高校3年、全日本大会でベストプレイヤーに選出
平成16年	アデスオーストラリア大会で入賞
平成18年	幼児種子育成所の監督・初年チームの監督
平成19年	全日本選手権、ベストプレイヤー・第9位
平成20年	北京オリンピック出場
平成21年	全日本大会、火の鳥NIPPONの副主将
平成22年	世界バレー選手権で入賞

栗原恵さんの経歴

(イ) 4コマ絵

主人公恵さんに対して、補助的な人物としてお父さん、お母さんを設定した。幼い頃から恵さんに楽しくバレーを教え、その基礎をつくったお父さん、恵さんでいる恵さんの話を聞き、後悔しない進路を決めるように話すお母さんである。そして、恵さんが悩んで決意する場面を中心場面として設定した。

	1	2	3	4
場面のイメージ				
絵の説明	小さい頃からお父さんとバレーの練習をする。バレーが大好きな恵さん。	小学校でスポーツ少年団に入り、バレーを楽しくしながら、練習に励む恵さん。	バレーの強い学校から転校の誘いがあり、進路について迷う恵さん。	悩んだ末、転校を決意し、夢を果たしてオリンピック選手になった恵さん。

ア(イ) 4コマ絵

資料作成に際して、文章化しやすくするために4コマ絵（起承転結）を設定しています。

作成の手順として、この4コマ絵を膨らませて文章化しているので、資料分析表における場面は必ずしも4場面ではありません。また、国語的な起承転結と道德資料における起承転結は必ずしも同じではないことに留意しなければなりません。基本的には、道德資料における「起」は道德的問題が起こったところと考えられます。



【心に響くちょっといいはなし】

花田植と、稲作をおこなってきた日本人の生活のありさまをよく示す行事といえます。昭和51年、川東・壬生両楽団からなる「壬生の花田植」が国の重要無形民俗文化財として指定を受け、平成21年度にユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定しました。

地域の人たちは、「この祭りを残し、伝えていかなくてはならない。」という思いとともに、地域の人達のつながりを大切にしています。壬生の花田植の練習に行き、踊りを教わることは、文化の伝承という意味合いと共に、「地域の青年の仲間入りをすること」という意味合いが大きいように感じられました。「田植えが終わったこの祭りの楽しさ・コミュニティーへ参加する楽しさ、青年への通達儀礼としての役割」がこの祭りが、長い間、大きく省略されることなく、受け継がれてきた原動力であるとも言えます。

また、「壬生の花田植」は、このお祭りの形式や踊りのすばらしさだけを取り上げて、ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されたわけではなく、「日本人の米作りの喜び」を表す「文化的な価値」が高いものの一つとして推薦されているということです。



☆【心に響く

ちょっといいはなし】

素材についての情報は、より広く、深く、多面的に収集する必要があります。しかし、開発の視点として、ねらいとする道徳的価値と、その焦点化を明確にもつことは欠かせないことから、苦労して得た情報（エピソード等）も全て資料に盛り込むことはできません。

そこで、資料作成に活用できなかった情報等（エピソード等）を掲載しました。道徳の時間の補助資料や事前・事後の指導などに御活用ください。

エ 授業展開例 - 学習指導案（略案） -

主人公の心情に共感しながら地域への愛着を持たせる展開
～ 役割演技を生かした指導 ～

(ア) 主題名 町のじまん 4 - (5) 郷土愛

(イ) ねらい

自分の町にある伝統文化に愛着をもつようになった主人公の心情を考える活動を通して、自分の住む町の良さについて考え、大切に思う心情を育てる。

(ウ) 資料名 「みぶの花田うえ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な疑問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導入	1 本時の学習に向けての意識を高める。	○ みんなが楽しみにしていることは何ですか。	○ 自由に意見を出させ、雰囲気づくりをするとともに、本時への方向づけをする。
展開	2 資料を聞いて話し合う。	○ 屋台に友達と走っていき、夢中で買物をするひろ子はどんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 楽しいな。 ・ たくさんいろんな物を買いたいな。 ・ どんなお店が出ているのかな。 ・ 友達と一緒にいけるから楽しいな。 ・ 何かいいものがあるかな。 ○ どうして、ひろ子さんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。 ・ とてもきれいだから。 ・ 花田植がすごいということが分かったから。 ・ みんなが力を合わせて働いていたから。 ○ 花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 外国の人にも知っているなんてすごいなあ。 ・ とてもきれいなお祭りだなあ。 ・ みんなとてもうれしそうだなあ。 ・ トーマス先生も喜んでるなあ。 ・ すごくお祭りが私たちの町にあるんだ。 ・ 壬生の花田植ってすごいなあ。 ◎ 友だちに壬生の花田植についてお話をしてみよう。 ・ 壬生の花田植ってすごいんだよ。 ・ 外国でもとても有名なところだよ。 ・ すごくきれいでね。いろいろな牛や衣装を着た人がいるんだよ。 ・ ずっと昔からやってきているんだよ。 ・ 来年は一緒に見ようね。 ・ 私はいつかやってみたくて思っているよ。	○ 資料を読み聞かせ、写真を見せながら資料を提示するようにする。 ○ 屋台に興味がある主人公の心情を共感にたさせるようにする。 ○ 映像を見せながら、花田植の様子を具体的に見せて、夢中で見ている主人公の心情を想像させるようにする。 ☆ 主人公の感情に寄り添って理解することにより、郷土に対する思いを自分のこととして実感を得、主体的にとらえることができた。

エ(エ)学習指導過程 (☆評価の観点)

道徳教育における評価は、道徳性という人格の全体にかかわるものであることから、客観的な理解の対象とされるものではありません。したがって、道徳の時間においても、数値などによって不用意に評価してはなりません。

しかし、それぞれの指導のねらいとのかかわりにおいて児童生徒の心の動きの変化などを様々な方法でとらえ、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることは大切です。

教師による発問は、児童生徒の思考や話し合いを深める重要な鍵になります。しかし、場面ごとの時系列的な発問は、場面ごとの登場人物の心の中を問い掛けるだけの平板な授業づくりになる不安もあることから、発問は重要なものに絞っていく必要があります。したがって、それぞれの資料分析表における資料の場面数と学習指導過程の発問数が必ずしも一致していない場合があることを御承知ください。

[illegible]

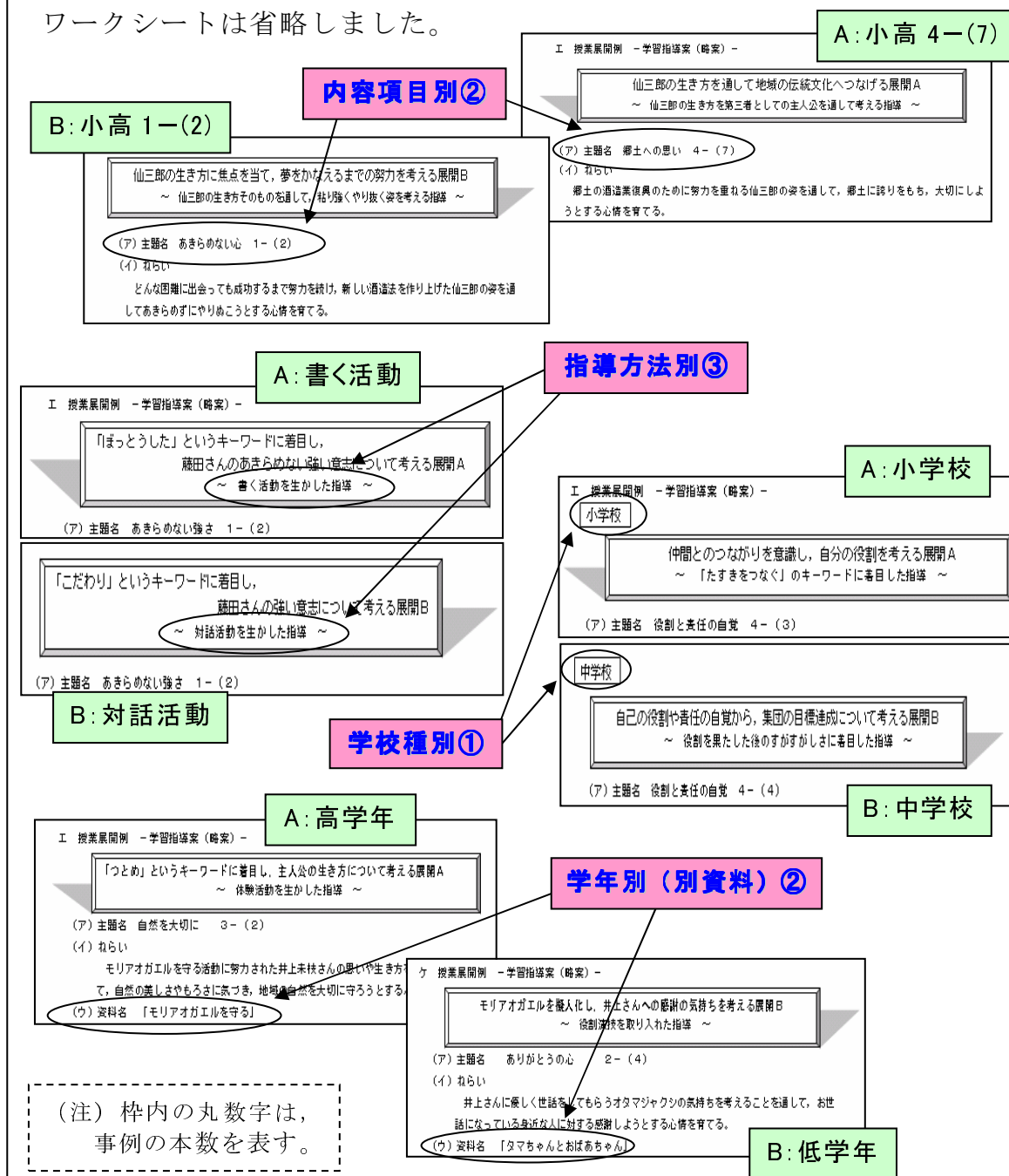
教材の活用に際して、教師が自分の授業で他人の著作物を複製して利用することは、一定の条件の下に著作権者の了解なしにできることになっています（著作権法第 35 条：「地域教材開発の手引」P.13参照）。

- 14 -

エ 授業展開例

授業展開例において、必要に応じてA案・B案と示した資料があります。基本的に学習指導案は、道徳的価値を焦点化し、教師の意図や構想が最も適切に表現されるよう作成すべきであると考えます。しかし、資料の内容や登場人物の言動には、複数の道徳的価値が含まれている場合も少なくはありません。また、ねらいを効果的に達成する指導方法には多様なものがあります。

そこで、一部の事例において授業を柔軟に構想していくために、試案としてB案を作成しました。但し、B案については、資料分析表、板書例、ワークシートは省略しました。



(2) 活用のポイント

「(1) イ (ア) 作成の要点 (資料の特性, 児童生徒や地域の実態等)」を踏まえて、ねらいを達成するために取り入れた指導方法などを記述しています。

項目のアについては、道德の時間の指導効果は教師による発問の適否により大きく変わることから、「発問の工夫」を共通項目として設定しています。項目のイ以下については、それぞれの資料の特性等を踏まえ、活用する際の指導方法として重要度の高い順に設定しています。

但し、指導方法は手段です。各学校においては、学校の実態や授業のねらいなどに応じて検討し、最も適切な指導方法を選択・工夫してください。

(2) 活用のポイント

(例)

- ア 発問の工夫
- イ 役割演技
- ウ 資料提示の工夫
- エ 動画の活用

記号が対応

(3) 授業の実際

(例)

- ア 発問の工夫
- イ 役割演技
- ウ 資料提示の工夫
- エ 動画の活用

(2) 活用のポイント

本資料では、地域に伝わるお祭りを題材として取り上げている。児童の実態として、壬生の花田植に行ったことはあるが、花田植に興味があるのではなく、人が多く集まる露天屋台などあるイベントとしてとらえているのではないかと考える。ここでは、児童の実態に近い主人公が登場し、初めて花田植の持つ価値や人々と花田植のかかわり方について知り、愛着を感じていく様子が描かれている。地域の教材であることから、主人公の心情を考えていくことで、わが町への愛着も深まってくるような展開の工夫をしたいと考える。この資料を通して、壬生の花田植について初めて知ることが、低学年の児童にとっては、多いと考えられる。そこで、資料提示の工夫や動画の活用も重要になってくる。

ア 発問の工夫

まず、祭りの買い物から花田植に夢中になる主人公の心情の変化について考えた後、花田植のすばらしさを友だちに伝えようとする主人公になりきって考える活動を中心発問とした。

イ 役割演技

主発問では、児童は主人公役となり、指導者は友だちになって演技を行う。地域の資料であるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

ウ 資料提示の工夫

本資料では、小学校2年生を対象と考える。授業を行う際には、スライドショーを準備して授業に当たるようにしたい。

エ 動画の活用

花田植の場面では、実際の花田植の様子についてビデオを見せるようにしたい。写真だけでは伝えることができない。音楽や人々の動きのすばらしさがあるからである。

(3) 授業の実際 - 児童生徒の反応を踏まえて -

ア 発問の工夫

最初、主人公の屋台で買い物をしている時の気持ちについて発問する。これまでの壬生の花田植に対する主人公の心情について考える。舞台が

学習者の住む町になっているので、学習者自身の今の心情と近いのではないかと考える。この発問では、児童は屋台で買い物を楽しむ主人公の心情について考え、積極的に発表をすることができた。「金魚すくいがしたい。」「どれを買おうかな。」というお祭りに行った時の自らの心情を思い起こして発表している児童も見られた。

次に、「なぜ、花田植を夢中に見るようになったか。」という発問を行う。主人公が花田植のすばらしさについて気づいたことを考えさせる。資料の内容のふりかえりもねらっている。3度の実践の中で、花田植の知識を順に挙げてしまう場合と、大きく「花田植をすごいと思ったから」という意見を述べる場合があった。前者のようになったのは、その直前に、花田植のすばらしさを短冊にまとめたものをふりかえりながら提示したからであると考えられる。資料を読みながら提示していくとよりよいと感じた。

そして、周りの人のようすにっこりとはほえむ主人公の気持ちについて発問する。主人公の町の人たちと一緒に花田植を見ているうれしさについて児童に考えさせた。花田植とまわりの人々を見てにっこりとしている主人公の心情については、「みんな楽しそうだな。」「この町に花田植があってよかったな。」という考えが出てきていた。そのことが、次の役割演技に生かされていった。

中心発問では、屋台に行っていた友だちに花田植の良さを伝えるためになんと言ったらよいのか考える発問をする。中心発問にかかわる児童の意見には次のようなものがあった。

- ・花田植ってすごく大切だよ。私まで夢中になったよ。力を合わせてがんばっていたよ。
- ・みんな息ぴったりそろえてやっているんだよ。
- ・花田植って900年も前からやっていたんだって。
- ・ずっと昔から伝わっているんだって。
- ・花田植にいったらみんなニコニコして嬉しそうだったよ。
- ・花田植は町で敷あってがんばっているんだよ。

一帯化の部分では、花田植だけでなく、自分の身の回りにある「私の大切な場所・もの」へと目を向

「分野別読み物資料及び授業展開例」の活用を通して、各学校において、道德の時間の特質を生かした展開が可能となるよう、また、児童生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導が進められることを期待しています。

1 先人の伝記



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「わたしが行かねば」	強い意志	内田真千代(府中市立上下南小学校)
(2)	「希望の花」	希望をもって	木村 智子(呉市立三坂地小学校)
(3)	「和田吉左衛門物語 ー新たな地を求めてー」	郷土愛	奥田 健(大竹市立小方小学校)
(4)	「武将茶人ー上田宗箇ー」	個性の伸長	津秋 智子(廿日市市立宮園小学校)
(5)	「一筋の光を求めて」	故郷の宝	福田ゆりえ(坂町立横浜小学校)
(6)	「夢とロマンを追い求めて ー彫刻家 園鍔勝三ー」	理想の実現	松永美代子(尾道市立日比崎中学校)

(※資料「私が行かねば」作成者:府中市立国府小学校 教諭 花田三恵)



教材活用例(1) 「わたしが行かねば」

〔小学校中学年 主題：強い意志 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—藤野昌言—について〉

藤野昌言は、府中市の医師である。明治 12 (1879) 年に全国的に流行したコレラの治療に自身の危険も顧みず邁進し、身を捧げた。

地域の人々は、その死を悼み、現在、古香堂と呼ばれている祀堂を建て、感謝の意を表した。現在も、命日には、遺徳を偲ぶ昌言祭が行われている。



天保 3年 (1832年)	現在の府中市に生まれる。
嘉永 4年 (1851年)	父の後を継いで医者になる。19歳
明治12年 (1879年)	全国的にコレラが流行する。 48歳で亡くなる。(10月) 石碑が建てられる。(11月)
明治16年 明治30年頃	コッホによってコレラ菌が発見される。 石碑が今の府中公園に移される。

藤野昌言の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、昌言の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	毎年10月6日に、藤野昌言の遺徳を偲ぶ「昌言祭」が、藤野家の子孫や関係者が集まり行われている。	昌言は、父親の死をきっかけに医者として生きていくことが、自分の目標であると心に決めた。また、医者になってからも患者に味噌や米を置いて帰ったり、熱心に勉強に励んだりした。	全国的にコレラが流行。多くの死者が出るが、原因も治療法もわからない。こういった状況の中で、医者として府中の人々の命を救うため研究を続けながら誠実に治療に当たった。 体調を崩した日も、要請に応え、患者の往診をし、自らコレラに感染し命を亡くしてしまう。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。 この慰霊祭を「昌言祭」と呼び130年以上経った今も続いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

本資料は、府中市に生まれ育った藤野昌言の生き様を取り上げている。藤野昌言は、医師になるため大阪で学んでいたが、父親が亡くなり、志半ばで地元府中市に帰り、医師として働く傍ら、漢学の勉強に励んでいた。明治12年に全国的にコレラが流行し、多くの死者が出た。当時は原因も治療の方法も分かっていなかったため大変恐れられていた。医者の中には、自分に感染することを恐れて往診を断る者もいたが、昌言はどんな条件の中でも全ての患者の命を救うため治療にかけ回った。ついには、昌言もコレラに感染してしまい一生を終えるという実話である。体調がすぐれない中でも病人を助けようと往診に向かう昌言の生き様から、医者として正しいと信じる道を行動に移す強い意志とそれを貫き通すことの大切さを伝える資料である。また、先人の努力や精神が現在も受け継がれていることにも気付くことができる。と考える。



【心に響くちょっといいはなし】

明治12年頃、人力車を引いていた若者がいた。彼は、毎日昌言からお呼びがかかり、昌言を乗せて往診に行くことを誇りに思っていた。人力車を引いていると、昌言が往診に行く場所は、どうも治療費が払えないような患者のところばかりなので、不思議に思い、「藤野先生、どうして治療費が払えないような家ばかり往診に行かれるのですか。」と尋ねた。すると、昌言は、

「ありゃあのお、お金のある者は、ちょっと不安なことがあったら、すぐ相談に来る。治療費が払えん者は、ぎりぎりまでがまんして、もうどうにもならんようになって私のところに来る。だから、私が行かなければならんのは、命がどうにもならん治療費が払えん人の家なんじゃ。」

と話をされたそうだ。

これは、若者の甥にあたる方が話されていた実話である。

ウ 資料全文

「わたしが行かねば」



府中市の府中公園にあるお堂では、毎年10月6日に、たくさんの方が集まります。

今から180年ほど前のことです。

現在の府中市府中町朝日町に藤野昌言ふじのしょうげんが生まれました。

昌言は、天保13（1832）年、医者てんぽうの家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。

19歳のある日、「父危篤きとく」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、

お父さんはもう亡くなっていました。

父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。

昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。

医者になってからも昌言は、府中の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ。」と言われるようになりました。昌言は、家での診察しんさつだけではなく、往診おうしんにも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、

「これも薬のうち。」
と、米やみそを置いて帰ることもありました。

明治12（1879）年夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたりげりをしたりする病気で、当時は原因が分からなかったもので、十分な治療ができませんでした。うつた人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも、毎晩毎晩医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。

どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもいられず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療を続けました。

昌言は、^{おうしん}往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、^{しんさつ}診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は体がだるく、どうしても^{しんさつ}診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は、

「今日是一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさんがかけ込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは・・・。」

お願いでございます。二人の命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、言いました。昌言は、家族が必死に止めるのも聞かず、ふらつく足で立ち上がり、

「^{おうしん}往診いたしましょう。」

と、答えました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は、涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて^{おうしん}往診に出かけました。^{しんさつ}診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに^{かんせん}感染していたのです。

高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝の気持ちを込め^{せきひ}石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭」と呼ばれ、130年以上経った今も続いています。

【参考文献】

藤野守一（著）「医師 藤野昌言」

本山町郷土史会（編）（1986）「もとやま2号」「もとやま4号」 本山町 本山町郷土史会

村上正名（著）（1981）「府中散策」 佐々木印刷出版

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

昌言の人間的な弱みや葛藤と行動との対比を中心にした展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 強い意志 1－(2)

(イ) ねらい 家族に涙ながらに押しとどめられ、しばらくだまっただまま考えている昌言の気持ちを考えることを通して、自分でやろうと決めたことはあきらめずに取り組み、粘り強くやり遂げようとする実践意欲を培う。

(ウ) 資料名 「わたしが行かねば」

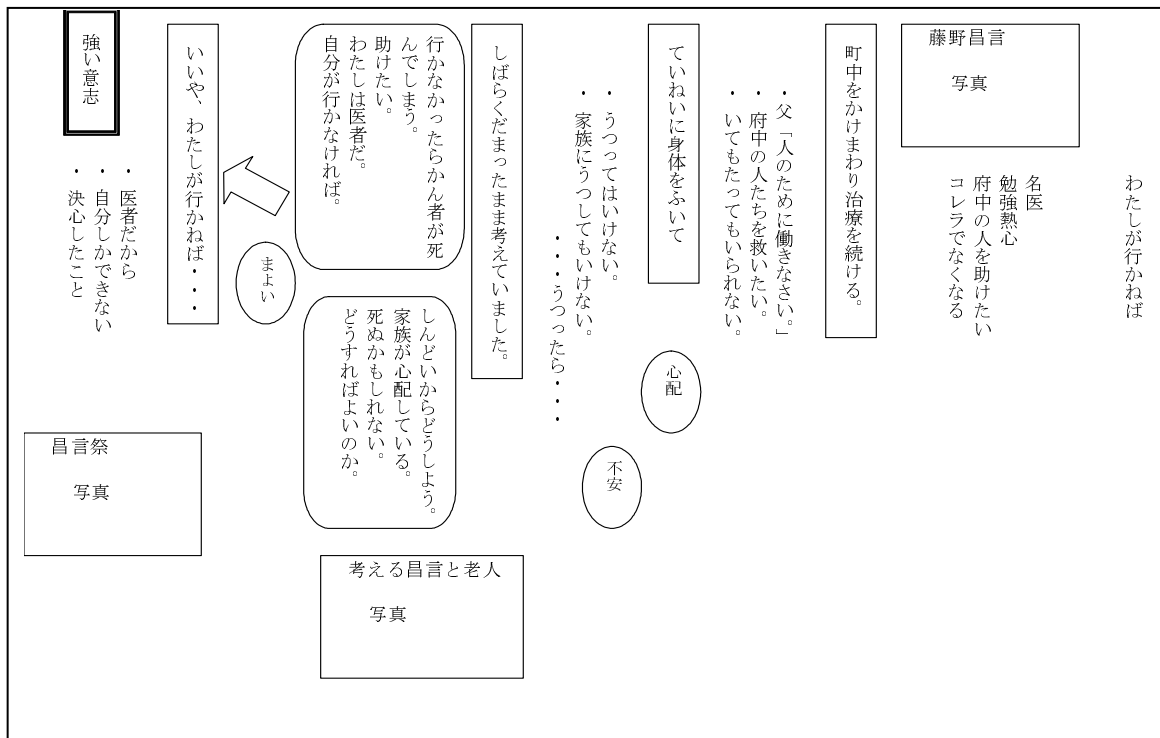
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 藤野昌言について想起する。	○ 藤野昌言は、どんな人だったか。 ○ 昌言祭の映像を見よう。	○ 社会科の学習や、社会見学と関連付けて、想起させる。 ○ 今も引き継がれていることを知り、資料への興味付けをする。
展開	2 資料を読んで考える。 3 自分の生活を振り返る。	○ 町中をかけ回り治療を続ける昌言は、どんなことを思っていただろう。 ・父の言葉を忘れずに働こう。 ・府中の人たちを病から救いたい。 ・いてもたってもいられない。 ○ 昌言は、往診から帰って体をふいている時どんな気持ちだったのだろう。 ・自分がうつたら診察できない。うつるわけにはいかない。 ・家族にうつしてはいけない。 ・うつたらどうなるのだろう。 ◎ 家族に涙ながらに押しとどめられた昌言は、しばらく黙ったままどんなことを考えていただろう。 ・今日はしんどいからどうしよう。 ・家族に心配をかけている。 ・行かなかったら患者さんが死んでしまう。 ・自分が行かなければ誰も行く人がいない。 ○ なぜそこまでして昌言は、行ったのだろう。 ・医者だから。 ・自分しかできないから。 ・自分でやろうと決心したことだから。 ○ 自分で決めて一生懸命がんばっていることは、どんなことだろう。	○ 往診＝感染という恐怖がある中での昌言の行為であることに気付かせる。 ○ 「不安や心配なことはないだろうか。」と切り返し発問で弱さに共感させる。 ○ 昌言の気持ちをワークシートに書いて自分の考えをはっきりさせる。 ○ 「どうして医者だったら助けなければならないのか。」と切り返し発問をして昌言の気持ちに迫らせる。 ☆ 医者として正しいと思うことを貫き通そうとする昌言の強い意志に気付かせ、自ら考えを深めさせることができたか。 ○ 医者としてのやりがいや強い意思が昌言の行動を支えていたことに気付かせる。 ○ 与えられたものではなく自分で決めてがんばっていることを振り返らせる。
終末	4 まとめをする。	○ 藤野昌言へ手紙を書こう。	○ 昌言と自分を重ねて見つめさせる。

(才) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		中心人物の心情	児童の意識の流れ
	中心人物 (藤野昌言)	その他の人物		
○府中公園		十月六日にたくさんの人々が集まる。		
○医者になった藤野昌言	・医者になるための勉強 ・父危篤, 亡くなる。 ・父の言葉が忘れられず迷わず医者になる。 ・人々を病から救いたい。 ・治療費が払えない患者の往診に出かける。	父の言葉 「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」	父の後を継いで医者になる ・お父さんの後をついで、医者になるろう。 ・府中市の人たちを病から救いたい。 ・お金がないなら、米やみそを置こう。	○医者になってからも熱心に勉強を続けるなんてすごい。 ○治療費が払えない患者も診察している。
○明治十二年夏コレラが全国的に流行	・毎晩毎晩、医学の本を読んで薬の調合をくり返す。 ・昼も夜も食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療を続けた。 ・往診から帰ると、家の外で着物を脱ぎていねいに身体をふいてから家に入る。	府中の人々 ・コレラにうつり、コロコロリとなくなる。	町中をかけまわり治療を続ける ・どうしたら病気を治すことができるのだろう。 ・府中の人々を助けたい。 ・コレラにかかってはいけない。家族にうつしてはいけない。	○食べることも寝ることも忘れて治療を続ける。 ○昌言や家族にうつったら大変なことになる。
○二カ月後の秋	・体がだるく、どうしても診察室に足が向かない。	家族 ・今日は、休んでくださいとたのむ。 おじいさん 「二人の生命をお助けください。」 家族 「どうか今日だけは、お休みください。」と必死で止める。 「あなたが倒れてしまいます。」と涙ながらに押しとどめる。	診察室に足が向かない ・もうすぐ患者が来るのに体がだるい。 ・二人を助けるために、往診しよう。	○大丈夫だろうか。 ○昌言も疲れ果てているのにどうするのだろうか。 ○家族も心配している。
○昌言祭	・ふらつく足で立ちあがり「往診いたしましたよ。」 ・しばらくだまつたまま考える。 「いや、わたしが行かねば。」家族を振り向きながら往診に出かける。 ・その場に倒れる。 ・コレラに感染 ・高熱に苦しみながらも患者を心配する ・息を引き取る。四十七歳	おじいさん 「これで助かります。ありがとうございます。」 感謝の気持ちを込めて、石碑を立てる。	いいや、わたしが行かねば ・私が行かなければ誰も行く人はいない。医者だから行かなきゃ。 ・放っておいたら大変なことになるだろう。 ・自分が死んだら患者たちはどうなるのだろう。	○こんな状態でも昌言は行くのか。 ○医者になって人のために働こうと決めたことを最後まで貫いている。 ○昌言の強い意思が今も引き継がれている。

(カ) 板書例



【板書の構成】

ポイントになる言葉を短冊で用意したり、昌言の思いがよく分かるように、言葉を整理したりして板書する。特に、中心発問については、行こうかどうしようかと迷っている気持ちを上段と下段に分けて整理し、揺れている気持ちを視覚的にはっきりさせる。その上で、行かなくてはこの思いに至る価値の高まりが分かるように工夫する。そして、「いいや、わたしが行かねば。」と決心した思いにつなげる。

(キ) ワークシート

わたしが行かねば

年 組 ()

☆ 家族に押しつけられた電話で、うしろの
だもったあそびをいじめるのを助けてくれたため。



A large, rounded rectangular area with a dashed line border, intended for writing or drawing.

(2) 活用のポイント

昌言は、医者になろうと決心したことを最後まで貫き通している。自分の体は省みず、府中の人々を救いたいという思いで診察を続けている。強い意志をもって診察に当たる昌言の立場に立って、その思いを考えさせることで、自分で決めたことを粘り強くやり遂げようとする実践意欲を培うことができると考える。

そのために、昌言の心情に焦点を当てた発問をする。まず、けんめいに診察する昌言の気持ちを問うが、そこで、自分も感染する心配があった中での行動であったことに気付かせる。それは、往診から帰って体をふく行為からも考えさせられる。中心場面では、いったんは「往診いたしましょう。」と答えたものの家族に涙ながらに押しとどめられて葛藤する昌言の気持ちを考えさせたい。

そこで、中心発問では児童に自らじっくりと考えを深めさせるために、書く活動を取り入れる。そして、思いを交流する中で、「いいや、わたしが行かねば…」と言う昌言の言葉につなげることで、迷った末に医者として正しいと思うことを貫き通そうとする昌言の強い意志に気付かせる。その際、「なぜそこまでして行ったのだろうか。」と考えさせることで、医者としてのやりがいや強い意志が昌言の行動を支えていたことに気付かせる。終末では、昌言の手紙という形で昌言の生き方と自分を重ねて見つめさせる。

自分たちが知らない時代の資料にスムーズに入るためには、場面絵を活用するなど資料提示にも工夫が必要である。昌言祭は、地元の人々に受け継がれ、今も続いている。昌言の強い意志が、130年以上経った今でも引き継がれていることを感じさせてくれる。

ア 発問の工夫

昌言の行動の底にある心情に焦点を当てた発問にする。中心場面では、家族に涙ながらに押しとどめられて迷う昌言の気持ちを考えさせる。

イ 書く活動を生かして

- ・中心発問では、昌言の心の葛藤をじっくり考えさせるためにワークシートに自分の考えを書かせる。

- ・終末の昌言への手紙は、自分で決めたことで、あきらめずに粘り強く取り組んでいることを書かせる。

ウ 資料提示の工夫

- ・導入では、学習したことと関連させて、藤野昌言の功績や社会状況について想起させる。
- ・資料をより身近に感じさせるために、実際に行われている昌言祭の様子を映像で見せる。

(3) 授業の実際—児童の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開では、まず町中をかけ回り治療を続ける昌言の思いを考えさせた。児童は、医者になろうと決心した思いを忘れず、府中の人を助けたいと治療を続けている昌言の思いをとらえることができていた。

そして、往診から帰って体をふいている昌言の思いを考えさせた。「不安や心配はないだろうか。」と補助発問を考えていたが、もし自分にうつったらどうなるのだろうかという不安や心配な気持ちは、児童の発言の中から出てきた。

中心場面では、「家族に押しとどめられた昌言は、しばらく黙ったままどんなことを考えていただろう。」と発問した。いったんは往診しようと決心したものの、家族に押しとどめられて葛藤する状況を考えさせるために、書く活動を取り入れた。交流する時に、「医者だから行く。」という考えに、「どうして医者だったら行かないといけないのか。」と切り返すと、「自分行行って助けたい。」「自分が決めたことだから。」と強い決心、意志があったことを考えることができた。また、「自分だったら怖くていけないかも。」と、人間としての弱さに気付く発言が出ることで、昌言の意志の強さをより深く考えることができた。

イ 書く活動を生かして

中心場面では、「どうしたらよいのだろうか。」と迷う気持ちや、「自分がコレラにかかったらどうなるのだろうか。」という不安な気持ちが出てきた。しかし、ほとんどの児童が、「患者を助けたい。」「わたしが行かないと死んでしまう。」「医者だから行こう。」と考えた。家族に引き止めら

れて迷いはあったが、自分が決めた医者として成すべきことを貫き通そうとする昌言の思いに迫ることができた。

終末では、自分を振り返り、自分で決めてがんばっていることを昌言への手紙という形に表した。

- ・昌言さんは、いやだと思う時はありませんか。わたしは、時々もういやという時があります。でも、わたしが決めたので、もっとがんばろうと思います。
 - ・昌言さんと同じように、自分が出ると決めたピアノのコンクールでうかるようにがんばります。
 - ・昌言さんの強い意志で勇気がもてました。わたしも、ゆめをもってがんばっていきたいです。
- このように、昌言の生き方と自分の努力を重ねてとらえることができた。

ウ 資料提示の工夫

昌言の生い立ちや、時代背景などは、事前に学習したことを想起する事で、資料の世界にスムーズに入ることができた。

また、導入で昌言祭の実際の映像を見たことは、児童の興味を引き付け、資料への関心を高めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

○ 社会科

事前に「わたしたちの府中市」という副読本を活用して『コレラとたたかった藤野昌言』を学習する。昌言の生い立ちや時代背景について知ることができる。

○ 特別活動（社会見学）

府中公園そばに藤野神社や石碑が建てられている。日常的に訪れる機会はありませんと思われるので、社会見学などの機会を利用して現地を訪れ、自分の目で確かめると資料がより効果的である。

○ 特別活動（発表会等）

学習した内容を、発表会等の機会を利用して劇化する事も考えられる。他の学年や地域の人々へ広める場にもなる。

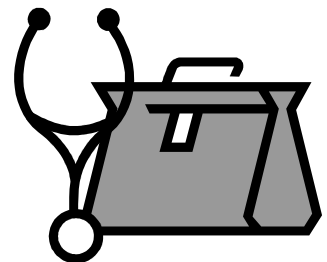
(5) 心のノートを活用

○ 終末で、「心のノート」P.17を活用する。

「目標をもってチャレンジしよう」に自分の目標を記入し、やり遂げようという実践意欲を高める。

○ 事後指導で、「心のノート」PP.18-19を活用する。

自分が決めた目標を続ける秘訣を聞いて生かそうとする気持ちをもたせ、目標達成時に色をぬることにより、継続へのさらなる意欲を育てる。



教材活用例(2) 「希望の花」

〔小学校高学年 主題：希望をもって 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—川尻浦久蔵^{かわじりうらきゆうぞう}—について〉

川尻浦久蔵は、江戸時代日本に初めて種痘法を持ち帰った人物である。しかし、当時の藩には相手にされず、持ち帰った種痘は没収されてしまい、国内で先駆けとなるはずだった種痘法を普及することはできなかった。

久蔵は、漂流をきっかけとして、様々な困難にぶつかった。それらに立ち向かって生き抜いてきたからこそ、種痘法に出会い、日本に持ち帰ることができたのである。

天明7年 (1787年)	川尻村に生まれる。
文化7年 (1810年)	新酒番船「観亀丸」に水主として乗り込み出発。
文化7年	嵐に遭い破船する。太平洋を漂流。
文化8年	ロシアのカムチャッカ半島に座礁する。
	医師ミハイラ先生と出会う。 凍傷の手術により、足の指を切断する。
文化9年	乗組員達が日本に帰る船が出航する。 久蔵一人、ロシアに残される。
	義足をつけて歩けるようになる。
文化10年	種痘法に出会い、久蔵も種痘法を行うようになる。
	種痘を持って日本に帰国する。

川尻浦久蔵^{かわじりうらきゆうぞう}の経歴

(イ) 4コマ絵

久蔵がぶつかった困難と、それによって種痘法に出会ったことを史実を基に整理した。そして、久蔵が困難を一つ一つ乗り越え、前向きに生きていこうとする場面を中心とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	漂流したロシアで吹雪の中をさまよひ、行き倒れた久蔵は仲間とロシアの人たちに救われるが、凍傷のため、足の指を切断する手術を受ける。	凍傷の手術をした足の傷が治っていなかったため、日本に帰ることが許されず、一人ロシアに残され、氣力を失う。	ロシアの高い医療技術を目の当たりにする。 ミハイラ先生の下で、種痘法を行うようになる。	種痘法に必要な道具をそろえて、日本に帰る船に乗る。

イ 資料の解説

【作成の要点】

学習指導要領解説には、「・・・様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。その際、希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えられるようにする・・・。」と記述されている。

主人公である川尻浦久蔵は、予期していなかった船の遭難から、さまざまな困難にぶつかる。しかし、それらの困難に一つ一つ立ち向かい、前向きに生きていこうとする強い意志と実行力があつた。さらに、種痘法に出会い、体の不自由な自分でも人のために役立つことができるという希望をもつことで、さらに意欲をもつことができ、前向きに生きていこうとする。

このような、川尻浦久蔵の生き方にふれることで、困難なことに出会っても希望をもって取り組んでいこうとする心情を育てていけると考え作成した。

また、川尻小学校のPTAは、「ふるさと川尻をこよなく愛し、川尻のために尽くそうとした人物がいたことを、子どもたちに語り伝えていきたい。」と絵本「川尻浦久蔵」を作成している。本資料を活用して学習を進めていく中で、川尻浦久蔵の気持ちや行動を支えた故郷川尻への思いにもふれさせていくこともできると考える。



【心に響くちょっといいはなし】

平成 16（2004）年、川尻小学校創立 130 周年という節目の年に、この物語を自分たちの手で子どもたちに語り伝えようという計画がもち上がり、PTA が絵を描いたり物語を編集したりして絵本を発行。低学年向けと高学年向けの本を作成している。

絵本発行に当たって、昭和60年に刊行された「花渡る海」の内容を参考になっている。

（その中に、天然痘予防接種をした部分がはれると小豆のように赤みをおび、小さな花のように見えたという件がある。このような状態になれば、一生天然痘にかからないということである。ちなみに、本資料の題名は、そのエピソードを基につけたものである。）

作者である吉村昭氏は、平成 16（2004）年 5 月 29 日の読売新聞の歴史エッセーで次のように語っている。

小学校の PTA の婦人達が、久蔵を主人公にした私の小説「花渡る海」（中公文庫）を読んで、郷土でも知られることのない久蔵をせめて小、中学生にも知ってもらおうとして絵本をつくった。文章も絵もよく、それらが小、中学生に贈られている。

久蔵は、初めて郷里でよみがえったのである。このような市井の婦人たちの行為が、日本の歴史をより豊かなものにしてゆく。「花渡る海」を書いた私としても、書いた甲斐があつたと思っている。

ウ 資料全文

「希望の花」

今から200年ほど前の江戸時代のことである。

久蔵^{きゆうぞう}たち船乗りを乗せた樽廻船^{たるかいせん}⁽¹⁾は、江戸を目指して旅立った。しかし、何日か過ぎた頃、海は荒れくるい、一番大事な舵^{かじ}が強い波にもぎとられてしまった。食料も水も少なくなる中、船は2ヶ月半の間、広い太平洋を流され続けた。ようやくたどり着いたところは、氷におおわれた国、ロシアのカムチャッカ半島⁽²⁾だった。

船乗りたちは、吹雪の中、助けを求めて歩き始めたが、そこは見渡す限り氷の平原でしかなかった。寒さのために次々と仲間が死んでいった。久蔵もとうとう一歩も歩けなくなり、氷のように冷たい雪に埋もれて体の感覚もなくなっていった。自分も死んでしまうのだとあきらめそうになる度に、故郷の景色や母の姿が浮かんでは消え、運よく仲間やロシアの人たちに助け出されるまで、なんとかふんばることができた。

しかし、雪の中に3日間も埋もれていた久蔵の足の指はひどい凍傷になっていた。ロシアの医師、ミハイラ先生に診てもらくと、凍傷^{かじ}になった足の指を切り取らなければ、全身が腐ってやがて死んでしまうと言われた。そのころの手術^{かじ}は麻酔もなく、想像を絶する痛みと苦しみをともなうものだった。久蔵は迷ったが、歯を食いしばり激しい痛みをたえ、右足の指2本と左足の指すべてを切り取る手術をうけた。

その頃、船乗りたちは、ロシアの船で日本に帰ることができることになった。久蔵も、日本に帰りたい一心で痛みをこらえ船に乗ったが、まだ傷口が完治していないことを理由に、一人船から降ろされてしまった。

翌朝早く、船の出発を告げる合図で目を覚ました。周囲を見渡したがだれもいない。自分一人が取り残された孤独感に、久蔵は顔を手でおおい、体をふるわせて泣いた。

それからというもの久蔵は、食事をとることもしなくなり、ただ横になっているだけの毎日が続いた。

そんなある日、天然痘^{てんねんとう}⁽³⁾の予防接種の話を目にした。当時、天然痘は世界中で恐れられていた伝染病だった。

「日本では、天然痘は、流行すれば多くの者が死んでしまう病気なのです。本当にそれを予防することができるのですか。」

異国の地ロシアであっても本当にそんなことができるとは信じられなかった。

「確かに、一度天然痘にかかると死ぬ可能性は高い。だからこそ予防をするのだ。」

真剣に話すミハイラ先生の言葉に興味をもった久蔵は、予防接種を見せてもらうことにした。

ミハイラ先生は、子どもたちに腕を出させ、次々と小刀で傷をつけてから薬を塗りつけ、布を巻いていった。

(これだけ?)

一生、天然痘にかからない方法だということで、大がかりなことをするにちがいないと思っていた久蔵は、あまりにも簡単な方法にあっけにとられてしまった。久蔵の故郷では、毎年、天然痘の流行がしずまるようにと大々的に祈とう⁽⁴⁾が行われていたことを思い出した。それでも、たくさんの人が天

然痘で命を失っていたのだ。

久蔵はその夜、ミハイラ先生の部屋に行き、あらためてその日見た天然痘予防の方法について尋ねた。その技術は、聞けば聞くほどすばらしかった。熱心に聞いていた久蔵を見て、ミハイラ先生は5日後の診察も見にくるようにと言った。

5日後、予防接種をした子どもたちが集まってきた。ミハイラ先生を見るなり泣き出す子もいたが、ミハイラ先生はおかまいなしに、その子たちの腕を出させ、見つめると、

「アニ ツベート（花が開いた）」

と笑顔で満足そうに言い、親たちとともに喜んでいた。

「花？」

久蔵も、子どもたちの腕を見せてもらおうと先日予防接種をした部分がはれて小豆のように赤みをおびていた。それはたしかに小さな花のように見えた。

「なぜ、そんなに喜んでおられるのですか。」

「子どもたちの腕にこの花が咲けば、子どもたちは一生天然痘にかからない。」

「それは本当ですか。ミハイラ先生、私にも予防接種の方法を教えてくださいませんか。」

「次に私が予防接種をするのを、よく見ていなさい。きっと君にもできるようになる。」

久蔵は体がふるえるのを感じた。

その日の帰り道、氷の溶け出した海に目をやった。故郷のおだやかな海とそこでくらす人々を思い浮かべながら、久蔵は固く口を結んでうなずいた。

それからというもの、久蔵は毎日ミハイラ先生のもとに通い、予防接種があると聞けば、助手として付き添い、大切なことをもらさないように見たり聞いたりメモに書きとめたりした。天然痘予防についての本も読んだ。そのうち、ミハイラ先生から許しを得て、久蔵も一人で予防接種ができるようになった。くり返し予防接種を行うと手際よくできるようになり、ロシアの人たちから「ドクトール キュンゾ（久蔵先生）」と呼ばれるようになった。

ついに、久蔵が日本に帰ることが決まった。久蔵の「故郷に持ち帰り、医者としてたくさんの人の命を救いたい」という強い思いに、ミハイラ先生は、予防接種に必要な道具をそろえてくれた。

いよいよ船出の時、久蔵の胸は高鳴っていた。そして、行く手に広がる、きらきらと輝く海をじっと見つめていた。

【注】

- (1) 江戸時代に、主に上方から江戸に酒荷を輸送するために用いられた廻船（貨物船）のこと。
- (2) ロシア連邦東部にある大きな半島。アジア大陸北東部に位置し、北北東から南南西に長く延びている。
- (3) 伝染力がきわめて強く、昔は大流行を繰り返して多数の死亡者を出した急性発疹性伝染病。
- (4) 修行によって得たと信じられる法力によって信者のさまざまな欲求を実現しようとする行為。

【参考文献】

吉村 昭（著）（1988）「花渡る海」中央公論新社

川尻町立川尻小学校 PTA（発行）（2004）「川尻浦久蔵」

川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（2007）「川尻町誌 資料編」

川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（2008）「川尻町誌 通史編」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

故郷への思慕を支えに希望をもって生きようとする久蔵の気持ちを考える展開
～ 心情曲線を活用した指導 ～

(ア) 主題名 希望をもって 1ー(2)

(イ) ねらい 天然痘の予防接種に出会った時の久蔵の気持ちを考えることを通して、希望と勇気をもって着実に前進していこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「希望の花」

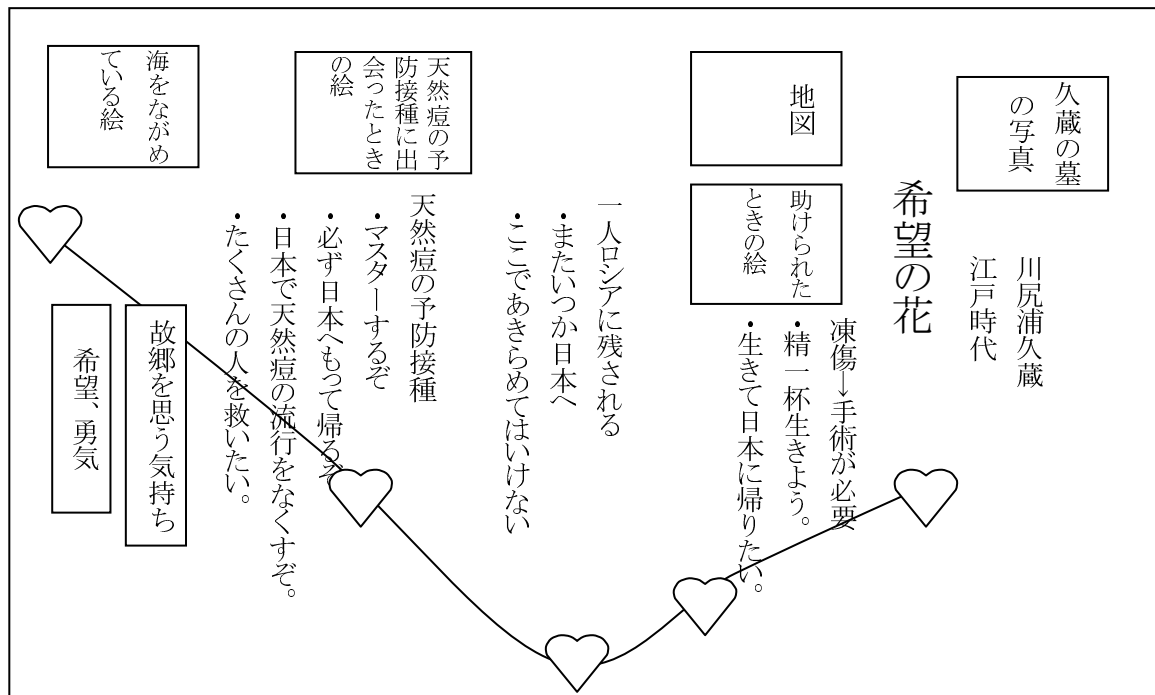
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 写真を見て、久蔵の存在について知る。	○ 1枚の写真を見てみましょう。 ・お墓の写真だ。 ・だれのお墓だろう。	○ 地域の方が今も大切に守っているお墓であることを伝え、久蔵のことを知らせる。
展開	2 「希望の花」を読んで考える。	○ 迷いながらも久蔵が、手術をすることを決めたのはなぜだろう。 ・死にたくなかったから。 ・精一杯生きよう。 ・生きて日本に帰りたい。 ○ 一人だけロシアに残され、ただ横になっているだけの日々を過ごす久蔵は何を考えていただろう。 ・もう生きる望みもない。 ・もう故郷をみることはないだろう。 ・これからどうなっていくのだろう。 ◎ 固く口を結んでうなずいたときの久蔵は、どんな気持ちだったのだろう。 ・天然痘の予防接種をマスターするぞ。 ・必ず、この方法を日本へ持って帰るぞ。 ・日本に帰って、天然痘の流行をなくすぞ。 ○ 行く手に広がる、きらきらと輝く海は久蔵に何を語りかけているのだろうか。 ・あきらめないでよく頑張った。 ・君の未来は希望にあふれているよ。 ・故郷に帰ってもしっかり生きていこう。	○ 場面絵や地図等を提示し、内容をつかめるようにする。 ○ 久蔵の気持ちを、心情曲線で表し、気持ちの変化が分かるようにする。 ○ 見知らぬ土地にただ一人残され、絶望感から生きることへの希望を失いどん底にある久蔵の心情をしっかりとさえる。 ○ 久蔵の故郷への思いが久蔵の希望や勇気を起こさせたことに気付かせる。 ☆ 心情曲線を板書することにより、久蔵の気持ちの高まりをつかみ、自分なりに思考を深めることができたか。
	3 生活を振り返って考える。	○ くじけずに頑張ってよかったなと思うことはありませんか。	○ 努力には、強い心や周囲の人などの支えがあることに気付かせる。
終末	4 教師の説話を聞く。		○ 教師の体験談を話し、生活へと広げる。

(才)資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情（久蔵）	児童の意識の流れ
	中心人物（久蔵）	その他の人物（ミイロ先生）		
○漂流したロシアで吹雪の中をさまよひ、行き倒れた久蔵が仲間とロシアの人たちに救われる。	・雪に埋もれてしまい、故郷を思い出しながら、もう死んでしまうのだとあきらめそうになるが、故郷や母の顔を思い浮かべふんばる。 ・仲間とロシアの人たちに助け出されたが、足の指が凍傷になっていた。		雪の中からの救出 ・生きて故郷に帰らなければ。 ・生きていてよかった。	○助かってよかったな。
○凍傷のため、足の指を切断する手術を受ける。	・迷いが、手術することを決心する。	・凍傷について伝え、手術を行う。	手術を決心 ・死にたくない。ミイロ先生を信じてみよう。	○よく決心したな。
○足の傷が治っていないかったため、日本に帰ることが許されない。	・一人船から降ろされ、船の出発の合図を聞きながら、孤独感を感じる。	・落ち込んでいる久蔵を何度も励ます。	一人ロシアに残る ・みんなと一緒に日本へ帰りたい。 ・このまま死んでしまった方がましだ。	○故郷に帰ることができなくて、かわいそうだな。頑張ってほしいな。
○天然痘の予防接種があることを知り、ミイロ先生の下で、接種法を行う。	・接種法について知り、日本にこの医療を伝えたいと希望を持ちながら、自分で予防接種をするようになる。	・接種法について教える。	接種法を知る ・接種法を学ぼう。 ・接種法を日本へ持ち帰りたい。	○故郷のことを思っていて頑張ったんだな。目標を持つことで、人は頑張ることができるんだな。
○接種法に必要な道具をそろえて、日本に帰る船に乗る。	・接種法に必要な道具をそろえてもらい、乗組員々と出航する。	・接種法に必要な道具をそろえて持たせる。	帰国 ・故郷に持ち帰りたい。だれも人の命を救いたい。	

(力) 板書例



【板書の構成】

場面絵や地図等を示しながら、久蔵に降りかかった困難を場面ごとに整理して板書する。それぞれの場面で、久蔵の「心の温度」について考えさせハートを板書していく。そのハートをつないで心情曲線に表し、心情が高まったときに、故郷を思う気持ちが支えとなっていたことを感じ取らせる。

(キ) ワークシート

希望の花

☆固く口を結んでうなずいたときの久蔵は、どんな気持ちだったのだろう。

年 組 (

)

Handwriting practice area with seven vertical dashed lines for writing.



(2) 活用のポイント

本資料には、主人公である川尻浦久蔵が、予期していなかった船の遭難から、次々とぶつかる様々な困難に、一つ一つ立ち向かい、前向きに生きていこうとする実行力が描かれている。

久蔵は、自分の生き方について明確に目標を立て、それに向かって生きていたわけではない。しかし、漂流したロシアで種痘法に出会い、体の不自由な自分でも人のために役立つことができる、そしてその技術を日本へもち帰りたいという思いから、希望をもち、前向きに生きていこうと努力した。特に、絶望に打ちひしがれる久蔵がみせる人間の弱さは児童にとって共感しやすいものとする。また、そこから希望を見出す久蔵の姿（心の動き等）から、児童に希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えさせることは、自分の夢や希望が膨らんでくる時期の児童にとってよい機会となるものとする。

そこで、次のような工夫を取り入れた。

ア 発問の工夫

久蔵が、くじけそうになりながらも故郷のことを思いながら前向きに進んでいこうとする場面を取り上げて発問することで、久蔵の生き方への関心をもたせていきたい。

特に、中心発問では、種痘法に出会って希望をもつ久蔵の姿をより深く考えさせるために、故郷への思いが久蔵の希望や勇気を起こさせたことに気付かせていきたい。

イ 心情曲線を活用する工夫

久蔵は、くじけそうになりながらも、故郷の景色や家族を思い出すたびに、希望をもち立ち上がろうとする。その心情の変化を「心の温度」として考えさせ、ハートを板書していくことで分かりやすくまとめる。さらに、そのハートを線でつなぎ心情曲線を完成させることにより、久蔵の気持ちの高まりをつかませ、自分なりに思考を深らせていきたい。

ウ 資料を提示する工夫

本資料は、久蔵の様々な困難を描くため多くの場面が登場する。また時代背景も久蔵の気持ちを考えるためには欠かせない。

したがって、資料を短時間で分かりやすく理解

させるために、久蔵の絵本の中から挿絵を活用し、紙芝居のように提示しながら読んだり、地図を活用したりするなどの工夫が考えられる。

また、児童の反応を見ながら、理解しにくいところには注釈をいれながら資料提示をすることも大切である。

エ 書く活動の工夫

中心発問においては、ワークシートに書く活動を取り入れ、希望を見出したときの久蔵の気持ちについて、十分に時間をとって書かせたい。そのことにより、児童が自ら考えを深めたりする機会としたい。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

久蔵は、あまり知られていない人物であるため、導入では、久蔵の墓の写真を提示し、人物や時代背景に迫っていった。その際、子孫のない久蔵ではあるが、地域の方が大切に守っていることを知らせることで、身近に感じさせることができた。

展開では、様々な困難に立ち向かう久蔵の姿に共感させるために、久蔵がくじけそうになった場面を基本発問として取り上げた。心情曲線を活用するために、まず、場面ごとの久蔵の気持ちを「心の温度」に表させた。ハートを動かしながら自分が思うところで挙手させ、その理由を言わせることで、久蔵の気持ちを考えさせた。しかし、くじけそうになったとき、それを克服して努力するときの久蔵の気持ちを対比させようとする、発問が多くなり、時間不足となった。そのため、基本発問は、故郷を思う久蔵の気持ちが引き出せるものに整理し、補助発問を行うことで対比ができるようにした方がよかった。

中心発問については、天然痘の予防接種ができることを知ったときの久蔵の気持ちや久蔵が進んで天然痘の予防接種をするようになった理由を発問したが、「みんなを助けたかった」「この技術を広めたい」など、努力していこうとする前向きな意見は出るものの、その技術のない日本へ持ち帰ることを夢見て努力する久蔵の思いになりにくかった。そこで、海を隔てた日本への思いを感じさ

せるように、海を眺める久蔵の姿を資料に加え、その思いを中心発問で問うことで、故郷に対する久蔵の思いにも迫ることができるのではないかと考えた。

展開後段や終末では、単に体験談に終わることのないように留意し、くじけずに努力したときの思いを振り返らせたり、それを支えてくれる人がいたことに気づかせたりすることで、「がんばろう」という気持ちがあれば変わる」「どんなにつらいときでも支えてくれる人がいる」などの感想をもたせることができた。

イ 心情曲線を活用する工夫

久蔵の心情に迫るために、場面ごとに久蔵の「心の温度」を考えさせた。久蔵の心の温度を上げたものは何だったのかと問い返すことで、その時の久蔵の強い思いや心の支えとなった故郷についてふれることができた。しかし、資料の中にもたくさんの困難があり、その都度詳しく聞いていくと、時間がかかりすぎてしまった。そのため、焦点を絞って発問し、その前後の心情について対比させるような切り返しをしていくことで、関連させた発言を引き出せるのではないかと感じた。

ウ 資料を提示する工夫

時代背景もあり、内容がつかみにくいため、地図を用意したり、川尻小学校のPTAが作成した絵本の挿絵を見せながら資料を読み進めていくことで、場面場面の状況がつかめるようにした。また、資料を読みながら、わかりにくいところには注釈を入れるなどしていくことで、理解しやすくなった。しかし、資料そのものが長いため、資料提示だけで時間がかってしまった。資料提示は、挿絵をもとに内容把握ができるようにして、詳しく説明をしたいところは、発問をしたとき等にするのもよいと感じた。

エ 書く活動の工夫

中心発問について考えさせるところに、ワークシートを用意した。授業では、天然痘の予防接種ができることを知ったときの久蔵の気持ちや久蔵が進んで天然痘の予防接種をするようになった理由について書かせたので、予防接種だけに絞られた意見が多かった。

授業の終わりに、振り返りとして学んだことや

考えたことも書かせた。ほとんどの児童が、あきらめずに希望をもってがんばることの大切さについて書いていた。また、地域に久蔵のような先人がいたことへの驚きや誇りについて書いている児童もみられ地域教材を扱うことの大切さも感じた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

久蔵は、鎖国が行われていた江戸時代に生きた人物である。当時、異国の地を踏むことは犯罪であり、再び日本へ帰ることは死をも意味する。そのような時代の中で、久蔵がロシアで経験した出来事は、想像を遙かに超えるものであったに違いない。

しかし、久蔵は故郷を愛し、故郷を思いながら、新しい医術と向き合い、その技術を故郷に帰って発揮しようとする。

時代背景を踏まえた上で、久蔵がぶつかった困難や前向きな態度について考えられるよう、本資料を学習する時期は、社会科で江戸時代の鎖国について学習した後に実施することが望ましい。

また、資料は天然痘の予防接種について知り、胸躍らせる久蔵を中心に描いているが、資料には書ききれなかったエピソードがたくさんある。そこで、総合的な学習の時間に地域の先人調べを行うことで、道徳では知り得なかった久蔵の人生を調べていくこともできる。

(5) 心のノートを活用

ア 展開での活用

「心のノート」PP.18-19の「目標に向かう道にはいろいろなことがある」の図を活用し、板書の心情曲線と比較しながら、久蔵が乗り越えた困難や、それを乗り越えることができた理由について考えさせることができる。

また、展開後段で、「わたしが学びたい人物」について書かせることもできる。

イ 中学校の心のノートの活用

中学校の「心のノート」PP.24-25に「努力することってすばらしい」という、目標に向かうくじけない心についてまとめたページがある。くじけそうになったときに何が必要なのか、久蔵にとっては何が支えになったのかと考えさせるための資料として増刷りして活用することもできる。

教材活用例(3) 「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

〔小学校高学年 主題：郷土愛 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—和田吉左衛門—について〉

和田吉左衛門は、大竹及びその周辺を治める庄屋である。大竹をおそった大洪水により、小方村は大きな被害を受ける。吉左衛門は、小方村を取り戻そうと、干拓工事をすることを決意し、工事に必要な費用を私財を売ったり、借金をしたりしてまで準備する。そして、干拓工事は開始されるが、途中、台風により、干拓工事が台無しになってしまう。しかし吉左衛門の村を思う気持ちは揺らぐことなく、嘉永5(1852)年に干拓工事は無事終了した。



文政元年 (1818年)	小方村に出生。
天保7年 (1836年)	小方村庄屋に任ぜられる。
弘化2年 (1845年)	洪水が起きる。新町沖干拓工事の開始。
嘉永5年 (1852年)	新町沖干拓工事の終了。
嘉永6年	割庄屋に任ぜられる。
安政6年 (1859年)	コレラ流行。コレラ患者の救済に尽力。
慶応6年 (1870年)	第二次防長の役。罹災民救助に尽力。
明治17年 (1885年)	逝去(67歳)。
明治19年	楓園和田翁の碑、建立。

和田吉左衛門の経歴

(イ) 4コマ絵

新町沖新開干拓工事を中心に、和田吉左衛門の一生を史実に基づいて整理した。吉左衛門の小方村を思う気持ちが最も強く表れている場面を中心場面とし、起承転結で構成した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	和田吉左衛門は文政元(1818)年、小方村に生まれた。自然に囲まれた小方村で友達と遊んだり、村人と楽しくかかわったりしながら、すすくと育っていった。	吉左衛門が27歳になった時、小方村が洪水に襲われ、二度と生活できなくなるほどの大きな被害を受ける。吉左衛門は、小方村を取り戻そうと、干拓工事をするを思いつき、私財を売ったり、借金をしたりしてまで、干拓工事に必要な費用を準備する。こうして干拓工事が開始される。	干拓工事開始から1年後。再び大きな台風が大竹をおそった。この台風により、干拓工事は台無しになってしまう。工事を再開するか、中止するかで頭を抱え込んでしまう吉左衛門であったが、小方村を取り戻したいという思いから、工事を再開することを決意する。	干拓工事が無事終了した。村人たちは、干拓工事をした場所へと移り住み、いつまでも幸せにくらした。そして、150年以上たった今でも、この土地の上で、私たちの生活が営まれている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

児童が、普段何気なく過ごしている小学校生活。その生活が、実は和田吉左衛門たちの小方を思う気持ちによって支えられ、その恩恵を受けているということ、そして、毎日通っている小学校の前にある石碑が、実は吉左衛門への感謝の気持ちをこめて村人たちによって建てられた石碑であるということ、これらの事実を知らない児童が多い。そこで、身近であるが、児童が知らないこれらの事実を資料として取り上げ、児童にとって新たな発見、驚きのある資料、児童の生活と結びつける資料を意識しながら作成した。

児童の生活と結びつける資料を作成することで、地域の一員としての自覚を高めるとともに、あいさつ運動など、様々な活動へとつなげるきっかけとなる資料にすることを大切にしました。



【心に響くちょっといいはなし】

和田吉左衛門は、西郷隆盛とも交流があった。そうした中で、西郷隆盛からその人柄を認められ、「ともに新しい日本のために尽くしてみないか。」と、誘われたが、和田吉左衛門は「私が生まれた大竹を大切にし、大竹のために尽くしたい。」と、その誘いを断った。和田吉左衛門は、その言葉通り、長州戦役で被災した人たちの救済に当たったり、コレラ患者の看病に命がけで携わったり、洪水の被害にあった小方村の村人たちのために干拓地を築いたりするなど、大竹のために尽力した。

ウ 資料全文

「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」



和田吉左衛門は、1818年小方村に生まれた。とても優しく元気な子で、友達とよく野山や海や川で遊んでいた。また、村の誰からかわいがられ、すくすくと育っていった。

ところが、吉左衛門が27才になったある日、大変なことが小方村に起きた。大竹に大雨がふり、大こう水が小方村をおそったのである。この大こう水によって、小方村のいい谷では全ての家が流されるなどのひ害にあい、また、田や畑は二度と作物を育てることさえできなくなってしまった。村人たちは、生活することができなくなり、とほうにくれていた。

吉左衛門は、かわりはてた小方村の様子を見て、なみだを流し、その場にたちすくんだ。

しかし、「何とかしなければ。」と思い、どうすればよいかと考えた末、海に新しく土地を作る「干拓」という方法を思いついた。干拓をして、新たな田や畑を作り、村人たちに分け与えることができれば、村人たちはいつまでも幸せにらせると考えたのである。

しかし、干拓には、多くのひ用が必要である。けれども、今の小方村の様子では、村人からお金を集めることなどとうていできない。そこで、吉左衛門は、自分の家にある物を売ってお金にしたり、

借金をしたりしてまで、干拓に必ようなひ用を準備した。

こうして、ついに干拓工事が始まった。この工事には、小方村の村人など、千人をこす人々が参加し、一生けん命に工事にはげんでいった。

ところが、工事開始から一年たったある日、もうれつな台風が大竹をおそった。大雨がふり、強い風が吹きあれ、吉左衛門たちが干拓工事をしている場所に、海からの大きな波が、何度もおしよせた。吉左衛門や村人たちは、台風が通り過ぎるまでの間、心の底から工事の無事をねがうばかりであった・・・。

次の日、ようやく台風が過ぎ去った。しかし、まだ風は強く、小雨が降り続いている。そんななか、吉左衛門や村人は、大急ぎで工事場所へと走った。そして次の瞬間、吉左衛門たちは「あつ。」

と、声を上げ、その場にしゃがみこんでしまった。台風により、無ざんにもていぼうがこわされ、これまで一生けん命にがんばってきた工事が台無しになってしまっていたのである。

吉左衛門は、うなだれ、頭を抱え込んだ。

「これまでの苦労は、一体何だったんだ。全てが台無しになってしまった…。ここで工事を中止にすべきなのだろうか、それとも工事を続けるべきなのだろうか。」

そんな思いが、吉左衛門の頭の中をかけめぐる。その時、吉左衛門の耳に

「これでもう、小方村は、おしまいじゃ。」

と、力なくつぶやく村人の声が聞こえてきた。村人のつぶやきが吉左衛門の心の中で、何度も何度もこだまする。

吉左衛門は、拳をぎゅっと強く握りしめた。

「私は、必ず、この工事を成功させるのだ。」

こうして、干拓工事は、再開された。村人たちも、吉左衛門の思いにこたえようと、これまで以上に必死になってがんばった。

そして、工事開始から、6年たった1852年。

ついに吉左衛門や村人たちの思いがこめられた干拓工事が終了した。吉左衛門や小方村の人々は、その完成を手を取り合って喜んだ。

その後、村人たちは新しくできた土地へと移り住み、いつまでも幸せにくらした。

そして、吉左衛門がこの世を去ってから、150年以上たった今も、私たちは吉左衛門や村人たちの気持ちがこもった土地の上でくらしている。

私たちが、毎日のように勉強したり、友達と遊んだりしている小方小学校の土地も、実は、吉左衛門たちの手によってつくられたものである。

吉左衛門がこの世を去ってから2年後、大竹に住む村人たちが、和田吉左衛門に感謝の気持ちを込めて石碑を建てた。

これが、小方小学校の前にある「楓園和田翁之碑（ふうえんわだおうのひ）」である。

【参考文献】

わたしたちのまち大竹市 大竹市教育委員会

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

吉左衛門の村に対する思いを中心にした展開
～ 資料と現在の生活との結びつきを生かした指導 ～

(ア) 主題名 郷土愛 4－(7)

(イ) ねらい 人手も費用もかかった干拓工事が台風によって台無しになったにもかかわらず、工事の再開を決意した和田吉左衛門の気持ちを考えさせることにより、郷土を愛する心情を養う。

(ウ) 資料名 「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 アンケートの結果（地域の良い所）を知る。	○ 地域に住んでいて良かったと思うことはありますか。	○ アンケートをもとに意図的に指名する。
展開	2 資料の前半を読んで話し合う。	○ 吉左衛門は、小方村のことをどう思っているのでしょうか。 ・自然がたくさんあっていい。 ・好き。 ○ 変わり果てた小方村の様子を見た吉左衛門は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・悲しい。 ・なんとかしなければならぬ。 ○ 工事が台無しになった時、吉左衛門は、どう思ったのでしょうか。 ・工事を再開するべきか、中止にするべきか、迷った。 ◎ 吉左衛門は、どうして工事を続けることを決心したのでしょうか。 ・今までしたことが台無しになる。 ・小方村をこのまま終わらせたくない。 ・大好きな小方村を取り戻したい。 ・村人たちのためにがんばらなければいけない。 ・村のためにできることをしたい。	○ 迷った理由を明確にする。 ○ 工事を中止しようと思う気持ちに共感させる。 ○ 自分の考えを書く時間を十分に確保することで、一人一人に自分の考えをもたせる。 ☆ 導入を想起しながら、吉左衛門の小方村や村人を思う気持ちを自分とのかかわりでとらえることができたか。
	3 資料の後半を読む。	・いつも見ていた石碑は、吉左衛門に感謝の気持ちを表すために村人たちが建てたものだったなんて、知らなかった。 ・吉左衛門たちのおかげで、今の小方小学校や小方があるのだな。	
終末	4 ゲストティーチャーのメッセージを知る。 5 授業の感想を書く。	○ 地域の方からの手紙が届いています。	○ BGMを流すことで、雰囲気作りをする。 ○ 「地域」について考えさせる。

(オ) 資料分析表

分析項目	関係人からの意見・情報		主な意見・情報（和田昌彦氏）		記事の掲載の経緯
○小方村 で生まれ育つ ○小方村 が本洪水さ る	中心人物（和田昌彦氏）	その他の人達 （友人・近所）	<div data-bbox="853 302 885 840" data-kind="parent" data-rs="3"> 小方村で生まれ育った吉左衛門 変わり異てた小方村を見た吉左衛門 顔をかゆえこんが吉左衛門 仕事を再開することを決めた吉左衛門 </div>	・小方村は本洪水 ・冬場も寒くて寒い。 ・村のくがまゝ寒い。 ・本洪水は小方村を飲みました。 ・寒い。本村は凍死したらしい。 ・くがまゝ、小方村のくがまゝをき ・なごしきもた ・何うかよければ ・仕事を続ける。まだ お金が ・まだある。 ・仕事を再開して、まだ 金儲 ・が楽。仕事を再開して、 ・まだある。 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・小方村は本洪水で、大 ・洪水は小方村を飲みました。 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、	○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。
○田中昌彦氏 が本洪水さ る	小方村に生まれ育つ。寒い。村のくがまゝ寒い。	本洪水の被害により、小方村は本洪水で、大洪水は小方村を飲みました。	<div data-bbox="853 1034 885 1572" data-kind="parent" data-rs="3"> 小方村で生まれ育った吉左衛門 変わり異てた小方村を見た吉左衛門 顔をかゆえこんが吉左衛門 仕事を再開することを決めた吉左衛門 </div>	・仕事を続ける。まだ お金が ・まだある。 ・仕事を再開して、まだ 金儲 ・が楽。仕事を再開して、 ・まだある。 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・小方村は本洪水で、大 ・洪水は小方村を飲みました。 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、	○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。
○田中昌彦氏 が本洪水さ る	小方村に生まれ育つ。寒い。村のくがまゝ寒い。	本洪水の被害により、小方村は本洪水で、大洪水は小方村を飲みました。	<div data-bbox="853 1632 885 2170" data-kind="parent" data-rs="3"> 小方村で生まれ育った吉左衛門 変わり異てた小方村を見た吉左衛門 顔をかゆえこんが吉左衛門 仕事を再開することを決めた吉左衛門 </div>	・仕事を続ける。まだ お金が ・まだある。 ・仕事を再開して、まだ 金儲 ・が楽。仕事を再開して、 ・まだある。 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・小方村は本洪水で、大 ・洪水は小方村を飲みました。 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、 ・おれは、おれは、おれは、	○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。 ○田中昌彦氏 本洪水は小方村を飲みました。

(カ) 板書例

和田吉左衛門く新たな地を求めてく 小方の良いところ 歴史 自然 人	変わりはてた小方村を見た時 ・かなしい ・小方村を取りもどしたい	うなだれ、頭をかかえこんだ時 ・工事を再開するべきか、中止にするべきか、迷った。 ・お金がもつと必要になる。 ・台風がまた来るかもしれない。	吉左衛門は、どんな思いでこぶしをぎゅつとにぎりしめたでしょう。 ・今までしたことが台無しになる。 ・小方村をこのままで終わらせたくない。 ・大好きな小方村を取り戻したい。 ・村人達のためにがんばらなければいけない。 ・村のためにできることをしたい。
吉左衛門 写真	挿絵	挿絵	挿絵

【板書の構成】

板書では、資料の内容がイメージしやすいように資料提示の際に使用した挿絵を使用していく。特に、干拓工事が台無しになった場面と中心場面では、しっかりと児童の考えを板書するスペースを確保し、吉左衛門の思いについて、自分の考えを広げたり、深めたりするのに役立てていく。

(キ) ワークシート

「和田右左衛門物語〜新たな地を求めて〜」

年 組 ()

Ⅰ．右左衛門は、とうとう工事を続けることを決めたのでしよう。



Three horizontal dashed lines for writing.

Ⅱ．投票を通じた「地域」について考えたことを書きましょう。

Three horizontal dashed lines for writing.



Ⅲ．今日の投票を振り返って書きましょう。

○自分の考えをもちょうとができなかったか。	😊	😐	😞
○友達のことを聞くことができたか。	😊	😐	😞
○自分の考えを深めることができたか。	😊	😐	😞

(2) 活用のポイント

本資料は、大竹市の先人「和田吉左衛門」を取り上げた資料である。そして、人手も費用もかかった干拓工事が台風によって台無しになったにもかかわらず、工事の再開を決意した吉左衛門の気持ちを考えさせることにより、郷土を愛する心情を養うことをねらいとしている。

吉左衛門は、小方村に生まれ育った。そして、吉左衛門が27歳になった時、大竹に大雨が降り、洪水の被害にあった小方村や村人たちを何とか救いたいと思い、干拓工事を開始する。その後、様々な困難にぶつかるが、それでも最後まで干拓工事を完成させる。現在、小方小学校が建っている土地も、吉左衛門たちが干拓工事をした場所の上に建っている。また、小方小学校の校門前に立っている石碑は、村人たちの和田吉左衛門への感謝の気持ちをこめて建立されている。

しかし、これらのことを知っている児童は少ない。こうしたことから、吉左衛門たち先人の努力が自分たちの生活に強く結びついていることを知る機会にするとともに、吉左衛門たちの地域を愛する思いやその恩恵を肌で感じさせることのできる資料の特性を生かした活用を考えた。

ア 発問の工夫

導入では、地域の良いところについてのアンケート結果を知ること、本資料にでてくる地域の良さと現在の地域の良さのつながりを感じさせていく。

展開では、中心発問前に工事を中止にするか、再開するか、頭をかかえこんで悩んだ吉左衛門の思いに共感させていくことがポイントである。この場面は、この干拓工事を完成させるに当たり、吉左衛門が最も悩む場面である。小方村に生まれ育った吉左衛門は、干拓工事に必要な莫大な費用を家財道具を売ったり、借金をしたりしてまで準備した。そして、ようやく干拓工事を開始したのだが、工事開始一年後に台風が大竹を襲い、干拓工事が台無しになってしまう。工事を再開すると、費用がさらにかかるし、台風がまた来るかもしれない。また、村人たちもやる気を失っている。

こうしたなか、それでも、吉左衛門は村人たちのことを思い、干拓工事を再開させる。

この場面での吉左衛門の思いを中心発問「吉左衛門は、どうして工事を続けることを決心したのでしょうか。」と、児童に問うことにより、吉左衛門の郷土を強く思う気持ちへと迫ることができると考えた。

イ 生活との結びつき

吉左衛門の死後、村人たちが吉左衛門への感謝の気持ちをこめて、石碑を建立する。

この石碑は、小方小学校の近くに建立されているのだが、この石碑の意味を知っている児童は少ない。そこで、資料の後段においてこのことを記述する。

また、資料を範読する時には、資料の内容に合わせて、児童が小学校のグラウンドで遊んだり、学習したりしている写真や石碑の写真を視聴覚機器を活用して提示する。このことを通して、吉左衛門たちの小方村を思う気持ちがこもった土地の上で自分たちが生活していることに気付かせたり、吉左衛門の小方を思う気持ちに対する村人たちの感謝の気持ちにふれさせたりする。

これらのことを通して、児童に吉左衛門たちの功績や吉左衛門という大竹の先人を身近に感じさせることにつなげていく。

ウ ゲストティーチャーの活用

終末では、「和田吉左衛門はすごい。」という感想で終わらせないために、児童にとって身近な登下校見守りボランティアの方からの手紙を教師が代読する。

手紙の内容は、登下校見守りボランティアの方の活動に対する思い、地域に対する思いなどを中心に取り上げることとする。その際、授業のねらいに即し、ゲストティーチャーと事前に綿密な連携を図っていく必要がある。

(3) 授業の実際－児童生徒の反応を踏まえて－

ア 発問の工夫

導入では、地域のよさとして「お店」「自然」「人」に関する意見が出た。「自然」や「人」について

は、資料での小方村の様子と結びつけることができた。

中心発問「吉左衛門はどうして工事を続けることを決心したのでしょうか。」に対しては、「村人のため」「恩返し」「村への思い」という観点から、児童は自分自身の地域への思いと対比させながら自分とのかかわりで考えを深めようとしていた。

振り返りにおいては、「小方は昔の人ががんばって作ってくれた宝だとわかった。」「地域のために何かできることをしたい。」「小方に生まれてよかった。」など、郷土愛にかかわる感想が多く出た。

授業実践を通しての課題は、大きく三点ある。

一点目は、「交流する時間の確保」である。そのために基本発問を三つから二つに変更する必要があると考えた。一つ目の基本発問は「変わり果てた小方村を見た時、吉左衛門はどんな気持ちだったのでしょうか。」、二つ目の基本発問は「うなだれ、頭をかかえこんだ吉左衛門は、どんな気持ちだったのでしょうか。」とする。

二点目は、「中心発問に対して、児童が自分の言葉で考えるようにすること」である。学習指導案にある中心発問をした場合、自分の言葉ではなく、資料中の言葉から考えている児童がいた。そこで、中心発問を「吉左衛門は、どんな思いで拳をぎゅっとにぎりしめたのでしょうか。」とすることで、児童はより自分とのかかわりを通して自分の言葉で吉左衛門の思いを考えることができるようになると考えた。

三点目は「児童の思考を焦点化させること」である。そのため、中心発問に対する児童の考えに「費用」「恩返し」「村人のために」という観点からの切り返しをしていくことで、児童が何をどう考えていけばよいのか一層明確になると考えた。

イ 生活との結びつき

吉左衛門に対する感謝の気持ちがこもった石碑の写真や児童が小学校のグラウンドで遊んでいる写真を提示したり、資料の後半を読んだ時には、児童から「へえ、知らなかったあ。」「すごい。」

など、新たな発見に、感嘆の声が上がった。

学習後には、石碑を見に行く児童や登下校中に石碑に礼をして通っていく児童の姿が見られた。

ウ ゲストティーチャーの活用

地域のことや児童のことを思い、7年間、一度も休まずに登下校ボランティアをしてくださっている地域の方からの思いがこもった手紙であったので、児童は一生懸命にその内容を聞いていた。

振り返りには、「〇〇さんからの手紙から思うことがありました。それは、私たちはいろいろな人たちから愛されているということです。わたしは、これからもっといい町にできるようにがんばりたいです。」など、地域の方に対する思いを書いた児童が多くいた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科の歴史学習を通して、時代背景について理解させておくことで、資料についての理解をより深めることができる。

また、学習を通して、「地域のために何かできることをしたい。」という感想、「地域のためにがんばってくれている方に感謝したい。」という感想が多く出た。こうした思いが、総合的な学習の時間における学習発表会「和田吉左衛門物語」の発表に生かすことができた。また、地域の方への感謝の気持ちを伝える場を設定したり、地域のためにできることを考える中で、あいさつ運動をボランティアで取り組む活動へとつなげたりすることができた。

(5) 心のノートの活用

事後指導において、「心のノート」PP.104-105を活用することができる。

この授業を通して、地域を愛する心情を養った後、心のノートにある言葉にふれることにより、児童は「ふるさと」について見つめなおすことができる。また、ふるさとのために何が自分にできるのかを具体的に考えるきっかけにすることもできる。

教材活用例(4) 「武将茶人 ～上田宗箇～」

〔小学校高学年 主題：個性の伸長 内容項目：1の(6)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—上田宗箇—について〉

上田宗箇は戦国時代、織田信長や豊臣秀吉にも仕えたことのある武士である。

生きるか死ぬかの瀬戸際にいる当時の武士にとって茶道は心を安定させるためにとても大事であった。また、茶道具は戦の交渉に使われるほど重要なものだった。

宗箇は千利休や古田織部などからお茶を習ったが、茶杓や茶碗を自ら作るなど自分なりの茶道とはどのようなものかを追究し続けた。

晩年は現在の広島県廿日市市浅原で隠棲し、お茶を楽しむ毎日を送った。上田宗箇流の茶道は武家茶道として現在まで多くの愛好家によって受け継がれている。



永禄6年 (1563年)	永禄6年 尾州星崎に生まれる。 幼名 佐太郎
天正2年 (1574年)	丹羽長秀の侍兒となる。
天正6年	織田信長に仕え初陣する。
天正13年	豊臣秀吉の家臣となる。
天正18年	千利休の百回記の茶会に参加する。
慶長6年 (1601年)	古田織部の茶会に参加する。
慶長7年	徳島藩に招聘される。
慶長10年	紀州藩に招聘される。
元和元年 (1615年)	大阪夏の陣。「敵隠れ」を作成する。
元和5年	浅野長晟に同行し広島藩に移封される。 現廿日市市浅原に隠棲する。
慶安3年 (1650年)	88歳で没する。遺言により遺骨は砕かれ 早瀬の海に投げられた。

上田宗箇の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、宗箇の生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、4場面の構成とした。

	起	承	転	結
ジ 場 面 の イ メ ー ジ				
絵 の 説 明	上田宗箇は戦国時代、織田信長や豊臣秀吉にも仕えたことのある武士だった。 生きるか死ぬかの瀬戸際にいる当時の武士にとって茶道は心を安定させるためにとても大事なものであった。また、茶道具は戦の交渉に使われるほど重要なものだった。	宗箇は、千利休や古田織部にお茶についての基礎を学んだ。 宗箇は、師匠である織部から「あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか？」と指摘され、利休や織部のまねではない自分なりのお茶とはどんなものか悩み続ける。	大阪夏の陣のこと。待ち伏せていた竹やぶに好みの竹を見つけた宗箇はその場で茶杓を作りはじめた。敵の攻撃の中でも悠然と宗箇の好みの茶杓を作った。その茶杓は武士の力強さ、大胆さが表れ、宗箇は自分らしさをそこに见つけることができた。	宗箇は力強さだけではなく、さらに自分らしさを磨こうとやさしさや思いやりを茶道に取り入れていった。 自分流のお茶の在り方をつらぬき、武士の茶道の「美しき」とは何かを伝えた宗箇の茶道は広島に根付き、今でもたくさんの愛好家を育てている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

人は、その人にしかない性格や性質をもっている。自分の良さに気付くとともに、それを伸ばしていこうと努力すること、またその中で自分の短所にも気付きそれを改善していくことは、調和のとれた自己を形成するために必要なことである。

本資料は、戦国時代、広島に実在した武将茶人である上田宗箇について作成した資料である。上田宗箇流の茶道は、宗箇が自分らしい茶道の在り方を模索し続け、自分なりの茶道を確立したことにより現在まで受け継がれていることを、この資料によって考えさせていきたい。

宗箇は自分らしさがないことを師匠である織部に指摘され、自分らしさを求めて作品を作るのだが、ついに戦いの最中に作った茶杓を通して武士らしく、やさしく思いやりのある自分らしい茶道を見つけていくという物語である。

本資料により、自分の長所や短所、自分らしい個性を発見するとともに、その個性を自分らしく発揮していこうという心情を育てていきたい。

児童は自分の個性や自分らしさということを日常生活の中でいつも考えているとは限らない。したがって、学級活動で取り上げたり、各教科等の中で自分らしさや個性を発揮した場面などを意識させたりするなど事前・事後の取組が大変重要ある。

指導に際しては、戦国時代や茶道、茶道具などをイメージさせるのは難しいため、社会科での歴史学習、総合的な学習の時間等で茶道体験をしておきたい。また、自分らしさを発揮させる場としての図画工作科等との有機的な関連を図ることが大切である。



【心に響くちょっといいはなし】

上田宗箇流の茶道は現在も広島で受け継がれている。上田流家元である「和風堂」は広島市西区古江にあり宗箇のお茶を現在に伝えている。

上田宗箇は晩年を廿日市市浅原で過ごした。殿様でありながら村人に対して「年貢や労働に困ったことがあれば、隠さず申せ。」

「弱いものをいためつけるようなことを代官がすることは許さん。」

と、大変思いやりをもっていた。また村の行事に気軽に参加し交流するため、村人から「そうかさあ」（宗箇さん）といって親しまれた。

浅原で宗箇が3年間暮らした屋敷の周りには、青い石がごろごろしていて歩きにくい土地だった。村人はそこを通りかかった時にはいつもその青石を取り除いていた。宗箇はその青石を庭石にして立派な庭を造った。青石を持ってくる村人には一升の米を持たせたことから、「青石一升米一升」といわれ村人に語り継がれている。

宗箇の屋敷の近くの谷にどんな日照りでも枯れることのないわき水の池があった。お茶を点てるのに、また生活用水として宗箇はそれを汲んでいた。清らかな池と宗箇の人柄を重ね村人は「お手形の水」「岩船の水」といって大切にした。今でも宗箇講によって行われてきた追慕祭はこの地で行われている。

また、宗箇は庭園造りにも名があり、広島市内の縮景園は上田宗箇の作庭である。宗箇が手がけた庭園は日本各地に残されている。

ウ 資料全文

「ぶしょうちやじん 武将茶人 うへだ 上田 そうこ 宗箇」

みなさんは、上田宗箇流という茶道の流派を知っていますか。茶道というせんりのりきゅう千利休が広めたことで有名ですが、広島にはそれとは別のすばらしい武士の茶道が受け継がれているのです。

今から400年ほど前、上田宗箇という武士がいました。もとは、織田信長や豊臣秀吉に仕えたこともあり、後に芸州藩（今の広島）に迎えられ、大竹や廿日市をおさめる領主となったのです。宗箇は、体は小さかったのですが、いくさの時には勇ましい活躍をして、たくさんのほうびをもらうような武将でした。

当時、武士は、いくさのあいまに茶の湯を楽しみ、つかの間の安らぎを楽しんでいました。宗箇も茶の湯が大好きで、殿様を自分の屋敷にお迎えするときも、必ず茶の湯⁽¹⁾を点ててお迎えするほどの腕前でもありました。

宗箇はふるたおりべ古田織部という武士に茶道を習いました。織部は、信長や秀吉に仕えた有力な武士であり、千利休の弟子でもありました。織部は宗箇にお茶を伝えとともに、宗箇の生き方にも大きな影響を与えました。

ある時、織部は自分の弟子である宗箇にこう話しました。

「千利休は静かなものに美しさを感じ茶道を作りました。私は動きのある新しいものに美しさを感じ茶道を作り上げてきました。さて、あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか。」

宗箇は「はっ」としました。これまで自分は利休や織部から茶道を習ってきたが、自分らしさについて考えたことはなかったからです。

「私の茶道には自分らしさがない・・・」

宗箇は大きなショックを受けました。

宗箇は自分流の茶道をもとめて、いろいろと試してみました。ちやしやく茶杓⁽²⁾を作ってみたり、花入れを作ってみたりしましたが、満足のいくものができませんでした。茶碗も職人に任せず自分で作ってみました。しかしどれも利休や織部のいいところを真似ているようで、とても自分らしさを感じることはできませんでした。

「自分には新しいものは生み出せないのではないだろうか・・・」

そう悩む日々が続きました。

ある日、宗箇はいくさに出陣しました。大阪夏の陣⁽³⁾の戦いです。

宗箇はいくさの合間に心を落ち着けようと、一本の美しい竹を見つけ、茶杓を削り始めました。いつ敵が攻めてきて命を落とすかもわからない状況の中で、覚悟を決めながら、それでも使いやすいように心をこめて一心不乱に削り続けました。

無心に削った茶杓は、直線的で、実に味わい深いものでした。そして武士の力強さ、大胆で豪快な堂々たる姿があらわされていました。

宗箇はできあがった茶杓を夕日にかかげて見上げました。その茶杓は夕日を照り返し、まぶしく輝いていました。

「そうだ!これだ!これが私らしさなのだ!!」

と、大きな声でさけびました。

そこには、利休とも織部とも違った新しい上田宗箇らしさがありました。

「私らしさとは、武士の強さをもったもの。いや、しかしそれだけではない。」

宗箇は、さらに自分らしい茶道を作ることに夢中になりました。

宗箇が作る茶碗や花入れには、武士の力強さが表現されており、無駄のない、りんとした美しさがありました。しかし、その強さの中にも使う人にやさしく思いやりのある繊細さや、自分なりの思いをこめたのでした。

宗箇は、武士としての強さと優しさを兼ね備えた生き方をもとに、新しい上田宗箇の茶道をついに、完成させていったのでした。

宗箇が戦いのさなか^{てまなか}に作った茶杓は「敵がくれ」という名前がつけられ今でも大切にされています。



【注】

- (1) 客を招き、抹茶^{まっちゃ}をたてて楽しむこと。また、その作法や会合のこと。
- (2) 茶道の点前^{てまき}で抹茶をすくう細長いさじのこと。素材は主として竹であるが、象牙、金属、陶器などもある。
- (3) 元和元年（1615 年）夏、徳川方が冬の陣の和議の条件に反して大坂城内堀を埋めたため豊臣方が兵を挙げ、徳川家康らに攻め落とされた戦い。

【参考文献】

上田宗嗣「茶道 上田宗箇流」（1934 年）ひろしま文庫
渡 好美「上田宗箇とその時代」（1994 年）溪水社
津本 陽「風流武辺」（2002 年）朝日文庫
矢部良明「武将茶人 上田宗箇」（2006 年）角川書店
久野 治「古田織部とその周辺」（2009 年）鳥影社
山田芳裕「へうげもの」（2005 年）講談社
季刊誌「和風」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

各教科等での体験活動を生かした道徳の時間の展開
～体験を言葉で生かし深める工夫をした指導～

（ア）主題名 個性の伸長 1－（6）

（イ）ねらい 「そうだ。これだ。これが私らしさだ。」と叫んだ宗箇の気持ちを通して、自分の特徴を知ることの大切さに気付かせ、自分のよさを伸ばそうとする心情を育てる。

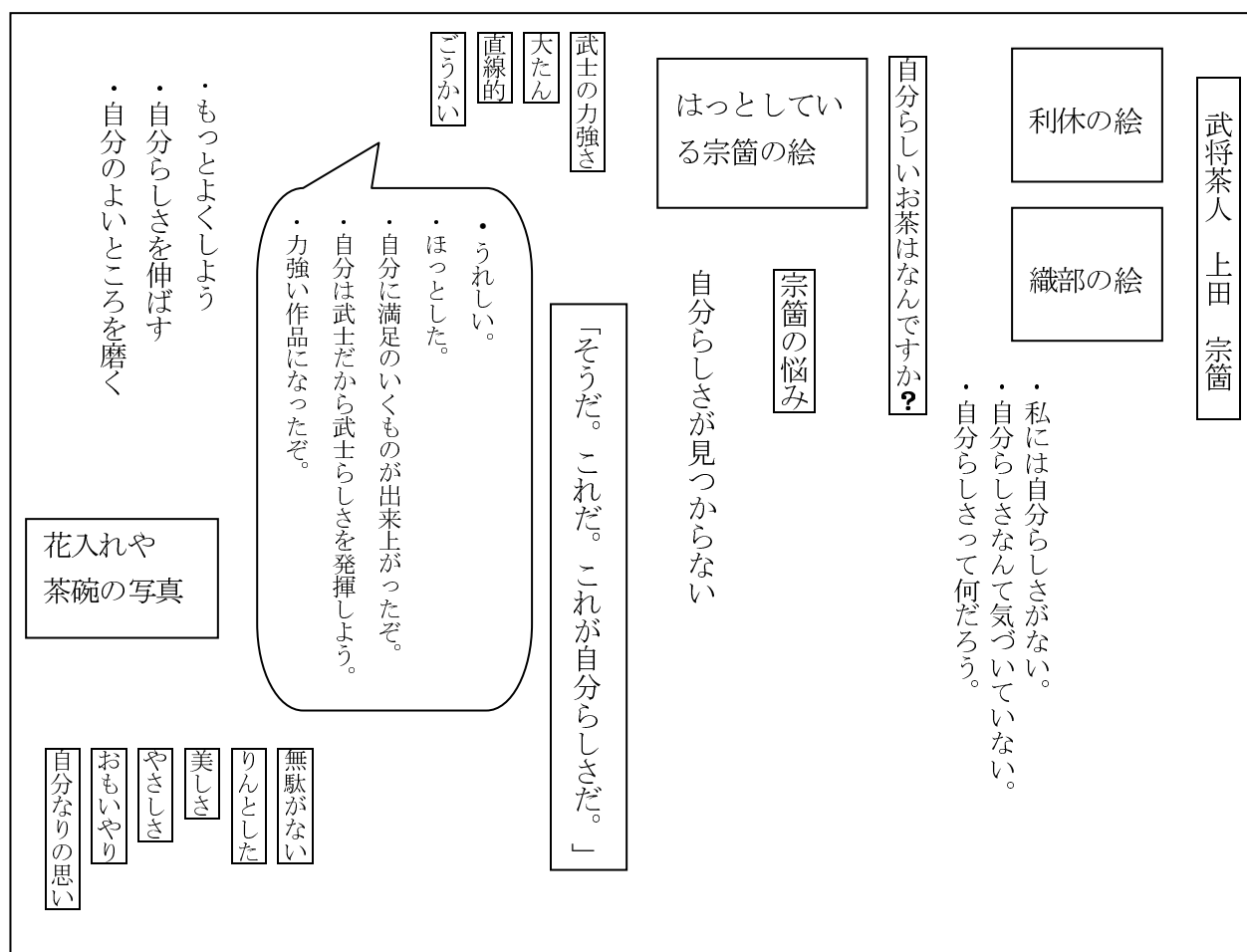
（ウ）資料名 「武将茶人 上田宗箇」

（エ）学習指導過程

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公（宗箇）の心情	児童の意識の流れ
○当時の武士とお茶の関係。上田宗箇の紹介。 ○師匠である織部に自分らしい茶道について指摘されはつとする場面。 ○いくさの最中に作った茶杓に自分らしさを見つけたことができた場面。 ○武士の力強さ、大胆さ、豪快さ、堂々たる姿が自分らしさとわかった宗箇はまだまだ自分の個性を磨こうとする場面。	中心人物（上田宗箇） ・褒美をもらうほど勇ましい武将。 ・いくさの合間に茶の湯を楽しみ、つかの間のゆとりを楽しんでいた。 ・殿様を自分の屋敷にお迎えするときも必ず茶の湯を点てて迎えるほどの腕前。	その他の人物（古田織部） ・「利休は静かさに自分らしさを感じ、私は動きのある茶道。では、あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか。」	・武士の楽しみは茶の湯だな。 ・お殿様に茶の湯を楽しんでもらえるようにしっかりもてなすぞ。 ・私の茶道には自分らしさがないというのか？ ・「自分らしい茶道」とは一体何だというのだ。 ・自分らしい茶道を見つけることができるのだろうか。 ・自分の茶道を見つめるために茶杓や花入れをつくってみよう。 ・茶碗も自分で作ろう。 ・でも、利休や織部のまねをしているようだ。 ・自分らしい茶杓ができたぞ。 ・武士には力強さ、大胆さ、豪快で堂々としたものがある。それが私の茶道だ。 ・やつと自分らしい茶道を見つけたぞ。 ・自分らしさを見つめることはなんてすがすがしいのだ。 ・力強さだけではないのだ。 ・まだ武士らしさというものはほかにもある。 ・やさしさと思いやりがあつてこそ本当の自分らしさだ。	・戦国時代の武士にとって茶道は大切なものだったんだな。 ・宗箇も茶の湯が好きだったんだな。 ・この前茶道体験学習をしたな。おいしかった。 ・戦国時代から茶道はあったのか。 ・自分らしさとは何かを悩んだんだな。 ・自分らしさとは何かと聞かれて困っただろう。 ・自分らしさと聞かれて自分なら何と答えるかな。 ・人のまねではないものを見つけるのは大変だな。 ・命がけで作った茶杓に自分らしさを見つけたことができてよかった。うれしかっただろう。晴れとした気持ちになるな。 ・自分らしさをやつと見つけたのに、それだけでは満足しない宗箇はすごいな。 ・宗箇のように自分らしさを見つけて伸ばしていきたいな。

(力) 板書例



【板書の構成】

戦国時代の人物の人間関係を理解させるために、人物名の短冊や人物絵を活用し、児童に臨場感をもたせ、資料へのより深い理解を促す。ただし、人物絵はWeb上では公開することができない。しかし板書や印刷配布については公共性への配慮から使用の許可がある。（山田芳裕「へうげもの」講談社）

宗箇の悩んでいるときの思いと、自分らしさを見つけたときの思いを対比させるように整理することで効果的な板書となる。また、武士の力強さ、大胆さ、直線的、豪快さなど武士としての宗箇らしさを資料提示とともに板書することで、児童が宗箇の気持ちを理解するためのヒントとなりうる。

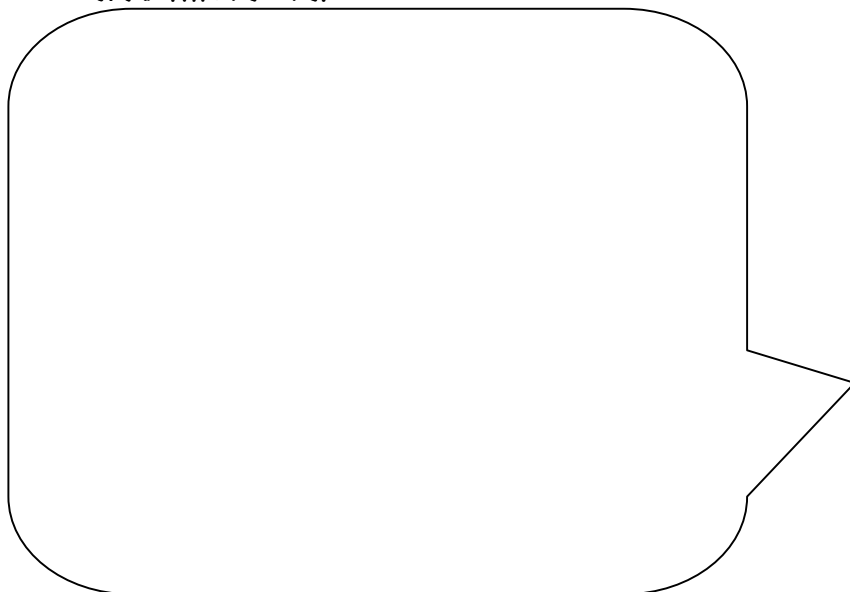
さらに、「敵がくれ」の写真や、宗箇がもっと自分らしさを磨こうと作った花入れや茶碗「さても」などの写真を提示し、現在においても大切に受け継がれていることを理解させる。

(キ) ワークシート

あしひらのまきしん うさだ まつたけ
阿部 麻人 上田 宗範

年 組 ()

I' 「やった。いった。いまだあつてた。」といふた上田宗範は
みんなを連れてきたらいい。



上田 宗範の人物絵

© 山田 秀希 講談社

II' 上田の行動の振り仮名をいれよう。

① 上田の行動の振り仮名は、たのしなうたてよう。

1. たのし 2. たのし 3. たのし 4. たのし

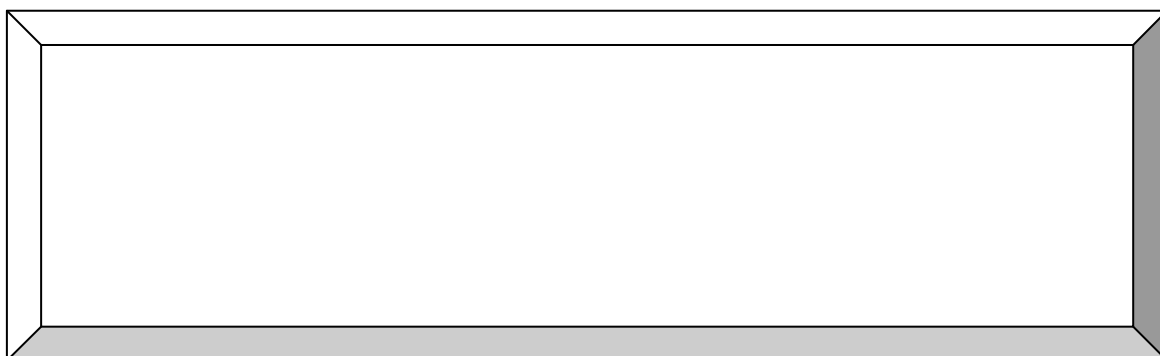
② 上田の行動の振り仮名は、たのしなうたてよう。

1. たのし 2. たのし 3. たのし 4. たのし

③ 上田の行動の振り仮名は、たのしなうたてよう。

1. たのし 2. たのし 3. たのし 4. たのし

III' 上田の行動の振り仮名をいれよう。



(2) 活用のポイント

本資料は、戦国時代、広島に実在した武将茶人である上田宗箇について作成した資料である。上田宗箇流の茶道は、宗箇が自分らしい茶道の在り方を模索し続けたことによって現在まで受け継がれている。

本資料により、自分の長所や短所、自分らしい個性を発見するとともに、その個性を自分らしく発揮していこうという心情を育てていきたい。

児童は自分の個性や自分らしさということを日常生活の中でいつも考えているとは限らないため、学級活動など各教科等の中で「自分らしさ」や「個性」を発揮した場面などを意識させたりするなど事前・事後の取組が大変重要ある。

ア 発問の工夫

人間としての弱さを吐露する宗箇を自分に引きつけて考えさせたい。そのために、まず、自分らしさがないことを、師匠である織部に指摘されてはっとする宗箇に視点をあて、なぜはっとしたのかということから、自分らしさについて意識したことのない宗箇について考えさせたい。そして、自分らしさを追究しようと焦る宗箇の深い悩みをとらえさせることにより、中心発問へと展開していきたい。

そして、自分らしさを発見できた宗箇の心情を考えた中心発問をはさみ、「それだけではない」といってやさしさや思いやりなど自分のよさを伸ばそうとしていく宗箇の心情に気付かせていく発問構成とした。

イ 言語活動の工夫

話し合い活動においては、児童一人一人が自分なりの意見をもつように、独自のものができ上がり満足する宗箇の気持ちをワークシートに書かせ、時間をとってじっくりと考えさせたい。その後、隣の児童とペアトークをさせ意見交流をさせる。そしてクラストークへと発展させるようにしていく。さらにそれらを伸ばしていこうとする宗箇のその後の生き方を考えさせたい。

ウ 導入、終末の工夫

導入での長所の交流では学級活動での事前の学

習でアンケートをとったり、長所について話し合わせたりしておくなどして、導入がスムーズに行くよう心がけたい。自分の長所に気付かせそれをどのように伸ばしていきたいかを考えさせることで自分とかわらせていきたい。

その際、長所をクラスの友だちの前で発表し認めあえるような学級経営を日頃からの充実させておくことは言うまでもない。

終末では上田宗箇流 16 代家元の上田宗問氏のビデオレターを見せ、個性に気付き発揮することによって 400 年間、今も続いている上田宗箇流の長い武家茶道文化について理解を深めさせる。

(3) 授業の実際―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

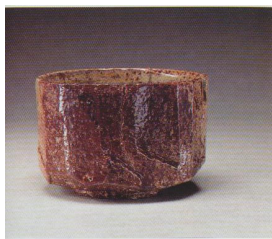
展開前段では、宗箇が織部から自分らしい茶道とは何かと問われ、「はっ」とし、何とか自分らしさを探そうとする宗箇の深い悩みをしっかりと考えさせておかなければならない。その際の発問は「自分流の茶道を求めているいろいろ試してもなかなか納得できない宗箇の気持ち」を問い、悩みの深さや焦りを出させておくようにする。

展開後段での中心場面では、戦いの最中でありながら自分らしい茶道について発見する宗箇の喜びを通して、自分の特徴を知ることの大切さに気付かせ、自分のよさを伸ばそうとする心情を育てようとしている。自分らしさがないという悩みの深さと、自分らしい茶杓ができあがった時の喜びや爽快さとの気持ちの違いをとらえさせねらいにせまる。

児童の反応は次のような意見が出された。

- ・戦いも忘れ茶杓を作ったのだから、できたときは晴れ晴れし、爽快感でいっぱいだろう。
- ・人まねではなく自分らしさが見つかったのだから興奮しただろうな。
- ・何をやっても人まねになり、焦っただろう。無心に削ることで自分らしさが見つけれられてうれしかったと思う。
- ・自分の生き方に合っている力強さが伝わってく

る茶道を見つけられてすがすがしい気持ちになったと思う。



さらに、できあがった喜びがあるのにもかかわらず「それだけではない」という宗箇のさらなる自分らしさの追究について問いかけ、もっと自分を伸ば

していきたいとする高い価値に深めさせる。

児童のワークシートには以下のような記述が多かった。

- ・宗箇が自分らしさを見つけ、さらに高めようとしたように、新たな自分らしさを見つけ高めていきたい。

自分を振り返る場面では、宗箇と自分とを重ね合わせ、導入での長所の交流を通して、気持ちや思いを引き出し自分のこととしてとらえることができたものと思われる。

イ 言語活動の工夫

導入では価値への方向付けをするために、自分の長所を発表させた。児童はお互いの長所をよく知っており友だちの長所を認め合いながらあたたかい雰囲気で行うことができた。

話し合いにおいては、織部に自分らしさとは何かと指摘されたとき「はっ」とする宗箇の気持ちを自分も宗箇と同じような体験がないかを問い、自分と関連させながら発表させるようにした。

中心発問ではワークシートに書く活動をした上で自分の意見と友だちの意見を比べながらペアトークを行い、話し合い活動に入った。自分と同じ意見や意見を聞いてなるほどと思った事などを絡めながら発言することができた。

ウ 終末の工夫

終末では、上田宗箇 16 代家元の上田宗問氏からのビデオレターを見せ、宗箇の独自性があったからこそ、広島に根付き発展してきたことを理解させる。実際に 16 代目が自分たちへのメッセージを伝えてくれることで 400 年の歴史ある上田宗箇流の茶道が脈々と受け継がれていることを実感する

ことができた。

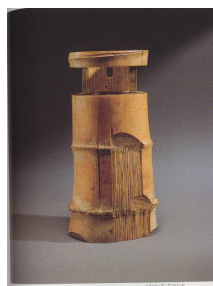
(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

総合単元的な道徳学習を展開することによって、有機的な関連としての効果が期待できる。

導入において価値への方向性をもたせるために、自分の長所を交流させるなどして雰囲気作りをしていく。

導入では、学級活動等の事前学習において自分の長所について考えさせるような活動を仕組むなどして、道徳の時間の導入がスムーズに行われるようにしておきたい。

また、資料の理解を図るために社会科での歴史学習を踏まえ、登場人物の人間関係を捉えさせておくことは必要なことである。また総合的な学習の時間での「日本文化再発見」で茶道の体験をさせておいたことは非常に効果的であった。その際、茶杓や茶碗など茶道具についても触れておき、茶道への関心と理解を持たせておいた上で、授業にはいることが重要である。また、5 年生での体験活動で行った「宗箇山」への登山の様子を写真で提示し「宗箇」という名前を意識させた。



たい。

道徳の時間の中で体験を引き出すために、図画工作科等での作品作りや国語科での作文など、個性を引き出す学習に取り組んだことを伏線にして学習を展開できるようにし

(5) 心のノートを活用

「心のノート」P. 32 からは「自分を見つけみがきをかけよう」という項目になっている。よいところや自分を変えたいところなどを書き込むようになっている。事前に自分のよいところを探して書いておき、事後「自分向上プロジェクト」を作成するような取組が考えられる。キャリアノートとの関連を図ることも可能である。

教材活用例(5) 「一筋の光を求めて」

〔小学校高学年 主題：故郷の宝 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—畝為吉—について〉

畝為吉は、安芸郡坂町の出身である。坂町に道路やトンネルをつくるために16歳でハワイに渡り努力の末、全私財を投じて遂に完成させることができた。

生涯を通して、郷土の発展を思い続けた先人の人柄や偉業に対して、現在でも地域行事として住民運動会が行われている。



明治22年 (1889年)	坂村に生まれる。
明治39年	ハワイに渡る。
大正15年 (1926年)	ハワイでマットレス工場を開始し、成功を収める。
昭和22年 (1947年)	トンネルの計画を息子らに明かす。
昭和24年	トンネル工事の起工式を行う。
昭和26年	トンネル工事が完了する。
昭和63年	99歳で大往生を遂げる。

畝為吉の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、為吉の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵	険しい西嶽峠の坂道	たまたま山にトンネル	工事中	協力一致
絵の説明	植田地区にある畑に行くのに、狭く険しい西嶽峠を登り下りしなければならなかった。重い荷物を背負っての峠道は、為吉や村人に苦勞を強いていた。	呉線の敷設工事で坂村にトンネルが開通したことにヒントを得て、トンネルをつくることを決意する。「自分の一生はこの山にありこの道にあり」と、単身ハワイに渡りさまざまな苦勞の末、工事の費用をつくることに成功した。	40数年間温めてきた計画を明らかにし、地区の代表者に協力を求めた。上条・植田両地区から総出でトンネルの工事を行い、為吉自身も自ら作業に加わり1年4ヶ月続いた工事が無事終了し、ついにトンネルは開通した。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。今でも開通を記念して始められた住民運動会が行われている。トンネルの両端に「共存共栄」「協力一致」の言葉が刻まれ、為吉の人柄を今もしのばせる。

イ 資料の解説

【作成の要点】

郷土を愛する心を育てるには、児童の内面からの自覚が大切である。郷土の発展に尽くし伝統と文化を育てた先人の努力を知ることで、自分もそれを継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。

中学年で社会科や総合的な学習の時間に、地域の様子や伝統文化について学んだことを生かし、高学年でそれをどんな人々がどんな思いをもって地域の発展のために尽力してきたかについて考えることにより、主体的に郷土を大切にしていこうとする気持ちが育まれると考えた。

畝為吉は子どものころの体験から自らのことのみならず、危険な峠道を通して畑に通う村人のことを何よりも気に掛けていた。トンネルをつくることを思いつき、単身でハワイに渡ったのも郷土の発展を願うただその一念に違いない。そこには、郷土に暮らす人々のために何かできないかと一心に思う郷土愛にあふれた人間性が見て取れる。他者を思うことでどんな逆境にも屈せず、信念を貫き通す人間の心の強さや尊さを本資料から読み取り、考えることを通して、自分の生活に生かそうとする心情を育てていきたいと考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

少年の頃、大変な苦勞をして農作業に向かっていた経験が、その後の畝為吉の人生を決定づけた。ハワイに渡ったのも坂村の発展の為に道路を通したかったからである。トンネルを通したのはこの道の延長線上にあり、西嶽峠^{にしだけとうげ}を貫くトンネルを開通させたことで上条側と植田側の行き来が楽になった。

為吉はとにかく謙虚な人だった。トンネル工事の費用に全ての私財をなげうったことはいうまでもなく、トンネル工事が始まると、自分の畑で取れたスイカを村人にふるまったり、自らも工事に参加してスコップをふるったりして働いた。自らの偉業をひけらかすことも、銅像の話に耳を傾けることもなく、その意志は一貫して「ふるさとのため」「人々のために」と一度も揺らぐことはなかった。

ウ 資料全文

「一筋の光を求めて」

—畝 為吉物語—



渡航当時の畝為吉氏

今から約110年前。

14歳の為吉は、真夏の峠の急な坂道を登り、急しや面にへばりつく段々畑へと向かった。背負った重い荷物が肩にこいこむ。鼻が地面につくくらい体が曲がり、背中を起こすと後ろに倒れてしまうくらいの急な坂道だった。

「なんとかならんものかなあ・・・」

為吉が家の手伝いをするために通るには、あまりにつらい峠道だった。村人もまた、この峠で不便をしいられていた。

ある時、手伝いを終えた為吉が段々畑のあぜ道から、海岸沿いを通る呉線を眺めていたが、急に立

ち上がり水尻トンネルに目をやった。

「これだ。この山にトンネルを通そう。」

為吉の頬は夕日に照られますます赤くほてった。しかし、トンネルを掘るにはとてつもないお金がかかり、そう簡単に実現できることではなかった。

それから3年。16歳になった為吉は、当時の日本が外国移民のしょうれい⁽¹⁾を行っていたことを知り、(これはチャンスだ)と、両親の許しを得てハワイに行くことにした。もともと農作業には慣れていた為吉ではあったが、常夏の島の広大なサトウキビ耕地で、朝から晩まで土を掘り、掘っては耕し掘っては耕し・・・毎日太陽に照らされ、常夏の島での重労働はなみたいていの苦労ではなかった。しかも一日の賃金がわずかで、

「いつまでもこんなことをしていたのでは、トンネル工事の費用など何百年先になることやら・・・トンネルづくりはやはり夢物語じゃっただろうか。」

と、たった一人途方に暮れたため息をもらした。

しかし、悩み続けたある日のことだった。段々畑に続くけわしい峠道を、息も絶え絶え歩いている村の人や、坂村に残してきたなつかしい両親の夢を見た。

「ここであきらめるわけにはいかない。」

目が覚めた為吉はこの日を境に人の十倍働いた。そして、人の十倍もの苦労もした。そのかいあって、ついにマットレス工場⁽²⁾をつくり成功をおさめてたくさんのお金をためることができた。それは、ハワイにわたって20年がかりのことだった。

それからさらに20数年後、為吉は日本にいる息子たちにこんな手紙を送った。

・・・実はわたしは、40 数年間、上条・植田間に道路やトンネルを通す夢をもっていた。もしも賛成してくれるなら、地区の代表者にそのことを相談し協力してもらえるよう頼んではくれないだろうか・・・。

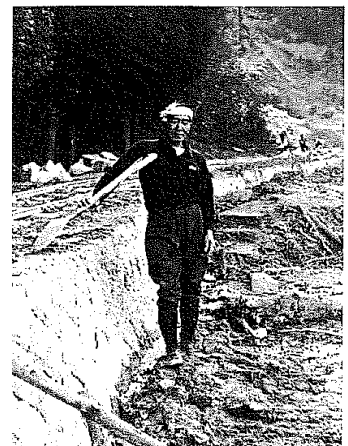
為吉がそんなことを考えていたことを初めて知った息子たちは、とまどいをかくせなかった。村人たちは始めは半信半疑だったが、為吉の熱い思いに応え地区の代表たちは何とか賛同してくれた。息子たちが早速そのことを知らせると、為吉は長年の夢が実現する喜びにふるえた。

ハワイでの最後の仕事を終わらせると、その2年後には坂村にもどり翌年から念願の工事が始まった。工事は上条・植田の両地区から三百軒余りの人々が総出で取りかかった。為吉も自らスコップをふるい作業現場で働いた。40年という長い年月を費やしてつくったお金は全て工事のために使った。それにもかかわらず為吉は人々に頭を下げて、

「ごくろうさんです。ようようしてくれんさった。」



毎年行われている住民運動会

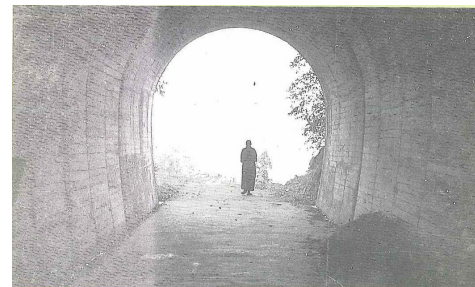


工事現場に立つ、為吉

と、やさしい目差しを向け人々にお礼を言って歩いた。さらに、子どもたちのためにと児童公園やプールもつくった。いつも周りの

人々に気を使う為吉だった。こうして1年4ヶ月におよぶ工事が終わり、桜の花が咲き始めた暖かな春の日、ついに念願のトンネルは完成した。人々は手を取り合って喜びの声をあげ、歌に合わせて踊り祝った。

今ではトンネルの完成を記念して、毎年この公園で住民運動会が行われるようになった。
 「畝のおじいちゃんがね、みんなのためにトンネルをつくっちゃったんよ。」
 あるお母さんが、運動会にはしゃぐ子どもたちに話して聞かせていた。
 「坂町のために力を尽くした為吉さんの銅像を建てようじゃないか。どうかね為吉さん。」
 そんな声も上がったが、
 「わしは銅像など建ててほしゅうない。この仕事はみんながしたもんじゃ。これからもみんな仲良く
 すりやあええ。」
 と、為吉はその話を堅く断り続けた。ただ、トンネルの東側に「協力一致（きょうりょくいっち）」
 西側に「共存共栄（きょうぞんきょうえい）」という文字を残すことだけ注文して・・・



上条側から見たトンネルの向こうに海が見える

【注】

- (1) 開国後の日本は、第二次世界大戦後に至るまで、労働力が過剰であったことから、外国へ移り住むことがすすめられていた。
- (2) ベッド用の敷ぶとんを生産する作業場のこと。

【参考文献】

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 山根 富士夫 上条地区住民福祉協議会（平成 4 年） | 畝為吉翁の偉業-上条トンネルの話- |
| 新木 正司 （昭和 60 年） | 坂町海外活躍史 |
| 坂町社会科副読本編集委員会（編集）（平成 14 年） | わたしたちの坂町 |

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

**生涯変わりなく郷土を愛した為吉の心情を中心にした展開
 ～視聴覚機器を生かした指導～**

- (ア) 主題名 郷土愛 4－(7)
- (イ) ねらい 為吉がトンネルをつくろうと決心してハワイで苦労を重ねたことや、思うように資金がたまらず苦悩する姿を通して、郷土の発展のためにくじけず努力することの尊さを知り、40 年あまり変わることのなかった気持ちに沿いながら郷土を愛する心情を養う。
- (ウ) 資料名 「一筋の光を求めて」

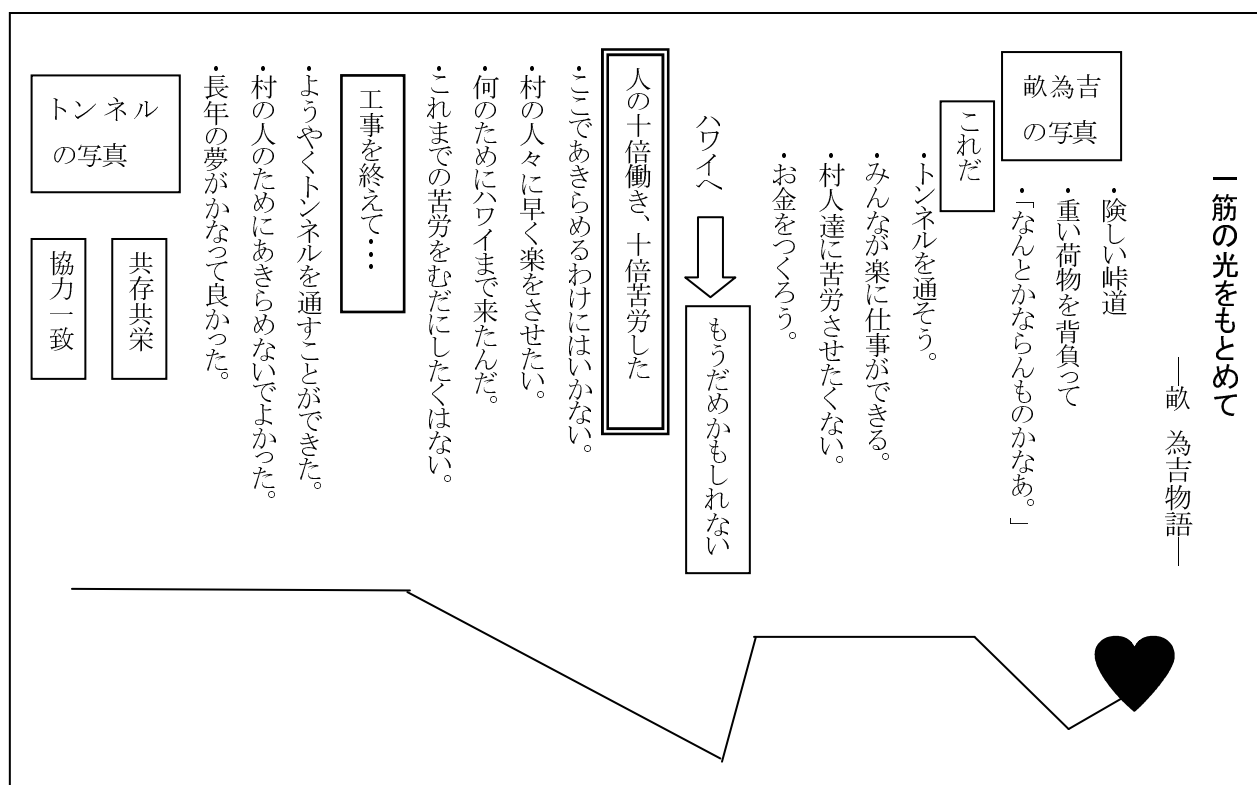
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 坂町のよさについて話し合う。	○ 坂町の宝とは何でしょう。 ・曳船・横浜踊りなどの伝統文化がある。 ・古い歴史を大切にしている。 ・海や山の美しい自然がある。 ・人々が親切であたたかい。	○ 祭りや踊りの様子，山から見える海を写真で確認する。
展開	2 資料前半を読んで話し合う。 ・ビデオ「昭和からの手紙」前半を視聴する。	○ 「これだ。」と思いついた時，為吉はどんなことを考えていたでしょう。 ・トンネルさえあればこんな苦労はしなくて済む。 ・村の人々のために自分ができることを見つけたぞ。 ・必ず峠にトンネルをつくるぞ。 ・トンネルさえあれば，村のみんなに楽をさせることができる。	○ 時代背景や当時の日本の様子について補足説明をする。 ○ ビデオ「昭和からの手紙」前半を視聴して資料の内容にせまらせる。 ○ トンネルをつくろうと決意した為吉の心情に共感させる。
	3 資料後半を読んで話し合う。 ・ビデオ「昭和からの手紙」後半を視聴する。	◎ 目覚めた為吉が人の十倍働き，十倍苦労をしたのはどんな気持ちからでしょう。 ・ここでくじけるわけにはいかない。初心を忘れてはいけない。 ・せっかくハワイまで来て苦労してきたことを無駄にしたくない。 ・今でも坂村の人々は不便な道を通して苦労しているのかと思うと何とかしたい。 ・何年かかってもトンネルがつくれるだけのお金を稼がなくてはならない。 ・絶対にトンネルをつくるまでは日本に帰らない気持ちが強くなった。 ・どんなに苦しくても，あきらめるものか。 ○ 為吉はどんな気持ちでトンネルの完成を見ていたでしょう。 ・これからもみんながいつまでも仲良く，協力し合って暮らしていってほしい。 ・みんなのために苦労してよかった。 ・これからも坂町が発展することを願っている。 ・今までがんばってきたことは間違っていなかった。	○ ワークシートの吹き出しに書くことによって，夢と希望を失いつつあったが，それでも諦めなかった為吉の気持ちを深く考えさせる。 ○ ビデオ「昭和からの手紙」後半を視聴して資料の内容にせまらせる。 ○ 為吉にとって，坂町の人々が一丸となってトンネルをつくったことが何より嬉しかったことに気付かせる。 ☆ 視聴覚機器の利用は，児童の理解を助け，郷土の先人の偉業とそこに至る心情を自分たちの生活に引きつけてとらえることができたか。
終末	4 授業の感想を書く。	○ 今日の授業の感想を書きましょう。 ・上条トンネルをつくるために地域の人々がみんな協力していたんだな。 ・自分も坂町のためにできることはないかな。 ・坂町をもっと住みよい町にしていきたいと思った。	○ 為吉と自分を重ねて見つめさせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

発問を短冊に書き内容の順に右手から提示する。中心発問は板書の中心におき、価値にせまらせたい。児童の発言はキーワードを残して書き、自分の考えと友達の考えを比べながら学習できる手立てとする。また、下段に心情曲線を用いて前段の為吉の心情の変化が目で見取れるようにする。

最後に「共存共栄」「協力一致」とトンネルの写真を貼付し、ねらいである「郷土を思う気持ち」を一層印象付ける。

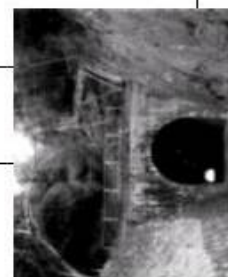
(キ) ワークシート

一筋の光をもとめて

年 ()

◎ 恭吉が人の十倍働き、十倍苦労をしたのはどんな気持ちでいた
かを記しよう。

◎ 今日の授業の感想を書き記そう。



(2) 活用のポイント

本題材のねらいは郷土の発展の為に尽くした先人の努力を知り、郷土を愛する心情を養うである。ねらいを達成するために補助発問では、トンネルをつくろうと決意した為吉の心情について考えさせる。次に中心発問で主人公の心の葛藤に共感させた後、ワークシートを活用して考えを深める工夫をしたいと考えた。また、資料の歴史的背景や当時の人々の暮らしがわかるようにするため、視聴覚機器を活用し児童の思考を支援していきたいと考える。さらに中心発問や終末の場面で、自らの考えを深め整理することができるように、書く活動を取り入れる。

以上のポイントを踏まえ、本資料で児童が郷土に対する思いを深め、地域の発展のために努めようとする心構えを育てていきたい。

ア 発問の工夫

中心発問では、主人公が味わった挫折感や焦燥感を乗り越えて、仕事に打ち込むことにした点に着目させたり、補助発問として、主人公がこれからの町の発展を願う心情に迫らせ、価値の一般化につなげたい。

イ 視聴覚機器を生かした指導

100年以上前の歴史的背景や当時の人々の暮らしについてわかりにくい部分を補う効果があると考えた。

ウ 書く活動の工夫

中心発問では、ワークシートを用いて書く活動を仕組み、児童がじっくりと自分の考えを出せるようにし、終末では感想を書かせ、価値の一般化を図るようにしたい。

(3) 授業の実際 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

発問は為吉の言葉や行動の裏側にある気持ちを問うことで、ねらいに迫らせたいと考えた。

導入では、坂町の宝について想起させて、伝統文化や自然などについて話し合うことによって、児童が本時の資料に関心をもち、終始郷土についての意識を共有化することができた。

中心発問では、「もうだめかもしれない。」とい

う挫折感に陥った為吉の気持ちに沿わせた後、そこから気持ちを切り替えた点に着目させた。その際、道徳的価値に対する弱さに触れさせるため、教師が揺さぶり発問をしたことにより、為吉の心の深い部分にまで掘り下げていくことができた。

イ 視聴覚機器を生かした指導

資料の文章からでは理解しにくい表現がいくつかある。しかし、100年前の時代背景や用具の名前などがビデオでは映像としてうまく表現されており、児童が関心をもって視聴することができた。また、児童は、村人が不便を強いられていた状況やトンネルをつくろうと思いついた経緯が把握しやすくなり、為吉の気持ちを考える上において効果的であった。

ウ 書く活動の工夫

葛藤を乗り越えた行動の裏にある気持ちをじっくりと考えさせるために、時間を十分確保しながら、ワークシートに考えを書かせた。書くことによって自分の考えを整理し、ワークシートを手がかりとして発言する児童が多かった。

【児童の感想から】

- ・坂道を上り下りする村人の苦労を忘れないで、みんなのためにがんばろうと思った。
- ・トンネルをつくることが自分の夢でもあったし、両親や村人を助ける方法だったとあらためて思った。
- ・トンネルを通して「畑に行くことが楽になった。」と喜んでくれる顔が一日も早く見たい。
- ・ハワイに行くことを許してくれた両親のためにも、トンネルをつくらなくてはいい。

等の考えが出てきた。児童の多くが、郷土のために尽くした主人公の心情をとらえることができていた。

また終末では、授業の感想を記入することで、児童が先人の偉業から学んだことをもとにして、自分も郷土のためにできることはないかと意識付けができた。

【児童の感想から】

- ・村人のために苦勞して働いた為吉さんはすごいと思う。坂町の誇りです。
- ・村の人々のためにここまでできるんだ。ぼくも坂町のために何かできることはないかと、考えていきたいです。
- ・坂町のために尽くしてがんばったんだなあと身にしみて思いました。
- ・40年以上かけて夢をかなえた為吉さんを見習って、わたしもがんばりたい。

○ 道徳コーナーへの掲示

校内に設置してある道徳コーナーに、道徳的な価値に関わる言葉とともに、「心のノート」PP. 104-105 の写真をカラー印刷したものを掲示して、いつでも全校児童の目に触れられるようにすることは効果的である。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

児童は3，4年生のときに社会科で地域の古い道具，文化財や年中行事，地域の発展に尽くした先人のことについてふれてきた。

4年生では社会科で「郷土を開く先人の働き」について学習をし，先人が郷土の発展に尽くした史実を調べた。そして，坂町発行の副読本「わたしたちの坂町」を活用して，ワークシートや新聞でまとめてきた。

また，総合的な学習の時間では，上条トンネルや為吉に関連する場所や，親族の方への聞き取りを行った。これらの学習を行った後，「青き一筋の光を求めて」という題で創作劇の台本を作成し，学習発表会で披露した。

このような学習内容を踏まえることによって，資料の内容への関心が一層高まっていく。

(5) 心のノートの活用

○ 道徳の時間

心のノート PP. 104-105 に「郷土や国を愛する心を」というページがある。

導入で「わたしのふるさとしょうかい」コーナーに記入をし，地域の良さにふれて学習に取り組もうとする意欲を高める手立てにすることもできる。

終末で掲載されている詩を読み，郷土を愛した先人の思いを振り返りながら，余韻をもって授業を終えるようにする。



教材活用例(6) 「夢とロマンを追い求めて ～彫刻家 圓鰐勝三～」

〔中学校第3学年 主題：理想の実現 内容項目：1の(4)〕



(1) 開発資料の実例

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—圓鰐勝三—について〉

尾道市御調町出身の彫刻家。

自由な発想，イメージによる彫刻を制作・発表。野外彫刻にも意欲を燃やし，全国各地に記念像を制作している。日展特選4回，日本芸術院賞など受賞作品多数。日展顧問，日本芸術院会員，多摩美大名誉教授などを歴任，83歳のときに文化勲章を受賞した。

明治38年 (1905年)	現在の尾道市御調町に生まれる(勝二と命名)。
大正10年 (1921年)	河内小学校高等科を卒業する。 京都の彫刻師 石割秀光氏の内弟子となる。
昭和 3年 (1928年)	上京し，日本美術学校に入学する。
昭和 5年	第11回帝展に「星陽」を出品，初入選。
昭和21年	第2回日展に「砂浜」出品，特選。その後3回特選。
昭和35年	勝二を勝三と改名する。
昭和63年	文化勲章を受章する。
平成元年	広島県名誉県民となる。
平成 5年	広島県御調町に圓鰐記念公園・記念館開館。
平成15年	逝去。

圓鰐勝三の経歴

(イ) 4コマ絵

圓鰐勝三の作品制作に対する考え方や生き方が表れ，人間的魅力が伝わるエピソードを中心に，4場面構成とした。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	「芸術の場合，『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし，広く，無限である。～」という，芸術に対する圓鰐勝三の考えがよくあらわれている，自身の言葉を紹介。	圓鰐勝三は，美術学校の先生や周りの芸術家から，さまざまな素材で彫刻を制作する創作態度を揶揄されていた。にもかかわらず，信念をもって作品のイメージに最も適した素材を使って制作を続けた。	長い歴史をもつお寺から仁王像の制作を依頼された。既成のものにはこだわらず自分の発想を大事にしていく創作への姿勢と，重くのしかかる伝統とのはざまで，勝三は構想を練りに練り，他には例を見ない形の仁王像を完成させる。	母校の小学校の石碑に刻まれた勝三の言葉「積み重ね つみかさね ～」と，出身地である御調町に建っている圓鰐記念館の様子を紹介。

イ 資料の解説

【作成の要点】

自分の人生において、夢や理想をもって努力することが大事であり、素晴らしいことであることは、誰もがわかっていることだろう。しかし、中学生ともなると、こうなりたい、こうありたいという夢や理想が、簡単に実現できるような易しいものではないことも認識されてくる。それ故その道のりの遠さに、「夢は夢。実現するのは難しい。」「夢はあるけど今はこんなもんでいいや。」とあきらめたり妥協したりして、毎日を送っていることもあると思われる。

本資料は、自分の表そうとする題材の精神を大切に、既成のものにとらわれず自由に表現したいという自分の理想とする創作態度を貫くために、信念をもって試練を乗り越え、日々精進を重ねていった彫刻家圓鐔勝三を描いている。数々の賞を受賞し、功績を認められているにもかかわらず、年を重ねてからもなお「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも又積みかさね」という座右の銘そのままの創作人生を送った彼の生き方から、理想の実現のためには、安易に妥協せず、今なすべきことを着実に取り組んでいくことが大切であることを改めて考えさせたい。



【心に響くちょっといいはなし】

- 勝三が小学生のときのこと。兄が部屋の片隅でうつむいて何やらしている。見ると、棕櫚（しゅろ）の枝でハンコ彫りをしているのだ。「おもしろそうだねえ。僕もやってみよう。」勝三（当時は勝二）は彫り上げたハンコを、夏休みの宿題の1ページに押し、提出した。すると、担任の先生が「見てごらん。圓鐔くんの彫り物は上手なこと。」とみんなに見せながら褒めてくれたのである。それまであまり先生に褒められることのなかった勝三は、それがうれしくてハンコ彫りに熱中するようになる。これが、彫刻を目指すきっかけであったように思うと、勝三は述懐している。
- 小学校の卒業を控え、美術品を手がける彫刻家になるための勉強がしたいと密かに思っていた勝三。しかし家業の農業を手伝ったり奉公に出て修業したりするのがあたり前だった当時の田舎にあって言い出すこともできないでいた。それでも父親の理解でやっとならば、仏壇の装飾や欄間などを手がける京都の彫刻師のもとに4年間内弟子として入ることが決まる。なかなかうまく彫ることができない勝三は、盆暮れの休みに故郷に帰る時間も惜しんで、京都でのみを手に一心に木に向かっていた。他の弟子と同じくらいの仕事ができるようになると、今度は他の人が5日で仕上げる仕事を、3日でできるようになろうとまた努力を重ねていくのだった。しだいにその腕を認められ兄弟子よりもたくさん稼げるくらいに仕事が入ってくるようになったのだが、彫刻家への夢をあきらめきれない勝三は、弟子入りから7年の後、頼る人もいない東京に一人向かったのである。

ウ 資料全文

「夢とロマンを追い求めて ～彫刻家 圓鏝勝三～」

「芸術の場合、『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし、広く、無限である。ここが芸術の面白いところでもある。」

これは、多摩美術学校（現・多摩美術大学）の名誉教授となった圓鏝さんの、七十歳を越えた頃の言葉です。

圓鏝さんは若い頃から、作ろうとする作品によって、どの素材を使うかを決めました。当時は、多くの彫刻家たちがそれぞれに専門の素材を決めていて、専門の素材以外での作品づくりはするな、芸術は一筋道であるのがよいと言われていた時代でした。しかし、圓鏝さんは主流とする木彫以外にも、ブロンズ、セメント、樹脂、陶器など、さまざまな素材を使った作品作りや、ブロンズと金属、ブロンズとガラスといった材質の異なるものを組み合わせた作品づくりにも挑戦していきました。そんな作品づくりをする圓鏝さんに対して、まわりの人たちから「八百屋みたいだ。デパートみたいだ。」と揶揄^{やゆ}⁽¹⁾されるなど、非難めいた言葉を言われることもありました。

しかし、圓鏝さんはそうした非難にも負けずに、信念をもって作品の創作を続けました。

昭和四十九年、東京にある池上本門寺^{いけがみほんもんじ}から山門（仁王門）^すに据える仁王像の制作依頼の話がありました。仁王像とは、仁王立ちと言って、どちらから押しても引っ張っても動かない、両足を平行に踏ん張っていかにも強そうな形をしたもので、邪鬼を払い仏を守るために、寺の左右の門に一对で置かれます。圓鏝さんは、運慶・快慶による東大寺南大門の仁王像を初め、各地の仁王像を見学したり、さまざまな文献・資料を研究したりして、「仁王の姿はどうあるべきか」を自分なりに模索しました。

圓鏝さんが作品を作るときに一番大切にしたのは、その題材のもつ精神をどのように形に表すかということでした。基本的な約束事を大事にしながらも、既成のものにこだわらず、自分の発想や心を入れて創作していきたいという考えです。ですが、池上本門寺は、七百数十年前に日蓮聖人^{にちれんしょうにん}⁽²⁾が入滅（臨終）された霊跡であるという長い歴史とさまざまな霊宝をもつ大本山⁽³⁾です。由緒ある寺の沿革からも、空襲で焼失する前にあった仁王像は、二千三百年も前に作られた歴史ある像であったことから、寺院側の伝統を重んじる気風が強く感じられました。圓鏝さんは、構想を練るときには何をしても頭から離れないくらい、くる日もくる日も悩み考える日を過ごしますが、このときはいつもにもましてそういう日が続きました。

構想を練りに練り、いくつもの下図を描いて形を作り、やっと十分の一の小品を作って、役員全員の納得と賛成を得ました。その後二分の一の原型を作り、依頼から四年後の昭和五十三年、七十三歳のときに、伝統を守りながらも、片方の膝を思い切り上げ、普通は背の後ろに下がっている天衣を頭上に舞い上がらせた従来の基本型とは違った全長三・六メートルの仁王像を完成させました。この躍動感あふれる仁王像は、「仏を守護する憤怒の像であることを本質としながらも、慈悲の心をも内にたたえているように見えてならない」歴史に残る傑作であると言われています。

生涯彫刻作品を創作し続けた圓鐔さんでしたが、母校である河内小学校（現・尾道市立御調西小学校）の校庭の石碑には、晩年圓鐔さんが訪れたときの「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも又積みかさね」という言葉が刻まれています。圓鐔さんが大事にした言葉です。

平成五年には、出身の尾道市御調町に文化・芸術の発信源として圓鐔記念館が建てられました。京都での内弟子時代、わずかにもらう小遣いで見に行った帝展や院展⁽⁴⁾に出されている彫刻作品を前に、自分の思いが熱くなるのを感じていた圓鐔さんの意思を継ぐように、今も多くの人が訪れています。

【注】

- (1) からかうこと。
- (2) 日蓮宗の宗祖。
- (3) 総本山の下にあつて、所属の末寺を総轄する寺のこと。
- (4) 帝国美術院展覧会と日本美術院展覧会の略。

【参考文献】

- 圓鐔勝三(1988) 「わが人生」 御調文学 No. 22
圓鐔勝三(1989) 「わが人生」 御調文学 No. 23
祖田浩一(1991) 「名誉県民小伝集 圓鐔勝三」 中国新聞社

エ 授業展開例 ―学習指導案（略案）―

勝三の創作へのこだわりがわかる作品づくりを中心にした展開
～ 書く活動を通して自分を見つめることを大切にしたい指導 ～

(ア) 主題名 理想の実現 1－(4)

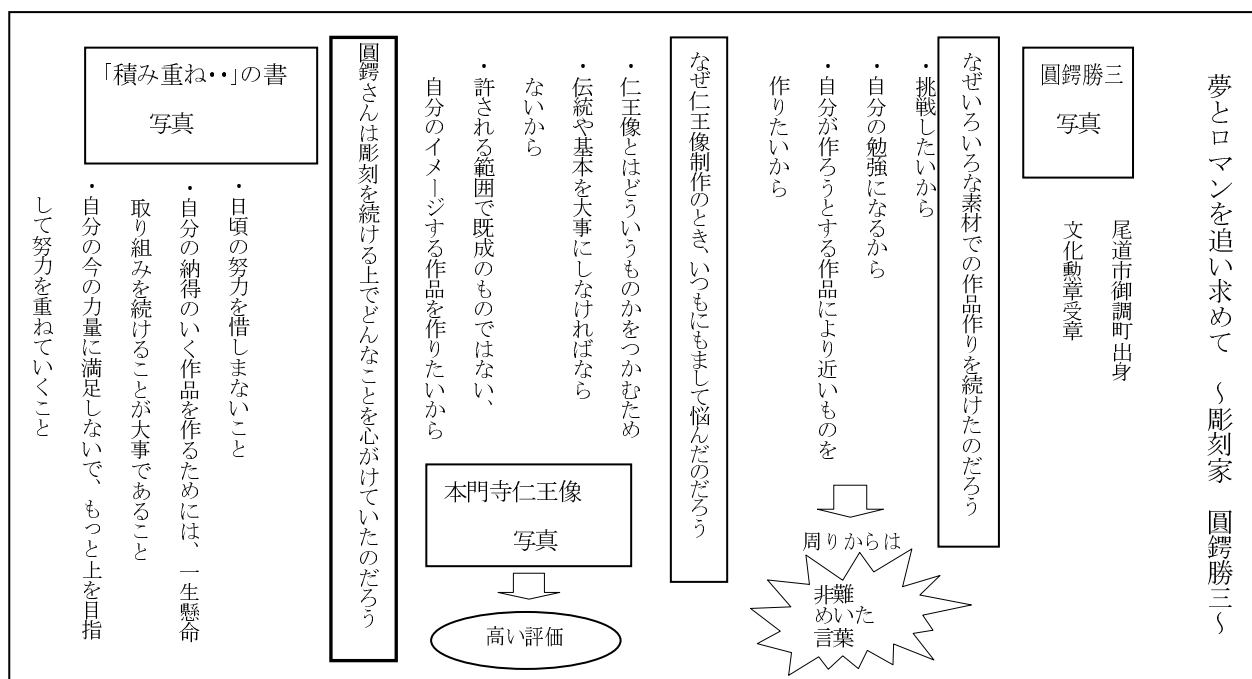
(イ) ねらい 「積み重ね つみかさね～」という言葉을大事にした圓鐔勝三の彫刻に対する考え方や生き方を考えさせることにより、理想をもち、その実現に向け、一步一步着実に取り組もうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「夢とロマンを追い求めて ～彫刻家 圓鐔勝三～」

(工) 學習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 圓鍰勝三について知る。	○ 二つの仁王像の写真を見比べ、どこが違うか言ってみよう。 ・足を大きく踏み出している。 ・ひも状のものが上がっている。	○ 大きな違いを見る。 ○ 動きの大きい方の仁王像の制作者圓鍰勝三について説明する。
展開	2 資料を読んで、圓鍰勝三の創作に対する思いをとらえる。	○ 非難されながらも、圓鍰はなぜいろいろな素材を使つての作品作りを続けたのだろう。 ・いろいろな素材に挑戦したいから。 ・勉強になるから。 ・いろいろな素材を使うことで、自分が表現しようとする作品を作ることが可能になるから。 ○ 圓鍰は仁王像を制作するとき、なぜいつもにもまして悩んだのだろう。 ・仁王像とはどういうものかを自分なりにしっかりとつかんで表現しようと思ったから。 ・伝統や基本を大事にしなければならぬから。 ・許される範囲で自分がイメージする仁王像を作りたかったから。 ◎ 「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも 又積みかさね」という言葉を大事にした圓鍰さんは、彫刻の仕事を続ける上でどんなことを心がけていたのだろう。 ・自分のめざすことを成し遂げるために、日頃の努力を惜しまないこと。 ・自分の納得のいく作品作りのためには、日々の一生懸命な取り組みを続けなければいけないこと。 ・今あるものや今の自分の力量に満足せずに、もっと上を目指して努力を重ねていくことが大切であること。	○ 教師による範読。 ○ 自分の信念を貫き通す 圓鍰には、周りからは非難めいた目が向けられたことを確認して次の発問に移る。 ○ ワークシートに記入する。 ○ 自分の創作へのこだわりと伝統との間で、より納得のいく作品作りに挑んだ圓鍰さんの苦悩をとらえさせる。 ○ 圓鍰が現状に満足せずに、常に理想の実現に向け努力し続けていることに気付かせる。
閉	3 学習のまとめとして、自分の生き方と重ねて考える。	○ 圓鍰の生き方に触れ、今の自分を振り返って考えたことを書いてみよう。	☆ 圓鍰の生き方と今の自分の生き方を重ねて考えることができたか。
終末	4 圓鍰勝三の作品の写真を見る。	○ 圓鍰の作品を見てみよう。	○ 生きているものへの愛情や平和への思いが伝わる、また夢を感じさせる作品を紹介する。

(力) 板書例



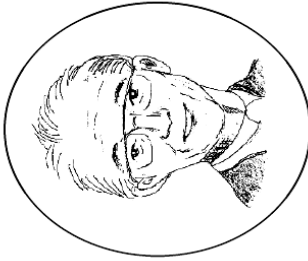
【板書の構成】

芸術家や芸術作品を扱った教材なので、生徒にはイメージしにくいと思われる。圓鏝さんの写真や作品の写真（絵）などを使って、視覚でとらえることで少しでも考えやすいように工夫した。

信念を貫こうとする圓鏝の行動は、周りから冷たい反応があったり、本人自身が相当悩んだりしたにもかかわらず、結果としてうまく物事が進んでいるので、その過程におけるたいへんさを軽く考えてしまいがちである。しかし自分の信念を曲げずにやり通したところに目を向けることがこの授業では求められる。一つ目の発問での生徒の反応を板書した後で、この創作態度に「周りから非難めいた言葉」があったことを確認し書き加えることで、仁王像制作にかかわって圓鏝が自分の信念と伝統との間で、構想を練り上げるまでの苦悩をとらえやすくなるだろうと考えた。また仁王像の写真（絵）の下には、生徒の反応を板書した後で「高い評価」と書き加えることで、圓鏝が信念を曲げずに努力し続け、その結果みんなに認められるようになったことを印象づけるよう心がけた。

(キ) ワークシート

「彫り物への思いを込めて」 ～彫刻家 國澤勝二～



三年()組 名前()

- Ⅰ 國澤さんは王像を制作するけれど、なぜうつわに木彫りしたのかしらという。

- Ⅱ 「積み重ね つまみわけ 積み重ねた上にか又積みわけね」という言葉を大事にした國澤さんは、彫刻の仕事が続いているけれど、どんなことを大切にしているのかしらという。

- Ⅲ 國澤さんの木彫りに触れ、海苔決定を促すところの面白さを振り返って書きたいという。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

(2) 活用のポイント

圓鏢勝三は、自分の目指す創作への姿勢を貫き、理想の実現に向け、常に前向きにたゆみない努力を重ねていった。彫刻家として成功を収めた人物である。しかし、まだ封建的で保守的な考えも強かった当時の芸術界にあって、信念を貫くことはそう簡単ではなかったと思われる。

そこで、厳しい状況の中にあってさまざまな素材を使つての作品作りを続けたところや、伝統を守ることと自分の発想を取り入れることの狭間で悩んだ仁王像の制作についての場面を資料に取り入れた。そして、常に向上心をもって努力を重ねていくことを大事にしていたことがわかる言葉も入れ、その生き方にふれることで生徒が自分を振り返り、これからの一日一日の過ごし方を考えていくことをねらっている。

指導に当たっては、作品の写真なども提示・紹介し、圓鏢の業績を考える助けとし、また平和への思いや夢とロマンを生涯大切にした圓鏢の生き方も合わせて知らせたい。

ア 発問の工夫

圓鏢が創作態度を貫いたところと悩んだところを基本発問にし、中心発問では、彼の母校である市内の小学校の石碑に刻まれている座右の銘として常に心していた言葉から、圓鏢の生き方に迫らせる。

イ 書く活動を取り入れた工夫

生涯、理想の実現のための努力を惜しまなかった圓鏢の生き方に触れさせた後、生徒に今の自分を冷静に振り返り今後につなげていくために書く活動を取り入れる。

ウ 作品の写真(絵)を見てイメージしやすくする工夫

導入で関心をもたせることも含め、二つの仁王像を見比べさせることにする。

終末においては、県内の公園に設置されている平和を願った像や家族をモデルにした作品、メルヘンチックな作品など幅広く紹介する。



「花の精」

(3) 授業の実際 一児童生徒の反応を踏まえてー ア 発問の工夫

基本発問では、圓鏢の自分の制作への熱い思いやこだわり、そして伝統も重んじなければというプレッシャーの中でも自分の創作の姿勢を大事にしたことが出てきた。

中心発問でも、「一つのもので作るのに、自分らしさを大切に、新しい表現や技法をできるだけ取り入れ、よりよいものを作ろうという気持ちを忘れないこと」「自分の限界を決めず、努力と経験を無限に積みかさねていき、満足のいく結果を残すこと」など、圓鏢の生き方に迫ることができた。

イ 書く活動を取り入れた工夫

学習のまとめとして書く活動を取り入れた。生徒は中学校第3学年の時期ということもあり、理想をもち、その実現に向け、一步一步着実に取り組んでいった圓鏢の生き方と今の自分の生き方(進路を含め)を重ねて、ねらいとする道徳的価値とのかかわりで深く自己を見つめていくことができた。

【ワークシートの記述から】

- ・「常に今より上を求めて自分を高めていく圓鏢さんはすごいと思う。私も自分ですぐに限界を決めたりしないで、『努力』を忘れず、『進化』していけるような人になりたい。」
- ・「天狗にはならない。限界をつくらない。ずっと努力を続ける。今の自分は残念だけどどれもできていない。少しずつでもそれができる自分にしていきたい。」
- ・「自分の進路の実現に向け、口で言うばかりではなく、しんどくても確実に行動に移していくこと、それを続けていくことが必要だと改めて思った。」
- ・「今までさぼっていた分、この2か月間1年生で習ったところから見直して必死で勉強した。わからなかったところが少しずつわかるようになって、積み重ねていくことは大事だと思った。」

ウ 作品の写真（絵）を見てイメージしやすくする工夫

導入において、作品に関心をもたせ、圓鐔の紹介につなげるために2種類の仁王像を見せた。違いはすぐにあげられたが、圓鐔が制作した仁王像の特徴をより意識させるために、3～4種類くらいの像を短時間見せてもよい。

終末においての作品の紹介は、平和への願いをこめた「平和祈念像」（広島平和公園）や「朝」（広島駅北口）、家庭的な雰囲気「初夏」「新聞」、仁王像と同時期に制作したユーモラスな「夢・夢・夢」、メルヘンチックな「北きつね物語より」など、素材だけでなくイメージも違う作品を見せると、先に仁王像を見せているだけに圓鐔の創作の幅の広さがより印象的に伝わるものと思われる。また県内各地にも作品が設置されているので、授業に際して写真等により提示することで、より身近に感じられると思われる。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

総合的な学習の時間や学級活動などでの進路学習やキャリア学習との関連が考えられる。

圓鐔が彫刻家を目指したきっかけが小学生のときの小さなできごとであったこと、16歳で内弟子に入ったのは自分の希望通りの道ではなかったが、そこで努力を重ね、力をつけたことが次につながっていることなど、夢の実現には、今自分のおかれているところで精一杯の努力を続けることが大切であることを考えさせることができる。

（５）心のノートの活用

授業の導入または終末において、「心のノート」のP.32「夢や理想をもち それに向かって一步一步進んでいく姿は たのもしなもの」、終末においてP.33「あなたの夢や理想を実現するために いま、どうすることが大切なんだろう」のページが活用できる。



2 自然



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「700さいの大すぎ」	わたしがそだつ町	岩見 文彦(安芸高田市立吉田小学校)
(2)	「待月」	身近な自然の美しさ	小原 智穂(三次市立田幸小学校)
(3)	「時をおよぐクジラ」	自然と共に生きる喜び	石村 誠(庄原市立東小学校)
(4)	「モリアオガエルを守る」	自然を大切に	松葉 伸恵(神石高原町立豊松小学校)
(5)	「恐羅漢」	自然に対する畏敬の念	今田富士男(安芸太田町立戸河内中学校)



教材活用例(1) 「700さいの大すぎ」

〔小学校低学年 主題：わたしがそだつ町 内容項目：4の(5)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—清神社の大杉—について〉

清神社の石段を登りつめた本殿の前，境内の東西に等間隔をおいて，大杉が6本そびえている。推定樹齢700年とされていたが，平成11年9月，西日本を中心に吹き荒れた台風18号で，「観音杉」と呼ばれていた大杉が中途折損して，横臥した。その折に，樹齢を数えたところ，700年を越えていることが確かめられた。この杉は，戦国時代から，歴史の生き証人として，吉田町を見守り続け，多くの人に親しまれ，崇敬されている。昭和43年，吉田町天然記念物に指定された。

奈良時代	大杉が植えられている清神社は，京都祇園社の荘園吉田荘の鎮守として創建された。
戦国時代	境内に杉が植えられた。
元禄6年(1693年)	現在の社殿が造立された。
昭和43年(1968年)	吉田町天然記念物に指定された。
平成11年	西日本を中心に吹き荒れた台風18号で，「観音杉」と呼ばれていた6本のうちの1本の大杉が中途折損して，横臥した。



(イ) 4コマ絵

主人公とおじいさんの散歩から，清神社の大杉に出会う話を設定した。おじいさんから大杉についての話を聞き，見慣れている大杉の生命力や力強さに初めて気付くとともに，大杉に対する愛着や親しみを感じる主人公の気持ちを中心とし，起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	郡山公園や清神社におじいさんと散歩に出かける。	大きな杉の木と出会う。そこでおじいさんから，700年も生き続けていることを聞き，びっくりする。	おじいさんの話から空に向かって一直線に伸びる大杉は，吉田の人によってずっと守られてきたことを知る。	友達と遊ぶ場面では，ぜひこの大杉を友達に見せたいと思い，遊びに行ってみないかと誘う。

イ 資料の解説

【作成の要点】

低学年の発達の段階を考えると、ようやく自分の住む地域という考えがもてるようになってくる頃である。本資料は、自分が住んでいる身近な地域にある神社の境内にある杉の木に焦点をあてる。いつも何気なく目にしている木であるが、700年もの永い間この地域に生き続け、多くの人々の心のよりどころになっていることに気付くという内容にしたものである。

郷土愛を扱った本資料をきっかけに、2学年の学習活動だけでなく、今後3学年「わたしたちのまちはどんなまち」社会科、4学年「郷土につたわる願い」社会科、5、6学年「文化財を描こう」図画工作科、6学年「戦国時代」社会科など、地域の文化にふれる体験や学習活動、地域行事との関連を図りながら、地域社会と接点をつくることができると考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

平成11年9月24日、台風18号で一本（周囲4.8m、樹高45m）が根元14mを残して折れ境内に倒伏した。横臥した「観音杉」は、幹回り約4.8メートル、高さ45mで、二番目の高さだったが、下から3分の1のところが、地響きを立てて折損した。境内は玉垣に囲まれて、北側には本殿・梶若社ほか、東には神楽殿、西に神輿殿とお蔵、南には民家があり、大災害が予想された。しかし、被害はなく不思議がられ、誰からともなく「身代わりの杉よ」と言われた。残った部分に倒木の危険があり、やむなく伐採することになり、平成11年師走、伐採清祓祭を斉行し、多くの皆さんに見守られる中で、石州在の木匠の手により、静かに倒伏された。根元部分を約1メートル掘り下げて、回り約5.5m、厚さ約30cmを切り出して据え付け、平成12年8月10日、毛利元就公郡山入城の日を選んで竣工清祓祭を斉行、「神木殿」と名付けて、永く後世に残すことになった。また、大杉がある境内は、地域の人によって毎日きれいに掃除されている。



ウ 資料全文

「700さいの大すぎ」

「おーい ひろし。 おじいちゃんと こおり山こうえんに さんぽに 行かないか。」

「うん おじいちゃん。こおり山こうえんなら、せいかつかの べんきょうで 行ったことがあるよ。学校の すぐうらだよ。」

ひろしは なんだか わくわく してきた。

こおり山こうえんに つくと まっさきに てんぼうだいへ あがった。ひろしは、ここから見る吉田の町が 大すぎだった。

「ひろし。おじいちゃんより もっとおじいちゃんが いるんだよ。すがじんじやに あいに行こうか。」

「すがじんじやは お正月に行ったことがあるけど……。おじいちゃんのおじいちゃんっていなかったけどな。」

すがじんじやに ついたが なにもなかった。ひろしは すこしがっかりした。

「これが、おじいちゃんの おじいちゃんだよ。」

ひろしのおじいさんは、にっこりして大きな木の前に 立ちどまった。

大きな木が 目の前に5本あらわれた。

「うわあ。でっかい木だな。なんていう名前の木なの。」

「大きいすぎの木だから 大すぎと いうんじやよ。」

「ひろし、この木は、なんさいだと おもう。」

「おじいちゃんの おじいちゃんだから 100さいくらいかな。」

ひろしは、じしん まんまんに こたえた。

「は は は。ひろし この大すぎは おじいちゃんが子どものころから ずっと ここに あったんだ。ここで 友だちと いつも よく あそんだもんじや。」

「なつの あつい日も ふゆの さむい日も たいふうや ゆきや 大あめにも まけず なんと700ねんも ここに 生きている木なんじや。だから 700さいじや。」

ひろしは、なんだか ふしぎな きもちになった。

「ひろし おじいちゃんと手をつないで この木をつかまえられるか やってみよう。」

ひろしは おじいちゃんとだったら 手をつなげるかなとおもって おもいきり 手をのばしたが まったく とどかない。おじいちゃんのすがたは この木ですっかり 見えなくなった。

「ひろし ゆっくり 大すぎのうえのほうを 見てごらん。」

青い空に まっすぐ 一ちよくせんにのびている すぎのてっぺんは、もう空に とどきそうなくらいだった。大すぎのはっぱや えだのあいだから たいようのやさしい光が さしこんでいた。

ひろしは そっと大すぎを さわった。木のかわをよく見ると たてに大きくわれ そのわれ目に ゆびがはいりそうで ごつごつとしていた。上のほうには カナブンやセミがたくさんあつまって 楽しそうに 休んでいた。大すぎも にっこりわらっているように見えた。

「おじいちゃんが生まれる ずっと前から この吉田の町の人たちや こおり山にすむ どうぶつや 虫たちを 700年ものあいだ やさしく見まもっているんじや。」

「この木たちを見ると なんだか元気がわいてくるんじや。」

おじいちゃんは、ゆっくりとベンチに こしをおろした。

「ひろし ここから見てごらん。5本の大すぎが話をしているように見えんか。」

木のねもとの まわりも きれいにはかれ 草一つない。ちいきの人が毎日 きれいにして まもりつづけていることを おじいちゃんがおしえてくれた。

ひろしは しばらくじっと5本の大すぎを見ていた。

「おーい ひろしくん。あしたの土よう日 どこかへ あそびに いこうよ。」

「どこが いいかな。そうだ みんな すぐ近くに とっておきの場所があるんだ。みんなで行ってみようよ。」

そういって ひろしは、にっこり わらった。



エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の大杉に対する思いに共感し、郷土への親しみや愛着をもたせる展開
～ 役割演技を生かした指導 ～

(ア) 主題名 わたしがそだつ町 4ー(5)

(イ) ねらい おじいさんの話や大杉に触れることにより、清神社の大杉に親しみを感じていく主人公の気持ちを考えることを通して、生活している吉田の町の植物や自然に愛着を深め、親しみをもとうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「700さいの大すぎ」

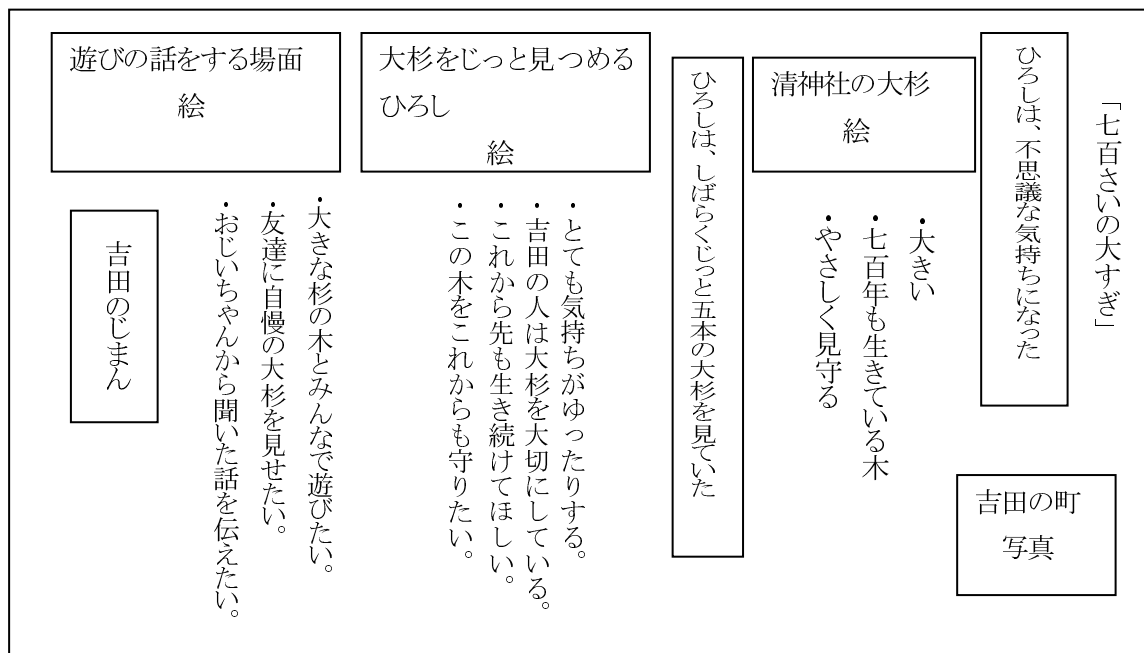
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 ここはどこクイズをする。	○ これは、どこにあるでしょう。	○ 資料に興味や関心をもたせる。
展開	2 資料を聞いて考える。 ○ 700 年もこの吉田に生きている大杉の話を聞いたひろしの気持ちを考える。 ○ 大杉が地域の人に守られている話を聞いた後に、じっと大杉を見つめるひろしの思いを考える。 ○ 友達に大杉を見せたいひろしの気持ちを考える。	○ 700 歳の木と聞いてひろしは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・大きな木だな。 ・700 年も生きている。 ・夏も冬も負けずに生き続けている。 ○ おじいさんの話を聞いた後、ひろしは、じっと5本の大杉をどんな気持ちで見ているのでしょうか。 ・なんだか気持ちがいい。 ・吉田の人は大杉を守っている。 ・これからも生き続けてほしい。 ・この木をこれからも守りたい。 ◎ ひろしが友達に、「とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。」と言ったのはどうしてでしょう。 ・大杉の木とみんなで遊びたい。 ・友達に自慢の大杉を見せたい。 ・おじいさんから聞いた話をみんなに伝えたい。	○ 清神社の様子や「700 年」がイメージできるように当時の人々の生活の絵を紹介する。 ○ 最初がっかりした気持ちと対比させる。 ○ よしずで作った円周 5 mの幹を手で囲ませ、大杉の大きさのイメージをもたせる。 ○ ひろしの大杉に対する親しみや愛着の気持ちを、書く活動を通して気付かせる。 ○ 「とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。」と言うひろしと友達のやりとりを役割演技を通して、ひろしの思いに共感させる。 ☆ 役割演技により、主人公の大杉に対する愛着や親しみについての共感的な理解を深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 身の回りにある古くから残っているものや、これからも守り続けたい吉田の自慢について話し合おう。	○ 吉田町の伝統行事や地域の人々の取組にも目が向くように補助発問をする。
終末	4 吉田の自然や文化を VTR で見ながら、今日の学習を深める。	○ 吉田の町や自然の VTR を見よう。	○ 吉田の町には、みんなを元気づけたり、大切に守り続けたい自慢なひと・もの・ことがたくさんあることを感じさせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

板書は、おじいさんと散歩に出かけ、700歳の大杉に出会った主人公が少しずつ親しみや愛着を感じていく思いが視覚的にとらえられるようにする。そのためには、児童の発言を順番に全て書くのではなく、分類、整理、多様さを構造的に示すようにする。

低学年の児童が教材を理解しやすいように、紙芝居風に提示した場面絵を活用しながら、分割して掲示していく。また、発問に関連するキーワードを掲示し、場面絵とセットで書き、分類、整理する。その際、親しみや愛着にふれた発言を赤色で示す。

終末では、中心発問場面の板書のとなりのスペースをスクリーンとして活用し、板書の一つとして、吉田の自然や文化、行事をビデオで見せるコーナーを設定する。

「わねわねの大きな木」

年 組 ()



わねわねの大きな木に、わねわねの
大きな木に、わねわねの大きな木に、
わねわねの大きな木に。

(2) 活用のポイント

低学年の発達の段階を考え、本資料の主人公に重ねての大杉に対する親しみや愛着の気持ちを考えさせることが大切である。そのために、発問や表現活動（主人公になりきった役割演技）、資料提示の工夫を通してねらいに深く迫ることができると考える。

ア 発問の工夫

主人公のひろしの大杉に対する気持ちの変容を共感的に考えさせるため、3つの発問を「しばらくじっと見ていた。」「とっておきの場所」をキーワードとして、大杉がおじいさんを含め、吉田の町の人にとって心のよりどころになっていることを感じ取らせたい。

イ 表現活動の工夫（役割演技）

友達を大杉のある場所へ遊びに誘う場面で、児童に主人公の役割を与え、即興的に演技することで、道徳的価値に対する一人一人の感じ方や考え方が明確になり、実感的な理解につながるものと考えられる。

ウ 資料提示の工夫

低学年の児童が教材に興味関心がもてるよう、中心的な場面を分割しながら紙芝居のように提示する。そのことが、低学年の児童の理解を手助けすることになる。また、700年生き続けた大杉の年月の長さが実感できるよう配慮したい。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開前段では、清神社についてがっかりしていた主人公が「700年も生き続けている大杉」を初めて知り、「700年も生きていてすごい。」「台風や大雪にも耐えていてすごい。」という気持ちになった主人公の思いに共感できた。

また、おじいさんと手をつないで大杉を捕まえる場面では、よしずで作った円周5mの幹を手で囲ませ、大杉の大きさのイメージをもたせた後に、「おじいさんの話を聞いた後、ひろしはじっと5本の大杉をどんな気持ちで見ていたのでしょうか。」の発問を行った。「ぼくが、大人になっても大杉に生き続けてほしい。」「大杉のために何かし

てあげたい。」「虫たちも集まってきて、自然っていいな。」「ぼくも遊んでみたいな。地域の人が掃除しているからきれいなんだね。」「元気が出て、うれしくなった。がんばってみたいくなって、元気が出た。」といった自然や郷土への親しみや積極的に関わろうとする能動的な側面にふれた心情に共感できた。

イ 表現活動の工夫（役割演技）

中心発問の、「ひろしが友達に『とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。』と言ったのはどうしてでしょう。」では、役割演技を行い、セリフの後に「どうして?」と問うた。主人公が感じた郷土への親しみや愛着を「ブランコも滑り台もないけど、友達にも大杉を見せて、一緒に遊びたい。」「おじいさんから聞いた話をしえてあげたい。」「700年も生きている木を見せて、みんなに元気になってほしい。」という意見が出された。児童の考えや思いを役割演技を通して交流することで心の安らぎやしみじみとした情感に思いを寄せることができた。

ウ 資料提示の工夫

導入では、写真を見せながら「ここはどこ!」と身近な清神社の大杉に興味関心を高めることができた。

展開では、場面絵を活用し、紙芝居風に範読した。板書にも活用したことで状況がつかみやすかった。また、700年前の様子を昔の絵を提示したことにより、「えーそんなときから吉田にあったんか。」など、700年の歳月がつかみやすくなった。

終末では、吉田の町には、みんなを元気づけたり、大切に守り続けたりしたい自慢なひと・もの・ことがたくさんあることを具体的な写真を活用してスライドショーで提示した。吉田の自然や文化、行事について改めて親しみや愛着を感じさせることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

本学年の児童は、昨年度生活科で「春を見つけに行こう」「秋を見つけに行こう」など郡山

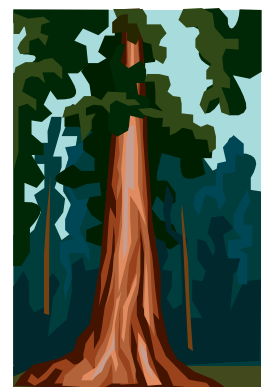
公園や清神社を探検している。また、今年度の遠足では、清神社を含めた郡山でフィールドワークを行っている。

第3学年では、社会科「わたしのまちはどんなまち」という単元で、地域のよさを見つける活動を行い、この「700 歳の大杉」を含め、自然のすばらしさや親しみや愛着を感じることができる。また、終末で見せたとんどや一心祭りなどの地域行事や花いっぱい運動を行っている地域の人、あいさつ運動に立ってくださっている地域の方など、折にふれて本学習と関連をもたせていくことができる。

(5) 心のノートの活用

本授業では、終末に「心のノート」PP. 88-89 の「あなたが そだつ 町」をモデルに、具体的な吉田の町を素材としたひと・もの・ことをビデオで見せる場面を設定した。その画像にも、「地域の中での体験を広げる」「自分の体験と重ねる」「今、生活しているこの吉田の町について、もっと知りたい」という思いが膨らむように心のノートの絵に添えてある言葉を参考にテロップを入れて提示した。

今後、本授業と関連をもたせた他教科、領域の学習のまとめとして、「心のノート」PP. 90-91 の「あなたの 町の すてきな ところを しょうかいする 新聞を 作ろう」を参考にする。その新聞作りを通して、自分の町を意欲的に調べ、吉田町の文化や生活に親しむことができるよう、行事に参加した時の思いや考えを「書く」ことを通して、じっくり深めていく。そして、「わたしを そだてる 町」に一層愛着をもたせる。



教材活用例(2) 「待月」

〔小学校中学年 主題：身近な自然の美しさ 内容項目：3の(3)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—景色「待月」—について〉

「待月」は、三次市出身の奥田元宋画伯の代表作の一つである。

この作品は、辺りが次第に薄暗くなる頃、山並みから、月が今にも顔をのぞかせようとするその瞬間をとらえたものである。緑の山は、月の光を背に受けながら、川面に姿を映し、ほの白く浮かび上がるように描かれている。この作品は、昭和24年日展に出品され、特選と白寿賞を受賞している。本作品は現在、広島県立美術館で所蔵されている。

この絵のモデルとなった景色は、今も当時の面影を残し、四季折々、三次の馬洗川沿いに美しい姿を留めている。

明治45年 大正元年 (1912年)	双三郡八幡村(現・三次市吉舎町)に生まれる。
昭和5年 (1930年)	上京し、児玉希望の内弟子となる。
昭和20年	疎開のため郷里に帰る。その後昭和28年までを郷里で過ごす。
昭和24年	「待月」が日展において特選・白寿賞を受賞する。
平成15年	満月の夜に死去する。
平成18年	三次市に「奥田元宋・小由女美術館」が開館される。

画家 奥田元宋画伯の略歴



(イ) 4コマ絵

主人公が、身近な自然に感じていた思いが、絵とモデルになった景色を重ね合わせて見ること、身近な景色に対して、心情が大きく変化する場面を中心場面にして、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	身近な山や川に関心がもてず、紹介したい景色がなかなか見つからない主人公が、祖父にいい場所を教えてもらえることになり、期待に胸を膨らませる。	美術館で奥田元宋画伯の「待月」の絵を観て、三次の山や川の風景が美しく描かれていることに驚く。	「待月」のモデルとなった景色が今も変わらずあり、その景色を観て、身近な自然の美しさに感動する。	すぐにカメラのシャッターをおさずに見つめ続ける。

イ 資料の解説

【作成の要点】

近年、身の周りに自然が少なくなっている地域に限らず、自然豊かな地域に住みながら、自然の美しさや不可思議さに目を向ける機会が少なくなっている。身近にある美しい自然や気高い美術作品等に意識的に触れようとする態度を育て、素直に感動する心を育てるためにねらいを設定した。

中学年は、社会的活動が広がることで、自然などへの関心が広がる時期である。校区のみならず市内の自然や公共物、美術作品に関心をもたせ、美しいものや気高いものに出会い、感受性や想像する力を高めることができる考える。

主人公の心情が大きく変化した場面で、これまで意識していなかった身近な自然を美しいと思う気持ちを素直に表現できるように書く活動を取り入れた。書く活動を話し合い活動に生かし、新たに学んだこと、感じたこと、考えたことの交流を行い、自らの内面の変化を振り返ることができるようにした。

資料提示において、写真と絵を活用し、それらを並列に提示することで、主人公と同じ視線で資料に浸らせ、中学年の児童に主人公の心情の変化をより共感的に捉えることができるように工夫した。



【心に響くちょっといいはなし】

日本画家 奥田元宋画伯は、昭和19年空襲により、大作十数点を消失する。昭和20年、空襲が激しくなった東京からふるさとにもどってきた。ふるさとに帰ってきた奥田元宋画伯は、画家として活動していくことに悩んだ。その時、奥田元宋画伯の目にふるさとの自然の美しさが映る。自分の心に浮かんだ自然の景色と重なる場所を探し回り、馬洗川から望む景色を見つける。その景色をスケッチし、『待月』が生まれた。『待月』は同じようなモチーフで何枚か描かれている。それまで、主に人物画を描いていた奥田元宋画伯が、風景画家として活動を始める原点となった絵である。その奥田元宋画伯の心の景色となる場所は、現在も当時の面影を残したままの美しい姿を見せてくれている。



奥田元宋・小由女美術館



「待月」をイメージした庭

奥田元宋画伯と妻であり、人形作家の小由女先生の名前で、三次に建設された奥田元宋・小由女美術館には、「待月」にちなんで、山並みを背景に池が作られ、東の空に月を臨むことができる庭が造られている。満月の夜は、開館時間が延長され、その庭に浮かぶ満月を楽しむことができる。

ウ 資料全文

「待月」

たかしは小学4年生です。

夏休みに、先生から、

（三次の自まんでできる景色を見つけてしょうかいしよう。）という宿題が出ました。

たかしは、（三次の自まんかあ・・・鵜飼いや霧の海・・・いろいろあるけどぼくだけの自まんの景色をしょうかいしたいなあ。）と、思いました。

けれども、しょうかいしたい景色はなかなか見つからず、夏休みも後一週間となってきました。困っているたかしを見て、おじいちゃんが声をかけました。

たかしから宿題の話を聞き、

「たかしだけの自まんのけしきか・・・。三次の山や川もいいんじゃないか？」

と言うと、たかしは、言い返しました。

「そんなの三次じゃなくてもどこだってあるし、どこもみんな同じだよ。」

おじいさんは、しばらく考えていましたが、

「そうだ。いいところを教えてあげよう。」

と言いました。たかしは、大よろこびです。

「本当！やったあ！じゃあ、カメラを持って行ってぱっちり写して来よう。」

「その場所をみて、ただカメラにのこすだけじゃなあ・・・。」

おじいさんは、たかしを見て、自信ありげに笑いました。その顔を見て、たかしは、

「そんなすごい場所なの！」

と、ますます喜びました。

二人は、さっそく出発しました。おじいさんは、車を走らせながら、

「たかし、いい天気だな。ほら、川がきれいだぞ。」

と話しかけましたが、たかしは、これからどんなすごい景色がみられるのかとわくわくしていて、何も答えませんでした。

車が着いたところは、奥田元宋^{おくだげんそう}・小由女美術館^{さゆめびじゅつかん}でした。

「ねえ、美術館は、友達は何人もしょうかいするって言っていたんだよ・・・。」

たかしは、小さな声で、つぶやきました。そんなたかしにかまわず、おじいさんはどんどん美術館の中に入っていました。

たかしは、奥田元宋さんの絵をみながら、

（すごい絵だな。もしかしてすごいってこの絵のことかな？でも三次の景色じゃないよなあ。）と思いました。

絵を見終わってホールに出た時、たかしは、展示してある一枚の絵がふと目にとまりました。

「この絵、きれいだなあ。山も川もこの絵みたいだときれいだよね。」

たかしが、そう言うとき、おじいさんは、

「この絵は『待月^{たいげつ}』っていうんだ。三次の画家、奥田元宋さんが、ふるさとの自然の美しさをこの絵に描いたんだ。おじいちゃんはこの絵が大好きなんだ。」

「ふるさとして、この絵は三次のけしきなの？」
たかしは思わず、聞きました。おじいさんは、にっこり笑って、
「さあ、たかしに話した、いい場所に行こうか。」
と、言いました。

おじいさんは、たかしを車に乗せ、さっき通った川ぞいの長土手で車を止めました。
「ここが、たかしにみせたい場所だよ。」
「この川？ここは、さっき車で通った所じゃないか。」
がっかりしながら、車からおりたたかしは、はっとしました。いつも見ていたはずの川の景色が、さ
っき美術館でみた『待月』の絵と重なって見えたのです。
おじいさんは、そっと言いました。
『待月』は、この山と川をかいた絵だよ。奥田元宋さんが美しいと思ってかいた景色を60年たった
今もこんなに近くで見ることができるなんですばらしいだろう。」
山の緑。青い空。川の水は、おだやかに流れています。たかしは、空につながる山の向こうから、
今にも月が顔を出すのではないかと思いました。一枚の絵のような景色の中で水鳥だけが、音もなく
すべるように泳いでいます。
おじいさんは、たかしに言いました。
「どうだい、ここの景色は？」
「うん、山も川も・・・。」
たかしは、そう言いかけて、カメラを手に持ったまま、シャッターをおさず『待月』の景色をじっ
と見つめていました。

※ 「待月」は、広島県立美術館にて所蔵

【参考文献】

奥田元宋・小由女美術館（編・発行）「受け継がれる画家の魂 川合玉堂・児玉希望・奥田元宋」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

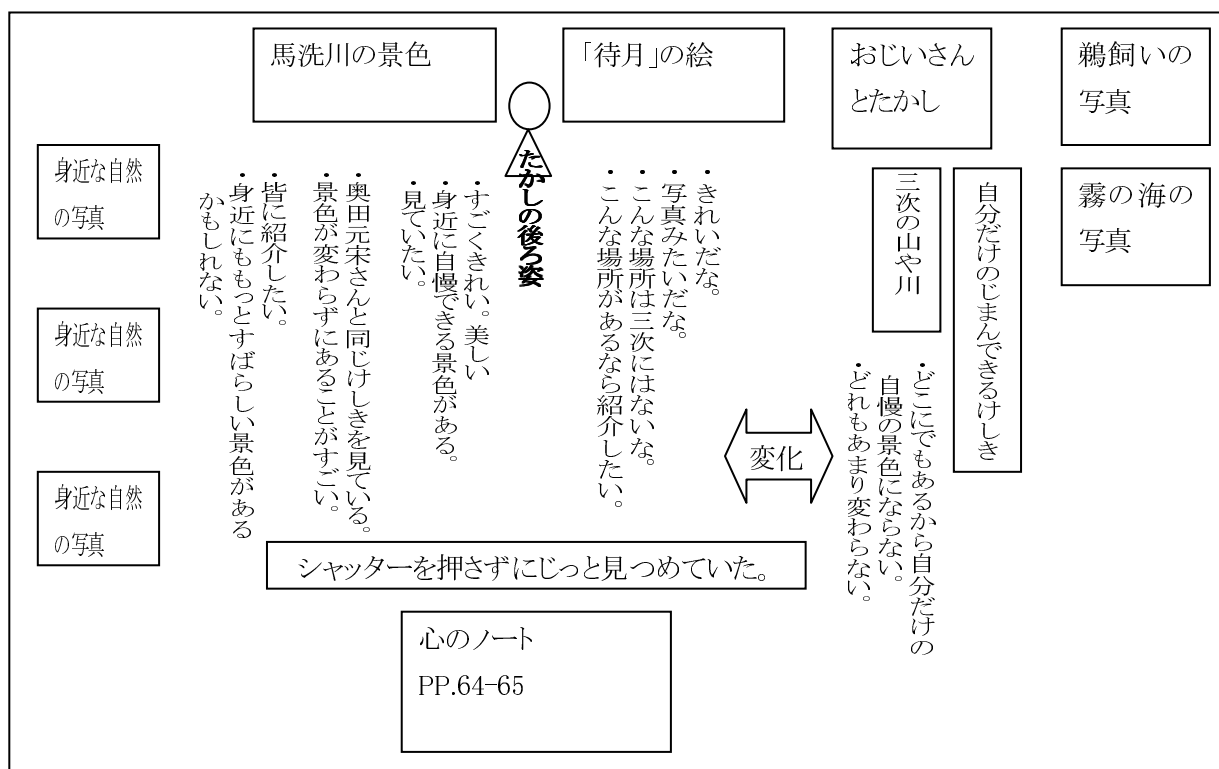
身近な自然の景色に対する主人公の気持ちの変化を中心にした展開
～ワークシートを話し合い活動に生かした指導～

- （ア）主題名 身近な自然の美しさ 3－（3）
（イ）ねらい 地域の自然に関心がもてないたかしが、地元出身の画家、奥田元宋の絵『待月』の
モデルとなった景色に感動する気持ちを通して、身近な自然の美しさに目を向け、素
直に感動する心情を育てる。
（ウ）資料名 「待月」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 三次の景色を思い起こす。	○ 三次で知っている景色は、どんな景色ですか。	○ 校外活動での体験と関連付けて、三次の景色を思い起こさせる。
展開	2 資料を読んで考える。 ○ たかしは、三次の自然をどのように感じているか考える。 ○ 美術館で「待月」を観た時の気持ちを考える。 ○ カメラのシャッターを押さずに景色を見つめた理由を考える。	○ たかしは、三次の山や川をどのように思っているでしょう。 ・どこにでもあるから自分だけの自慢の景色にならない。 ・どれもあまり変わらない。 ○ たかしは、美術館で「待月」を観てどう思ったでしょう。 ・きれいだな。 ・写真みたいだな。 ・こんな場所は三次にはないな。 ・こんな場所があるなら紹介したい。 ◎ 「山も川も・・・。」と言いかけたたかしは、なぜ、カメラのシャッターを押さずに景色を見つめたのでしょうか。 ・三次にもこんなきれいな場所があったんだ。 ・いつも見ているのに気がつかなかった。 ・すぐにカメラで撮るのはもったいない。 ・ずっと見ていたい。 ・絵と重なってきれいだ。 ・月が出る頃みてみたい。	○ はじめにたかしが、三次の山や川をどう感じているかをとらえさせる。 ○ 資料提示は、「受け継がれる画家の魂 川合玉堂・児玉希望・奥田元宋」を見せながら行い、感想を自由に発表させる。 ○ 美術館で絵をみた感想を発表させる。 ○ 「待月」の絵と同じような景色を観た感想を発表させる。 ○ カメラのシャッターを押すのを忘れてみつめ続けた理由をワークシートに記入させる。 ○ ワークシートの内容を話し合い活動で高め合えるように新たな気づき等を発表しあう。 ☆ 児童相互の交流を通して、自己の道徳的なものの見方や考え方を広げたり、深めたりすることができたか。 ○ 身近な自然の写真を提示し、身の周りの自然の美しさに目を向けさせる。
終末	3 自分の生活を振り返る。	○ 身の回りにある自然で美しいと思った景色はありませんか。 ・草花や校舎の写真 ・夕焼けなどの写真	○ 「美しい自然は、あなたの心も美しくします。」の言葉をメッセージのように語り聞かせる。
終末	4 心のノートの言葉を聞く。	○ 心のノートに書かれているメッセージを読みます。	○ 「美しい自然は、あなたの心も美しくします。」の言葉をメッセージのように語り聞かせる。

(カ) 板書例



【板書の構成】

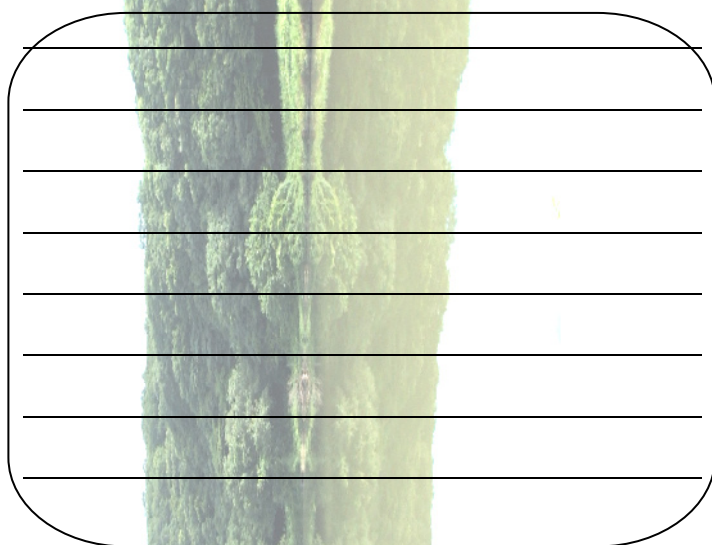
ポイントとなる場面絵や言葉の短冊を貼り、話の流れを視覚的に理解させる。また、たかしの心情が変化していることを矢印で示し、身近な自然の美しさに気付いていく心情の変化をとらえさせる。中心場面では、奥田元宋画伯の「待月」の絵とモデルとなった景色の写真とを並べて掲示し、主人公と同じ目線で見ているような雰囲気をもたせる。そのため、見ている主人公の後姿を場面絵として使い、主人公の表情を自由に想像できるようにする。

中心発問の児童の発言を「感動・美しさ」や「時間や人とのつながり」、「伝えていきたいと思ったり見つけてみたいと思ったりする気持ちの広がり」の三つの観点で意図的に分類して板書する。

「待月」 たいげつ

名前

「山も川も・・・。」と言いかけたばかりは、なぜかスリムシャッ
ターを抱えずに景色を眺めていたのだじゃい。



めがね

金田の背腰に掛つて寝てたじろやむにのりいんろりやを轉
かせよう。



(2) 活用のポイント

本資料は、三次出身の奥田元宋画伯の作品「待月」とそのモデルとなった景色、それぞれの美しさや重ね合わせて観た美しさに感動する主人公を通して、身近な自然の美しさに気付く、素直に感動する心を育むものである。

活用のポイントとして、主人公の心情の変容を共感的にとらえさせることで、児童の心に訴え、新しい発見があるようにした。また、主人公の内的な変容を外的な言動によって描くことで、多様な考えが引き出せるように工夫した。

ア 発問の工夫

資料全体を通し、祖父の言動をキーワードとして、発問構成をしている。中心発問では主人公の心情の変容を共感的に考えさせたい。

イ 話合いの工夫

考えを素直に表現したワークシートの内容を話し合い活動に生かす。意見の交流を通して他者の多様な考えに気付かせると共に自己の道徳的価値の自覚の深化を図りたい。

ウ 資料提示の工夫

優れた美術作品と景色の写真を対比させて提示し、資料の主人公と同じ視線で見ているかのように仕組み、共感させる。また、内省化では、身近な自然の美しさを写真で提示し、心のノート P.65 の詩を読みながら、掲示することで心に残る終末につなげていく。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

1 つ目の基本発問は、資料前段で祖父が、「三次の山や川もいいんじゃないか。」と尋ねる場面を中心に、主人公が三次の身近な自然をどのようにとらえているかを考えさせた。児童は、

- ・山や川はどこも同じだと思っている。
- ・自分だけの自慢にならないから嫌だ。

など、身近な自然の美しさに気付いていない主人公の気持ちをとらえることができた。さらに祖父が、川の美しさを取り上げ、主人公に促した際の主人公の態度は、その思いの強調であり、基本発問で十分な考えが出なかった場合、補助発問として、この場面を活用できるように設定してある。

2 つ目の基本発問は、美術館で「待月」の絵を観て、主人公がどのように思うかを問うものである。児童は、この発問に

- ・きれいだなあ。
- ・写真のようだ。
- ・こんな場所が三次にもあるといいなあ。

と、いうように絵に対する素直な感想と共に三次にもこのような景色があつて欲しいと願う主人公の気持ちを感じ取ることができた。

中心発問では、資料前段の祖父の「ただ写真に撮るだけじゃあ・・・。」という言葉キーワードとして活用して、「たかしが、『山も川も・・・。』とつぶやいて、カメラのシャッターを押さずに景色を見つめたのはなぜでしょう。」とした。この発問は、主人公の外的な言動から内的な心情について、多様な考えをもつことができることをねらいとした。また、考えにくい児童に対して、「山も川も・・・。」の後、何を言おうとしたのかという補助発問をした。

この発問において、児童は、

- | | | |
|-----|---|-----------------------------------|
| 美しい | { | ・きれいだなあ。すぐに写真に撮るのはもったいない。 |
| | | ・この景色をずっと見ていたい。 |
| | | ・山と川ってこんなにきれいだったんだ。 |
| 気付き | { | ・三次にこんなきれいな場所があつたんだ。 |
| | | ・今まで気がつかなかった。どうしてこの場所を選ばなかったんだろう。 |
| | | ・絵を見て、この景色をみたら自然は美しいと感じる。 |
| 広がり | { | ・自分の身近な場所を見て、もっときれいな場所をたくさん見つけよう。 |
| | | ・このままの自然を大切にしていこう。 |

など多様な考えをもつことができた。

イ 話合いの工夫

話し合い活動は、中心発問のワークシートの内容を生かして行った。

ワークシートには、

- ・写真に残しただけじゃあ、みんなに思いが伝わらないかもしれないな。山も川もなかったらきれいじゃないし、美しくない。やっぱり自然は大切なんだな。

・あの絵のように月がちゅっと出てくる時まで
まってみたい。

など、ただ「きれいだから。」という思いだけで
ない多様な考えを素直に表現できていた。

このワークシートを元に、自分の考えを交流す
る話し合い活動において、児童は、他者のより高い
価値や多様な考えに触れることはできた。意見を
分類したり、先の発問で発言内容の板書に書き足
したりしながら、自分では気付かなかった思いや
自分とは違う思いに気付かせて、話し合いを深めた。

その中で、「写真をとるのをがまんした。」とい
う意見の児童は、「どうして我慢したのかうまく
言えなかったけど、〇〇君の意見を聞いて、ぼく
もすぐに写真を撮るのはもったいない、しばらく
見ていたい。と思ったのだと気付きました。」と
いう意見や「私は、〇〇さんの意見を聞いて、こ
の場所のことしか考えていなかったけど、身近に
もきれいな場所があることに気付き、もっと周り
をよく見てみようと思いました。」など自分の意
見を深めて言い換えたり、自分の意見に付け足し
たりしながら、道徳的価値の補充、深化、統合を
行うことができた。

授業後の振り返りでは、

・奥田元宋さんが描いた頃と変わってない昔か
ら伝わっていることが心に残った。
・奥田元宋さんと同じ景色をみているのはすご
いと思った。

といった時間的な流れの中でこの景色の美しさ
を感じることもできていた。

ウ 資料提示の工夫

場面絵を黒板に提示しながら、資料を読み進め
ることで、児童は、資料内容をより理解すること
ができた。

主人公が、美術館で絵を見る場面では、奥田元
宋・小由女美術館発行の本に掲載されている美術
作品を見せながら、自由に感想を言わせた。「き
れい。」「前に見たけど、この絵はすごく大きかっ
たよ。」と友達と話しながら、資料の主人公の気
持ちを共感的にとらえさせることができた。

その結果、授業後も児童は、「画家の奥田元宋
さんが描いた絵は、とてもきれいだった。」

「写真かと思うぐらいきれいだった。」「美術館で
もう一度見てみたい。」といった感想をもち、美
術作品や地域の優れた芸術家にも目を向けよう
とする意欲をもつことができた。

二つの景色を重ね合わせる場面では、児童が同
じ視線で見ているように主人公を後ろ向きで提
示した。主人公の表情から想像する固定概念にと
わられないように配慮したことで、児童の意見を
「美しい」「新たな気付き」「広がり」といった思
いに広げることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

総合的な学習の時間において、1学期に、校区を
中心に地域の特徴や自然に目を向けて、それぞれの
地域のよさを見つけるなどの課題解決的な学習を
行っている。また、その中で地域の特産物であるぶ
どう作りも行っている。これらの学習で、自然に直
接触れたり、見たりする活動の充実が重要である。
また、より広い地域に目を向けさせたりするために、
長期の夏季休業において、市内の主な自然や公共物
などに出会わせるような課題を提示しておくよう
声をかけておいた。

事後活動においては、2学期に収穫を迎えるぶど
う作りの活動で、より自然の厳しさや美しさを身近
に感じることができる。このような学習の過程で、
児童が美しいと思った景色や自然物を写真に残し、
掲示していくことが効果的だと考える。

(5) 心のノートの活用

身近な自然の美しさを実感できる写真を提示し、
児童がその余韻に浸っている終末で「心のノート」
を活用した。「心のノート」PP.64-65 を視覚的に提
示しながら、書かれているメッセージを静かに読み
語り、授業を終えることで、最後の「美しい自然は、
あなたの心も美しくします。」という言葉の意味を
自然に伝えることができ、児童も素直に受け止める
ことができた。

教材活用例(3) 「時をおよぐクジラ」

〔小学校中学年 主題：自然と共に生きる喜び 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—ショウバラクジラーについて〉

庄原市（中国山地）の西城川河川敷から発見された、1600 万年前のクジラの化石である。平成 20 年に新種と認定され、発見者の名前や地名が学名となっている。現在、山の奥である場所が、数百万年前は、海の底であったことから、自然の不思議さや地球の偉大な変化に感動させられるものである。



新生代三期 (1600万年前)	庄原一帯は、拡大する日本海の中にあり、多数の海の生き物が生息していた。
新生代四期 (1000万年前)	この頃、現在の日本列島の地形となった。
昭和初め頃	貝や魚の化石が発見され、地質学調査が始まる。
昭和56年 (1981年)	山岡隆信さんらが、クジラ三種を発見する。仮名「ショウバラクジラ」となる。
平成8年 (1996年)	庄原化石集談会が創設される。
平成20年	山岡さんらが昭和56年に発見したクジラが新種とされ、「ヤマオカクジラ」などと命名される。

ショウバラクジラの歴史

(イ) 4コマ絵

史実を基に、クジラを主人公としたファンタジックな資料にした。悠久の時の流れにおける自然の素晴らしさ、地球の雄大な変化に感動する場面を中心場面とし、4場面構成とした。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	数百万年前、自然豊かな海で、友達や家族、いろいろな生き物と生きるクジラのショウちゃん。ショウちゃんは、この自然豊かな海が大好きだった。	ある時、海の水がだんだんと引いていき、海の生き物たちが一つまた一つと死んでいく。家族、友だちも死に、死の海となっていく様子を悲しみ、恐れるショウちゃん。そして、ついにショウちゃんの命も消えていく……。	化石となり、土の中で眠るショウちゃん。そして、数百万年の眠りから覚めた時、そこに広がる光景は、動物たちが走り回り、緑の木々が生き茂る自然豊かな森であった。その様子に驚き、感動するショウちゃん。	自然豊かな海が死の海へ……、しかし、悠久の時の流れの中で、自然豊かな森へと変貌を遂げたことに驚き、自然の偉大さに感動するショウちゃん。自然があるということに感謝しながら、喜びをかみしめて、森を飛び回るショウちゃんであった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今、自分たちが住んでいる中国山地から海の生き物であるクジラの化石が発見されるという事実は、子どもたちにとって、それだけで驚きを与え、自然の雄大な変化を感じ、素直に感動できるものである。地域教材のよさを生かしながら、その感動をストレートに感じることにできる設定にした。

また、低中学年の児童をイメージし、主人公に同化し、共感しながら考えることができるようにするため、クジラを擬人化し、主人公とした。基本的な設定は、事実に基づくものとしたが、より子どもを話の中に引き込ませるため、ファンタジックな世界として描いていった。

中心場面（山場）においては、死の世界になったと思っていた海が、自然豊かな森に生まれ変わった場面での主人公の喜びを表現した。その際、「大きな声で呼びかけた…」「あたたかい目で・・・見続けた」のように、行動を通して、心の動きを表現することに留意した。

補助的な資料として、場面絵（イラスト）も大きな役割を担っている。温かいタッチと色彩で描き、ファンタジックな内容にマッチするものとした。また、自然豊かな海と自然豊かな森を対比させるために、構図を同じものとするなど、視覚的にも、子どもの心に響かせるものとなっている。



【心に響くちょっといいはなし】

前述の「ショウバラクジラの歴史」の年表にも記載しているが、このショウバラクジラを発見した一人が、題材となった場所を校区とする小学校の卒業生である山岡隆信氏である。山岡さんは、小学校在学時から化石発掘に取り組み、化石少年と呼ばれるようになる。時には、周りの冷たい視線に合い、挫折を経験しながらも、大きな発見をしたいという夢を貫き、あきらめずに化石採取を続ける。そして、中学生の時に恩師の広瀬先生とともに、西城川の河原から、クジラの化石を数点発掘する。進学という人生の節目でも、広瀬先生の言葉を信じ、地元での化石発掘に一生をかけることを誓い、以後数十年、化石を掘り続けてきた人物である。中学生の時に見つけたクジラの化石が新種であることが、27年の研究の末に明らかになり、その功績を称え、その一頭に「ヤマオカクジラ」という学名が付けられることとなった。



山岡隆信氏

以上の話を、「時をおよぐクジラ」の外伝的なものとして、道徳資料「化石少年」（主題「やり遂げる思い」 1－（2）努力）として教材化している。「時をおよぐクジラ」と共に行うことで、相乗効果が期待される。

「時をおよぐクジラ」

むかしむかしのそのまたむかし、人間がこのちきゅう上にあらわれる前のお話です。そのころは、このちきゅうはしぜんゆたかで、どうぶつたちや魚たちの楽園でした。

クジラのショウちゃんは、ゆたかな海で生まれ、大すきなお父さん、お母さん、友だち、そして、多くのなかまとともに、楽しくくらしていました。

ショウちゃんは、このしぜんゆたかな海が大すきで、いつもおさん歩に出かけていました。数千びきの小魚のむれ、見たことのないようなふしぎな形をした生きもの、とってもきれいでうっとりするような魚たち、海のそこでゆらめく数え切れないほどの海草、そのたくさんの生きものとの出会いが、ショウちゃんにとって何よりのよろこびでした。

海のおさん歩からもどったショウちゃんは、お友だちのノブちゃんと出会いました。

「ショウちゃん、また海のおさん歩に行っていたの。」

「うん、だってぼく、いろいろなお魚さんたちにあったり、お話ししたりするのが楽しいんだもん。」

「本当にショウちゃんは、この海が大すきなね。」

「ノブちゃんもいっしょに行こうよ。本当にたくさんの生きものが、この海にはいるんだよ。」

「うん、行こうか。じつは、わたしも、この海が大すきなんだ。」

二人とも、この海に生まれてきたことをしあわせに思っていました。



ところが、このしぜんゆたかな海に大へんなことがおこったのです。だんだんと海の水が引きはじめ、海草はひ上がり、多くの魚がいきたえていったのです。

「ぼくの大すきだった海が……。いのちいっぱい海が……。」

だけどショウちゃんにはどうすることもできませんでした。一つ一つきえていくいのちを見まもることしかできなかったのです。

そして、とうとうお友だちのノブちゃんも、お母さんもお父さんもみんないなくなってしまう、ショウちゃんも、水がなくなった海のそこで、一人ぼっちで、よこたわってしまいました。

「このまま……この海も、しのせかいになっちゃうのかな……。」

「いやだ。そんなこと……、そんなせかいなんて……。」

ショウちゃんの中から、なみだが一つぶこぼれおち、一つぶのたねの上におちました。そして、そのたねから出てきた小さなめを見ながら、とうとうショウ



ちゃんも力つきていきました。



それから、長い長い時がすぎていきました。ショウちゃんはか石となって、岩の中でねむりつづけました。

どれぐらいの時がたったのでしょうか。ねむりつづけるショウちゃんに、小さなものが聞こえてきました。

「チュン」「チュンチュンチュン」「ピ・ピ・ピ・ピー」「サヤサヤサヤ・・・」
「ん……。何の音だろう。」

ショウちゃんが目をあけると、そこには、一人の男の子が立っていました。
「クジラくん見いーつけた。」

ショウちゃんは、か石をほりに来た一人の男の子にはっ見されたのです。



そして、長いねむりからさめたショウちゃんの目の前には、思いもかけなかった光けいが広がっていました。そこは、たくさんの生きものにかこまれた緑ゆたかな森だったのです。長い年月がたって、



海の生きものたちが土にかえり、そしてえいようとなり、新しいのちに生まれかわったのです。ひ上がった海に草がはえ木がしげり、そして、たくさんの虫や鳥、どうぶつたちが生き生きとこの森をかけ回るようになったのです。

「あのしんだ海が、こんなゆたかな森に・・・。」

「草がはえている。木がしげっている。鳥がとんでいる。どうぶつたちがかけ回っている。歌声が聞こえる。わらい声が聞こえる。みんな生きている。みんな生きているんだ。」

「ノブちゃん、お母さん、お父さん、見てごらん。ぼくたちの海が、こんなみどりゆたかで、どうぶついっぱい森に生まれかわったんだよ。」

ショウちゃんは、とってもとってもうれしくなって、今この森をかけ回っているどうぶつや草や木たちに、そしてむかしの海のなかまたちにとどくように、大きな声でよびかけました。

「ありがとう、みんな。」

そして、あたたかい目で、いつまでもこの森を見つづけていました。

【参考文献】

古川義雄・山岡隆信著（2002年（平成14年））「備北層群」 庄原化石集談会

庄原市自然科学博物館（2008年）「第61回特別展『備北層群産出のクジラ類化石』展示解説」絶版

自然の雄大な変化を、感動をもって感じることできる展開A
～ ファンタジックな大型絵本による資料提示を生かした指導 ～

(ア) 主題名 自然と共に生きる喜び 3－(2)

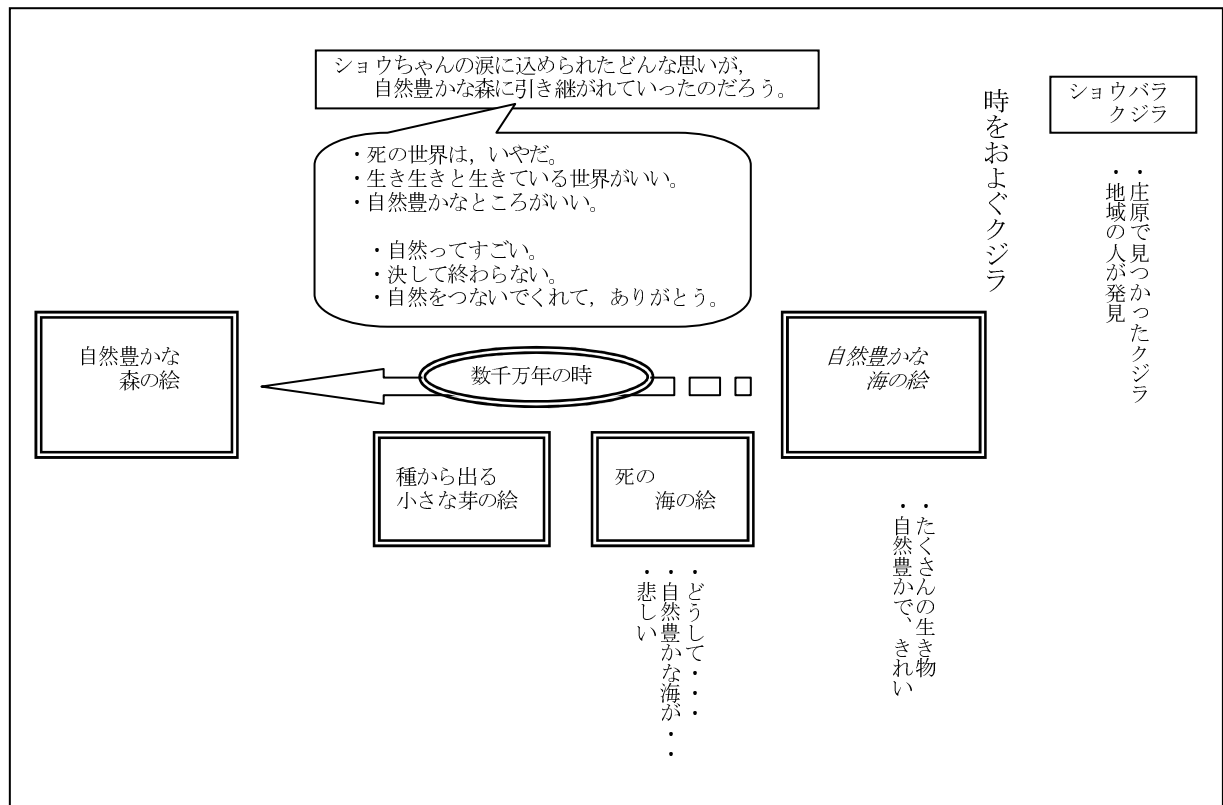
(イ) ねらい 死んだと思った海が、自然あふれる森に生まれ変わったことを知ったクジラの気持ちに共感させることにより、自然の不思議さ、雄大な変化に感動し、いまここにある自然を大切にしようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「時をおよぐクジラ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 ショウバラクジラについて知る。	○ ショウバラクジラって知っていますか。 ・ おじいちゃんに聞いたことがある。 ・ 庄原に住んでいたクジラのこと。 ・ 地域の人が見つけたクジラの化石。	○ 地域の話であることを全員のものとし、資料に引き込ませる。
展開	2 主人公の気持ちを捉える。	○ ショウちゃんは、この海のことをどうして好きなのでしょう。 ・ たくさんの生き物がいるから。 ・ 自然豊かで、きれいなところだから。 ○ 涙をこぼしながら、ショウちゃんはどんなことを考えていたでしょう。 ・ どうしてこんなことになったんだろう。自然豊かなこの海が好きだったのに。 ・ みんながいなくなった。一人ぼっちになって悲しい。 ・ ぼくも、死んでしまうんだ。死の海になってしまうんだ。	○ 大型絵本で、資料提示し、絵からも、この海の素晴らしさを感じさせていく。 ○ 児童の経験も振り返らせながら、自然がなくなることの悲しさに共感させる。
	3 主人公の気持ちを考える。	◎ ショウちゃんの涙に込められたどんな思いが、自然豊かな森に引き継がれていったのだろう。 ・ 死の世界は、いやだ。 ・ みんなが生き生きと生きている世界がいい。 ・ 自然豊かなところに生まれ変わってほしい。 (補) 生まれ変わった森を見て、ショウちゃんは、どんな気持ちになってきたでしょう。 ・ どうしてこんな不思議なことが起こったんだろう。すごいな。 ・ 海は死んだけど、こんな命いっぱい森に生まれ変わったんだ。 ・ ぼくの仲間も死んだけど、この森の動物たちに引き継がれているんだ。 ・ 自然ってすごいな。決して終わることはないんだ。 ・ 豊かな自然をつないでくれて、ありがとう。	○ ワークシートに書かせ、一人一人に自分の考えをもたせるとともに、意図的指名に生かす。 ○ 机間指導の中で、考えにくい児童へ補助的な声かけを行う。 ○ 種に落ちる涙から、自然のつながりをイメージさせていく。 ☆ 大型絵本による資料提示は、児童の理解を容易にし、クジラの気持ちへの共感や自然に対する感動を促すことができたか。
	4 自己の生活につなげる。	○ 自然がある喜びを感じたことはありませんか。 ・ きれいな虹を見て、うれしくなった。 ・ 緑の葉っぱを見て、生きてるんだなと感じた。 ・ 鳥の声を聞いて、気持ちよくなった。	○ 今までの経験、体験を振り返らせ、身の回りにある自然の喜びに気付かせる。
終末	5 自然のよさを感じる。	○ この庄原の自然をみんなで感じましょう。「美しい庄原の自然」	○ 美しい庄原の自然の写真をBGMと共にスライドショーで流すことにより、自然があることの喜びを感じさせる。

(カ) 板書例



【板書の構成】

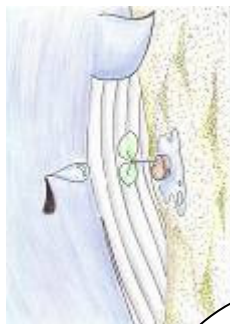
「自然豊かな海」と「自然豊かな森」を対称的に構成することにより、自然のつながり、再生を感じさせることを意図とした。また、数百万年の時の流れを長い矢印で表すことにより、視覚的にも時の長さを感じさせていくことができる。そして、板書の中央に、中心発問を書くことにより、自然の豊かさ、喪失、再生、全てがつながりの中にあり、その雄大な変化を丸ごと受け止めることの大切さ、それこそが自然の不思議さ、素晴らしさなのだという意識させるように工夫した。

世界をめぐくしん

／ ()

()

- ◎ ショウちゃんのなみだにこめられたような感じが、自然ゆたかな森に引きつがれていったのだろう。



自然の再生の偉大さから、生命の不思議さと連続性を感じることもできる**展開B**

～ 導入、展開、終末の連動性を生かした指導 ～

(ア) 主題名 命のつながり 3－(1)

(イ) ねらい 死んだと思った海が、命あふれる森に生まれ変わったことを知ったクジラの気持ちに共感させることにより、生命のつながり、生きることの喜びを感じ取り、生命あるものを大切にしようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「時をおよぐクジラ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 「生命」に対する課題意識をもつ。	○ 地球からみんなに手紙をもらいました。 「私(地球)の上で暮らす者たちが、あまりにも命を粗末にするので、悲しい。みんなちゃんと『生きている』かい？」 ・どうして、みんなちゃんと生きているよ。 ・「生きる」ってどういうことだろう。	○ ファンタジックな世界に入り込めるように、地球からの手紙を読むという設定から入る。また、『生きる』ということに対する課題意識をもって、資料に入れるようにする。
展開	2 主人公の気持ちを捉える。	○ ショウちゃんは、この海のことがどうして好きなのでしょう。 ・たくさんの生き物がいるから。 ・友だちや家族と楽しく暮らしているから。 ○ 涙をこぼしながら、ショウちゃんはどんなことを考えていたでしょう。 ・どうしてこんなことになったんだろう。この海が好きだったのに。 ・みんながいなくなった。一人ぼっちになって悲しい。 ・ぼくも、死んでしまうんだ。生きていてもしょうがない。	○ 紙芝居形式で、資料提示し、絵からも、この海の素晴らしさを感じさせていく。 ○ 児童の経験も振り返らせながら、死の悲しみに共感させる。 (子どもの実態により配慮が必要)
	3 主人公の気持ちを考える。	◎ ショウちゃんの涙に込められたどんな思いが、命豊かな森に引き継がれていったのだろう。 ・死の世界は、いやだ。 ・みんなが生き生きと生きている世界がいい。 ・この命をつないでいきたい。 (補) 生まれ変わった森を見て、ショウちゃんは、どんな気持ちになってきたでしょう。 ・どうしてこんな不思議なことが起こったんだろう。すごいな。 ・海は死んだけど、こんな命いっぱい森に生まれ変わったんだ。 ・ぼくの仲間も死んだけど、この森の動物たちに引き継がれているんだ。 ・命ってすごいな。決して終わることはないんだ。 ・命をつないでくれて、ありがとう。	○ ワークシートに書かせ、一人一人に自分の考えをもたせるとともに、意図的指名に生かす。 ○ 机間指導の中で、考えにくい児童へ補助的な声かけを行う。 ○ 種に落ちる涙から、命のつながりをイメージさせていく。 ☆ クジラの気持ちへの共感を通して、導入における課題意識を自分なりに発展させていくことができたか。
	4 自己の生活につなげる。	○ 命を育んでくれるこの地球に、みんなもありがとうの気持ちを伝えてみよう。 ・ぼくたちを生んでくれて、ありがとう。 ・これからも命を大切にしていこうよ。 ・これからもずっとずっとがんばって生きていこうよ。	○ 生きていることの感謝の気持ちを表現させることで、生きていることの喜びを感じさせる。
終末	5 命について考える。	○ みんなで声を合わせて、「ありがとう」と言ってみよう。 「地球のメッセージ…生命は途切れることなく受け継がれていく。生きる喜びを感じてほしい。」	○ 子どもたちの感謝の声に対する地球からの返事のメッセージ(録音)とすることにより、余韻をもたせて終わる。

(2) 活用のポイント

自然の雄大な変化に気づき、感動をストレートに感じさせることが、大きなポイントである。そのためには、主人公に同化しながら、共感的に考えさせていくことが有効である。手立てとしては、共感的な発問を仕組んでいたり、資料提示の工夫により、ファンタジックな世界に引き込ませていたりすることが考えられる。また、自分たちの生活に密接に関わっていることを、地域教材のよさを生かしながら感じさせたり、板書の工夫により、自然の悠久の流れを視覚的に感じさせたりすることも有効である。

ア 発問の工夫

展開中での4つの発問を、全て「今の自然」に対する思いを考えさせるものにしていく。そのことにより、豊かな自然がある喜び、それが壊れていく悲しみ、そして再び豊かな自然が蘇る感動を、主人公のクジラと同化しながら共感させていくことができる。

イ 資料提示の工夫

資料提示を、主人公の表情と豊かな情景で表された大型絵本で行っていく。そのことにより、ファンタジックな世界に浸りながら、主人公のクジラに共感できるようになり、自然への思いを素直に表現させていくことができる。

ウ 導入の工夫

自分たちの地域の話（地域教材）ということを導入で押さえる。そのことにより、今自分たちが立っているこの場所が、数百万年前は、自然豊かな海だったことに気付かせることにより、児童は、自然の雄大な変化、不思議さ、素晴らしさを実感できるものになる。

エ 板書を生かす工夫

「自然豊かな海」⇒「死の海」⇒「自然豊かな森」の連続性が分かり、また、「自然豊かな海」と「自然豊かな森」を対比させる板書にしていく。そのことにより、視覚的にも、自然の連続性や普遍性を感じ取らせることができる。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開全体の中で、「動物がいて、鳥がいてよかった。緑ゆたかでもよかった。」「ゆたかなしぜんをありがとう。」という反応が多かった。自然がある喜び、生き物がある喜びを主人公に同化して考えることができ、命あふれる自然のよさと不思議さに感動することができた。

イ 資料提示の工夫

現実的でないファンタジーの世界であるが、温かく親しみやすいイラストを大型絵本にし、読み聞かせ風に提示していくことにより、資料に自然に入っていく様子が見られた。また、擬人化された動物の絵などにより、主人公のクジラに同化しながら、考えていく様子が見られた。

ウ 導入の工夫

導入では、「えー、庄原にクジラがいたの。」「ここが海だったの。」と実感として不思議さを素直に感じることもできた。また、「化石を見に行きたい。」「わたしも見つけてみたい。」などと、生活につなげて考えていくことができ、自然の雄大な変化をより実感していくことができた。

エ 板書を生かす工夫

展開後段では、「しぜんゆたかな海にもどってほしいというショウちゃんのおいが、しぜんゆたかな森になった。」などと考えることができた。生命あふれる自然は、たくさんの命や自然が生まれ変わり連続していることを感じさせることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科「わたしたちの町はどんなまち」という単元の中で、地域の良さを見つける活動をするることにより、ショウバラクジラ発掘地のことも押さえておいた。そのことにより、地域の話である、本当の話であるということ意識して、資料に入っていくことができた。

「命を見つめて」という生き物のくらしを考える総合的な学習の時間の中の単元や「生きもののようす」という理科の単元と連動させていくことにより、

より実感をもって、自然の素晴らしさを感じさせていくことができる。

道徳の時間において、「化石少年」という同じ素材を題材にした資料とつなげていくことにより、多様な道徳的価値とからませていくことができる。

（５）心のノートの活用

「心のノート」P. 54 の自然への愛着を感じる詩を拡大コピーし、教室に掲示しておく。子どもの気付きがあれば、それを全体にも投げかけ、豊かな心を養っていく。

理科「生きもののようす」の単元の中で、一年間を通して、植物や動物の生きている姿を感じさせる。その学習の初めに、「心のノート」PP. 60-61 を活用し、生きている姿を感じたことを記入させることにより、自分たちと同じように生きている、共に生きている生き物への愛着を深めさせる。

自由に心のノートを読んだり書いたりできる月一回の朝会を使い、学級の児童全員に「心のノート」PP. 62-63 の内容について考えさせる。日常生活で感じる自然や生き物への思いを振り返らせる。また、一人一人の思いを交流することにより、動植物愛護に対する多様な見方、考え方にふれさせる。



教材活用例(4) 「モリアオガエルを守る」

〔小学校高学年 主題：自然を大切に 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—モリアオガエル—について〉

モリアオガエルは、日本固有のカエルで、水面上にせり出した木の枝などに泡状の卵塊を産み、卵塊の中で孵化したオタマジャクシは、雨でとけ崩れる卵塊とともに水面へ落下していく。

しかし、近年モリアオガエルは、各地でその数が減り、絶滅危惧種に指定されている。その理由として、生息地の森林などに人の手が入り、環境が変化し、水面上に木の枝がせり出すような湖沼が少なくなったためであると言われている。

神石高原町の上豊松では、モリアオガエルを保護することで地域の自然環境を守る活動が行われている。



モリアオガエルと卵塊

(イ) 4コマ絵

自分の命が残り少ないと知りながらも、モリアオガエルを守り、自然保護の必要性を伝えようとした井上末枝さんの生き方や考え方が感じられるように4つの場面で構成した。

	1	2	3	4
場面のイメージ絵				
絵の説明	平成13年6月、上豊松の井上末枝さんが、田んぼのそばの草むらにソフトボール大の泡状のものを2個見つけた。モリアオガエルの卵ではないかと思った。	次の年の6月、3個の卵塊を発見した。中学校の先生にみてもらい、モリアオガエルの卵であることを確認した。その後、井上さんは、毎日観察し、卵のまわりに水たまりを確保した。 地域の人も協力して、自然保護を行い、地域の環境が少しよくなったのを実感した。	井上さんは、以前手術して治したはずの病気が再発し、あと数年生きられるかどうかという状況になった。 それでも井上さんは、自分のつとめとして、モリアオガエルの保護活動을続け、地域の子どもたちにも紹介した。 しかし、平成21年1月井上さんは、亡くなられた。	その後も、地域の人たちが協力して井上さん宅のモリアオガエルの世話や自然保護活動が続いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

井上さんは、もともと自然や動植物を大切にする人だったが、病気が再発して、自分の命が残り少ないと知ってからは、自分の命はもちろんのこと、身のまわりの小さな命も今まで以上に愛おしく感じ、残された時間の中で、モリアオガエルを一生懸命保護をされた。そうすることが自分が生きている証にもなっていった。また、地域の美しい自然を未来に残すために、身近な小さな動植物を守り育てることが必要であると子どもたちに伝えようとされた。かつての豊松村の広報に「小動物や人間にやさしい公害の少ない自然環境づくりに努力することは、今私たちに与えられた大切なつとめだと実感しております。」とその思いが記されている。子どもたちには、井上さんの生き方や思いを知り、これまで当たり前と思っていた地域の自然の美しさは普遍的なものでなく、保護していく必要があることを感じてほしいと考えた。

本校の高学年は、井上さん宅にモリアオガエルの見学に行っている。そのため、モリアオガエルが育つ自然条件などの知識がいくらかあり、モリアオガエルを守るために木の枝打ちや水たまりが確保されているのを実際に見ているので、この体験学習を想起させることで、場面の様子や状況が理解しやすいと考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

井上さんは、毎年、モリアオガエルの卵塊を見つけた最初の日からオタマジャクシが水たまりに落ちていく最後の日まで、その数を毎日3年間日記に書き記しておられた。

息子さんへの聞き取りでその日記を見せていただくと、毎日、田んぼごとの卵塊の数、合計など細かく書き込まれていた。この日記で毎年の卵塊の見られる時期や数の増減を比べておられたようだ。子どもたちが見学に来たことも毎年書かれていた。

また、日記には、自分の病気の治療のためにしたことも毎日書かれていて、病気を克服して生きようとされていた気持ちが伝わってきた。しかし、その日記の3年目は1月の半ばで終わっている。息子さんは、「この日記を使い始めたとき、自分の病気のことをすでに知っていた。せめて3年は生きようと目標にして頑張っていたのだろう。」と言われた。びっしり書き込まれた2年間とは対称的に3年目の日記は空白である。この空白を今後の地域の人や子どもたちの活動が埋めてくれることを願いたい。

ウ 資料全文

モリアオガエルを守る

モリアオガエルは、日本にしかないカエルで、水面上のせり出した木の枝などに泡で包まれた卵塊を産みつけます。一週間から二週間たつと、卵塊の中でふ化⁽¹⁾してオタマジャクシになって雨を待ち、雨で溶けくずれる泡とともに水面へ落下します。しかし、近年、モリアオガエルは、各地でその数が減っています。それは、生息地の里山を人間が開発してこわしたため、環境が変化し、水面上に木の枝がせり出すような湖沼が少なくなったからです。また、農薬の使用もその原因の一つです。

モリアオガエルは、絶滅危惧種⁽²⁾に指定されています。

上豊松の中間谷に住む井上未枝^{まつえ}さんは、身のまわりの動植物をととても大切にする人でした。この辺りには、昔からモリアオガエルが生息していたのですが、昔に比べ、その姿を見ることも少なくなっていました。

「見た目は、昔と変わらんけど、この里山も水や空気がよごれて、モリアオガエルも住めん環境になってしまたんかなあ。」と井上さんは、さみしそうにつぶやきました。



そんなある日（平成13年6月）、井上さんは、田んぼのそばの草むらでソフトボールより少し大きい白い泡のかたまりを2個見つけました。（これはもしかしてモリアオガエルの卵では・・・）

次の年も同じような場所で、今度は三個の白い泡の固まりを発見しました。

そこで、中学校の理科の先生に相談し、見てもらいました。

「これは、確かにモリアオガエルの卵ですよ。」

と言われ、

「やっぱりそうじゃったんじゃ。まだモリアオガエルはこのあたりにいくらかおったんじゃ。昔の自然条件が残っていたんじゃ。よし、このまま放っておいたらいけん。守ってやらんと。」

と言って、急いで卵の下の水たまりを深くほって広げました。

卵塊を見つけた日から井上さんは、毎日観察をして、日記に卵塊の数を書き記しました。また、毎年、6月の中頃には、モリアオガエルが水たまりのちょうど上で卵を産めるように木の枝打ち⁽³⁾をしたり、モリアオガエルの天敵⁽⁴⁾であるヘビが近づかないようにしたりしました。



この地域の世話役である佐藤さんも、以前から地域の環境の変化に不安を抱いておられたので、そんな井上さんの様子を知り、

「みんなで里山の自然環境を守り育てようじゃないか。」

と地域の人に呼びかけました。

地域の人たちも賛同し、さっそくみんなで草刈りや溝のそうじなどを始めました。また、稲を育てるのに、きつい農薬でなく、安全で安心な物を使うようにしました。

すると、次の年、その地域で見られるホタルの数が増え、モリアオガエルの声も多く聞けるようになりました。佐藤さんは、うれしそうに、

「ホタルが増えたということは、川の水がきれいになったということじゃ。」

と言いました。井上さんは、

「この前、日記を見たら、前よりモリアオガエルの卵の数がぐんと増えた。こんな環境なら、私も長

生きできそうですわ。」
と笑顔で言いました。

しかし、それから何年か後、井上さんは、以前手術して治したはずの病気が再発してしまいました。医者からも無理をしないように言われましたが、井上さんは、山や川や田畑の世話を一生懸命に続けました。

その後、井上さんの病状は悪化し、あと数年生きられるかどうかという状態になり、自分の家のまわりの木の枝打ちや草刈りをする体力もなくなっていました。それでも、モリアオガエルの観察や世話は毎日欠かしませんでした。それどころか前にも増してモリアオガエルを守ることに一生懸命になりました。

井上さんは、佐藤さんたち地域の人々の協力を得て、モリアオガエルが卵を産む時期になると木の枝打ちをしたり、その下にみぞを作ったりしました。さらに、井上さんは、

「みなさんのこれからの勉強に役立てていただければ何よりです。」
と小学校の子どもたちに見学に来るよう知らせてくださり、佐藤さんといっしょに説明もしてくださいました。また、自宅の周辺に昔から生えていた山野草に名札をつけて、子どもたちに教えてくださいました。

「きれいでしょ。こんな花やモリアオガエルが毎年見られるように守っていかなとね・・・それが、わたしのつとめです。」

井上さんは、子どもたちに優しく語りかけました。

しかし、平成21年1月、モリアオガエルの保護・観察に努力された井上未枝さんは、その年のモリアオガエルの鳴き声を聞くことなく亡くなられました。

6月になると、小学校の子どもたちがモリアオガエルの見学にやって来ました。井上さんの姿はありませんが、その家の庭や森は地域の人たちの力を借りてきれいに草が刈られ、モリアオガエルの卵塊の下には、広い水たまりが確保されています。子どもたちが観察しやすいようにあぜ道まで作られていました。井上さんが大事に育てた山野草もさいています。

佐藤さんが、子どもたちにモリアオガエルについて説明してくださっているときのことです。井上さんの家の雨どいをふと見ると、大きなモリアオガエルが、今までに見たこともないほど美しい緑にかがやいていました。

【注】

- (1) 卵からかえること。すなわち、卵を産む生物の発生で、卵から幼体がでてくること。
- (2) 動植物のなかで、一個体も生存しなくなった状態を「絶滅」したといい、その恐れが最も大きな状態の種や亜種のこと。
- (3) 土地に生えているままの樹木の枯れ枝や生枝の一部を取り除くこと。
- (4) ある特定の種の動物の捕食者、寄生者として、それを殺したり増殖をはばむ動物のこと。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「つとめ」というキーワードに着目し、主人公の生き方について考える **展開A**

～ 体験活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 自然を大切に 3－(2)

(イ) ねらい モリアオガエルを守る活動に努力された井上未枝さんの思いや生き方を考えることを通して、自然の美しさやもろさに気付き、地域の自然を大切に守ろうとする心情を培う。

(ウ) 資料名 「モリアオガエルを守る」

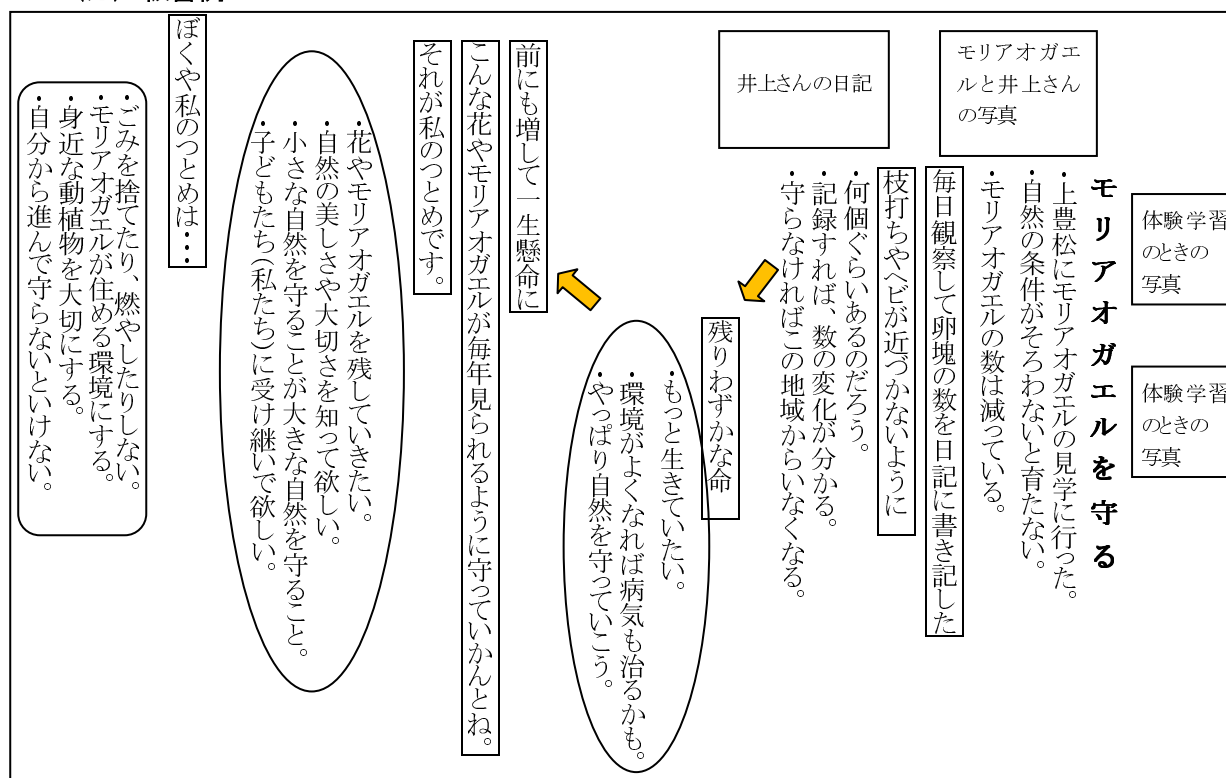
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 モリアオガエルの声を聞き、知っていることを出し合う。	○ モリアオガエルについてどんなことを知っていますか。 ・上豊松に見学に行った。 ・自然の条件がそろわないと育たない。	○ 昨年度の体験学習を想起させ、資料への方向付けをする。
展開	2 資料を聞いて考える。	○ 井上さんは、なぜ卵塊の数を日記につけたり、枝打ちやヘビが近づかないようにしたのでしょうか。 ・何個ぐらいあるか知りたいから。 ・記録すれば増えているか減っているか分かる。 ・モリアオガエルを守ろうと思った。 ○ 自分の命が残り少ないと知った井上さんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・もっと生きていたい。 ・残された時間で自分に何ができるだろう。 ・環境がよくなると病気も治るかもしれない。 ・やはりモリアオガエルや自然を守っていこう。 ◎ 井上さんはどんな思いから「私のつとめ」としてモリアオガエルを守り続けたのでしょうか。 ・花やカエルを毎年見られるようにしたい。 ・生きている限り自然保護を続けたい。 ・子どもたちに自然の美しさや大切さを伝え、知ってもらいたい。 ・今の自然をいつまでも残して欲しい。 ・小さな自然を守ることが大きな自然を守ることにつながることを伝えたい。 ・自然を守る活動を伝え、受け継いでもらいたい。	○ 井上さんが、毎日、卵の数を書き込んだ日記を提示し、モリアオガエルがこの地域から消えないように守ろうとしたことをおさえる。 ○ 自分に残された時間が短いと知り、自然を守る思いを強めたことをおさえる。 ○ 井上さんの話や田んぼの様子を想起させ、「つとめ」に込められた井上さんの思いを考えさせる。 ○ ワークシートに書く。 ○ 自然の美しさや保護の大切さを伝えたかったことをおさえる。 ☆ 体験活動で感じたことや考えたことを踏まえ、井上さんの思いにせまることができたか。
開	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分たちの「つとめ」は何か考えましょう。 ・ごみを捨てたり、燃やしたりしない。 ・モリアオガエルが住める環境にすること。 ・身近な動植物を大切にすること。 ・自然がいっぱいだからいいと思っていたけど、進んで守っていかないといけない。	○ 井上さんの思いを受け、自分と自然との関わりを振り返らせる。
終末	4 まとめをする。	○ 心のノート P.62 を読みましょう。 ○ 「きらり豊松」のビデオを視聴しましょう。	○ 自然はこわれるとともにには戻りにくいことを知らせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例



【板書の構成】

板書は、井上さんや児童の思いが視覚的にとらえられるようにする。そのためには、児童の発言を整理・分類して書くようにする。

自分の命が残り少ないと分かった場面では、黒板の低い位置に思いを書き、残された時間の中でモリアオガエルの保護活動に以前より一生懸命になる場面では、黒板の高い位置に思いを書き、矢印を使って心情の変化を表した。

自分の生活を振り返る場面では、資料から離れて自分自身に問いかけるので、児童の発言をこれまでの板書で使っていない色を使うなどして意識付けるようにする。

モリアオガエルを守る

年

井上さんはどんな思いから「わたしのつとめ」としてモリアオガエルを守り続けたのでしょうか。

今日の学習で新たに気づいたこと、心に残っていることを書きましょう。



タマちゃんとおばあちゃん

ここは、上とよまつ。ここには、モリアオガエルが すんでいて、ことしも あわの たまごを うみました。

そこへ、このすぐ ちかくに すむ いの上の おばあちゃんが やって きました。いの上の おばあちゃんは、

「おやおや ふわふわの たまごが うまれたね。ことしは、きょねんより たくさんあるね。オタマジャクシに なるのが たのしみだわ。」

と にこにこ しながら いいました。そして、まい日 たまごを 見に きて くれるのでした。

なん日か すると、あわの たまごの 中で オタマジャクシが 生まれました。タマちゃんも その中の 1ぴき です。

「わあい オタマジャクシになったぞ うれしいな。」

と よろこぶ タマちゃんを いの上の おばあちゃんは うれしそうに 見えています。

「こんにちは。 ぼく タマちゃん。 よろしくね。」

タマちゃんたちは、早く 田んぼに とび出して じゅうに およぎたくて たまりません。ところが、ことしは、雨が ふらないので、タマちゃんたちが およげる 水たまりが ありません。それに、さいきん いの上の おばあちゃんも 見にきて くれません。

「おばあちゃん、どうしたのかなあ。このままじゃ ぼくたち、ここから 出られないよ。あわの たまごも かわいて しまうよ。」

タマちゃんたちは 日に日に 元気が なくなって いきました。

そのときです。いの上の おばあちゃんが かけつけて くれました。

「ごめんね。タマちゃんたち。ながい こと 見に きて あげられなくて。びょうきで しばらく ねこんで いたの。でも、もう だいじょうぶよ。いま すぐ 水たまりを つくって あげるからね。」

といって、スコップで 田んぼを ほって ふかい 水たまりを つくって くれました。

「やったあ、うれしいな。」

タマちゃんたちは、つぎつぎに 田んぼへ とびこんで いきました。そして、うれしそうに 見おくって くれる いの上の おばあちゃんに

「ありがとう、おばあちゃん。 ぼくたち りっぱな モリアオガエルに なるからね。また あおうね。」

といって、元気よく しっぽを ふって およいで いきました。

モリアオガエルを擬人化し、井上さんへの感謝の気持ちを考える **展開B**

～ 役割演技を取り入れた指導 ～

(ア) 主題名 ありがとうの心 2－(4)

(イ) ねらい 井上さんに優しく世話をしてもらったオタマジャクシの気持ちを考えることを通して、お世話になっている身近な人に対する感謝しようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「タマちゃんとおばあちゃん」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 モリアオガエルのことについて知らせる。	○ モリアオガエルについて知らせる。 ・日本にしかいなくて、木に泡状の卵を産むこと。 ・オタマジャクシは、下の水たまりに落ちること。 ・最近、数が減っていること。など	○ モリアオガエルが生息する自然条件について分かりやすく説明する。
展開	2 資料を聞いて考える。	○ 井上のおばあちゃんに出会ったタマちゃんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・このおばあちゃん、だれだろう。 ・優しくさな。 ・いつもぼくたちが元気か見に来てくれるんだな。 ○ 雨が降らず、おばあちゃんも来ないとき、タマちゃんはどんな気持ちでいたでしょう。 ・雨降らないかなあ。 ・おばあちゃんどうしたんだろう。 ・このままだとぼくたちモリアオガエルになれないよ。 ◎ 井上のおばあちゃんがやって来て、水たまりを作ってくれ、飛び込むことができたタマちゃんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・おばあちゃん、来てくれたんだね。 ・会えてうれしいよ。 ・これで、水たまりに飛び出すことができるよ。 ・これまで世話をしてくれてありがとう。おばあちゃんのこと忘れないよ。	○ 井上のおばあちゃんに会ったタマちゃんが、親しみを感じていることをおさえる。 ○ このままだとタマちゃんの命が危ない不安な気持ちに気付かせる。 ○ おばあちゃんとタマちゃんになって役割演技をさせることで、おばあちゃんに会えた喜びや助けてもらった感謝の気持ちに共感させる。 ☆ 即興的な心情表現を通して、登場人物に対する強い共感を呼び起こし、自他の理解を深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 日頃、お世話になっている身近な人について考えよう。 ・保健室の先生にけがをしたとき手当てしてもらった。 ・地域の人があいさつ運動をしてくれる。	○ 生活を振り返り、お世話になっている人がたくさんいることに気付かせる。
終末	4 まとめをする。	○ お世話になっている人にお礼の手紙を書きましょう。	

(2) 活用のポイント

本資料は、井上さんのモリアオガエルを守る行動やその思いを地域の人を受け継いでいくことから、自然の美しさやもろさに気付く、身近な自然を大切に守ろうとする心情を育てることをねらいとしている。活用のポイントは次の通りである。

ア 発問の工夫

井上さんは、自然を守ることを「自分のつとめ」として行っている。この言葉をキーワードとして、どんな思いを込めた言葉なのかを中心発問として考えさせることで、井上さんの自然保護に対する思いに気付かせたい。そして、自分たちには「つとめ」はないのか、あるとしたらどうすることかを考えさせることで、自然保護を自分のこととしてとらえさせることが大切である。

イ 体験活動の工夫

本校の高学年は、これまでに、総合的な学習の時間でモリアオガエルを保護する活動について学習し、生前の井上さんに会って話も聞いている。したがって、モリアオガエルの育つ自然条件や数が減っていることなどを知っている。当時の写真などを提示したり、これまでの体験活動を想起させたりすることで資料の内容をより理解でき、井上さんの思いに迫ることができる考える。

ウ 資料提示の工夫

井上さんの残されたモリアオガエルの卵の数を記した直筆の記録や日記などの実物を提示することで、井上さんが一生懸命に保護活動をされていた思いにより強く共感させることができると考える。

また、終末で、地域の自然を撮影したビデオを見せることにより、その美しさを改めて感じさせ、それを将来に守り残そうという思いをもたせたい。

(3) 授業の実例 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

まず、導入では、モリアオガエルの育つ条件や、最近の地域の自然状況について確認した。

次に、中心発問にいくまでの基本発問として、「井上さんは、なぜ日記への記録や枝打ちをした

のか。」「自分の命が残り少ないと分かったとき、井上さんはどんな気持ちだったか。」と問い、病気に対する悔しい思いや、それでもなおモリアオガエルを守り続けようとした必死な思いをおさえた。

中心発問では、「井上さんはどんな思いで自分のつとめとして守り続けたのか。」と聞き、ワークシートに書かせた。

児童は、「モリアオガエルが安心して住める場所づくりをしたかった。」「他の人にもモリアオガエルの大切さを知ってもらいたい。」など、井上さんの思いに共感することができていた。

さらに、井上さんの思いに迫るために、補助発問として「なぜ子どもたちを見学に呼んだのだろう。何か伝えたいことがあったのだろうか。」と聞くことで、「子どもたちにも分かってほしい。」「

自分の後を受け継いで欲しい。」「大人になっても自然保護を続けてほしい。」などと次の世代へ託したい思いを考えることができた。

展開後段では、井上さんの「つとめ」を受けて、「自分たちのつとめは何か。」を聞くと、「自然を壊さないように守り続ける。」「自然を守り、次へ伝える、それを繰り返す。」という自然保護への思いや継承していくことの大切さに気付いていた。

イ 体験活動を生かした工夫

この資料を扱った児童は、これまでに二度モリアオガエルの見学に行っているため、モリアオガエルが無事落ちるように作られた水たまりや枝打ちされた木々、名札をつけた山野草などを実際に見ている。資料文から想像するのではなく、全員が実体験を共有しているため、資料の内容も容易に理解することができていた。

ウ 資料提示の工夫

展開前段で、井上さんが、卵塊の数を毎年書き記した8年間の記録や3年日記を提示した。特に日記は、子どもたちが見学に行った日のことや毎日の卵塊の数が書かれているページを見ることで、井上さんのモリアオガエルを守り育てたい思いを感じ取ることができた。

また、終末で、豊松の美しい自然の風景をビデ

オで見せた。普段見慣れている景色も普遍的なものではなく、守り育てなければこわれてしまうことを資料で学習した後に見せることで、その大切さを改めて感じる事ができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

本資料を中心に、「地域の自然や人と意欲的にかかわりながら、地域の自然環境を守り、地域に親しみを感じる子を育てる」というねらいで各教科等との関連を図った。

総合的な学習の時間においては、地域の歴史や文化を調べ、地域の人に案内してもらって史跡めぐりをする中で、自然の遺跡である洞窟を見学した。児童は、昔の人々が自然を崇拝しつつ、うまく共存してきたことを感じる事ができた。

国語科においては、「未来社会を考える」というテーマで地域の未来の環境問題についてパネルディスカッションを行った。児童は、将来もずっと豊かな自然があるように木を植えたり、ごみをなくしたりしていきたいという思いをもつことができた。

図画工作科では、深まる秋の自然を入れた校舎の写生をすることで、その美しさに目を向けさせた。

また、地域の方とともに芋掘り体験をすることで、自然の恵みを感じたり、関わってくださる地域の方に感謝の気持ちをもったりすることができた。

そして、道徳の時間では、本資料とは別の資料で自然愛護を扱った内容や郷土愛を扱った内容の学習をすることで、一連の関連した学習を補充・深化・統合させていった。

さらに、これらの一連の学習が児童の意識の中で連続できるように、学習の足跡となり、振り返りができるようなワークシートを作成・活用したり、活動内容や児童の感想を掲示したりするなどの工夫をした。

(5) 心のノートの活用

この授業では、終末に「心のノート」P.62 の詩を活用した。

井上さんは、モリアオガエルという身近で小さな生き物を守ることで、地域の大きな自然を守ろうとした。美しく豊かな自然は、普遍的なものではなく、どこか一部分がバランスを崩すと次々にすべて崩れてしまう。だから今の自然を未来に残すためには、身近な動植物も積極的に守っていくことが大切である。

児童は、事前のアンケートで、地域の自然環境はよいと答えた子が多かった。豊かな自然、美しい自然を当たり前と感じていたのである。

そこで、「地球上にある空気、大地、水、光、空、海、草花、動物などの存在が当たり前でなく、奇跡に近いことである。」という内容の詩を読むことで、地域の美しい自然の貴重さを感じさせることができた。



教材活用例(5) 「恐羅漢」

〔中学校第3学年 主題：自然に対する畏敬の念 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

＜素材「恐羅漢」について＞

恐羅漢は、広島県山県郡安芸太田町と島根県益田市との境にあり、西中国山地国定公園に属す標高1346mの広島県最高峰の山である。恐羅漢周辺は1200m～1300mの山々が連なっている。冬には多いときで3m以上の積雪があり、雪質もよく、毎年多くのスキー客が訪れ、ウィンタースポーツを楽しんでいる。しかし、頂上付近は比較的なだらかに広がっているため、吹雪になって視界を遮られると、方角を見失うこともある。

恐羅漢の楽しみ方はウィンタースポーツだけではなく、春には山菜狩り、秋には紅葉狩りなどの散策が楽しめる。1年を通して雄大な自然を感じることができる。また、周囲はブナ林に覆われており、ブナの木の下は長い時間の中で層をなし、その中に水分や栄養分をたっぷりと蓄え、流れ出る水は太田川の豊かな川の流れを生み出し、瀬戸内海へと注いでいる。

本資料で扱っている恐羅漢での遭難事故は、平成20年2月3日に7名のスノーボーダーが行方不明になったものである。2日間の捜索で、広島県警察や自衛隊、地元の消防団など、のべ887名の方がこの捜索活動に携わっている。

【捜索活動の概要】

2月3日

遭難事故発生

ゲレンデのナイター照明を一晩中点し続けた

2月4日の捜索活動

6:00 前 第1次捜索隊として町消防団の2つの分団に出動要請

7:00 現地対策本部を設置

8:45 災害対策本部を設置

2班に分けて遭難者が目指したルートを検索（頂上付近の積雪1.5m）

旧羅漢山付近で、スノーボードで滑った跡のようなものを発見

10:00 第2次捜索隊として2つの分団に出動要請

12:58 広島県知事に自衛隊の派遣要請（陸上自衛隊第13旅団）

13:30 第1次捜索隊の捜索を中断

第2次捜索隊は、午前中の第1次捜索隊の捜索状況をもとに旧羅漢山付近を検索

17:30 第2次捜索隊は、悪天候のため少ない時間しか捜索できず、4日の捜索をすべて打ち切る

捜索活動終了後、現地対策本部にて5日の捜索体制を協議

翌5日午前7時から遭難者の目指したルートを重点的に捜索することを決定

第1次捜索隊に入っていた2名の幹部消防団員の動き

▽ 第1次捜索隊に入っていた山に詳しい幹部消防団員2名が、旧羅漢山付近で方向がわからなくなったと推測し、

第1次捜索隊の捜索終了後、島根県側（匹見）の独自調査を開始

▽ 調査の結果、島根県側に出ている可能性が強いと確信し、すでに決定していた5日の捜索場所の追加を要請

▽ 午後9時に捜索場所の追加を決定

2月5日の捜索活動

▽ 消防団と自衛隊による匹見捜索隊が、午前9時30分、遭難者全員を無事発見保護

発見場所：島根県益田市匹見町国道488号西側の広見川沿い

▽ 防災行政無線と事前の調査であらかじめ配置していた連絡員の携帯電話により、現地対策本部に報告

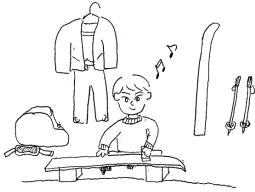
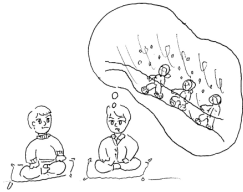
▽ 遭難者の負傷等の状況

3名が軽傷、4名は負傷等なし

ヘリコプターにて病院に搬送

(イ) 4コマ絵

本資料は恐羅漢での遭難事故を素材として扱っているが、遭難事故そのものを直接資料の中で描いていくのではなく、遭難事故を通して恐羅漢を見つめ直す主人公の心情の変化を4つの場面で構成した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	幼いころから恐羅漢でよく遊んでいた、恐羅漢のことが大好きな主人公のひろし。幼いころに祖父から聞いた「母なる山、恐羅漢」の言葉が心に残っていた。そのひろしが翌日のスキー教室を楽しみに準備をしているところに、父が話しかけてくる。	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。1回目の捜索活動を終えて、捜索隊の休憩場所で若手の消防団員が「こんな恐羅漢は初めてだ。」とつぶやく。(遭難から第一日目の捜索終了まで。)	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。話を終えた後、父は「大きいんだよ、恐羅漢は…」と言いつつ居間へ戻っていった。(第二日目の捜索から発見されるまで。)	翌日、ひろしはスキー教室で恐羅漢の頂上に立っていた。しばらくぼんやり辺りを見つめた後、ストックにグッと力をこめて握りしめ、斜面を滑り降りていった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

畏敬とは、「敬う」という意味での尊敬、尊重と、「畏れる」という意味での畏怖という面とが含まれている。自然とのかかわりを深く認識すれば、人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに、人間の力を超えたものを素直に感じとる心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう。また、この人間は有限なものであるという自覚は、自他の生命の大切さや尊さ、人間として生きることのすばらしさの自覚につながり、とかく独善的になりやすい人間の心を反省させ、生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心を生み出していくものである。

恐羅漢ではスキー教室が行われ、生徒たちにとって恐羅漢は身近な存在として感じられている山である。しかし、恐羅漢の自然の雄大さや美しさなどに対して敬う気持ちや、自然はそういった面ばかりではなく、厳しく、恐ろしい姿も持っているという捉えが浅い。その双方の自然の姿を見つめさせることで、自然が人間の力を超えた大きな存在として認識され、畏敬の念が深まると考えられる。

本資料では、子どもの頃から恐羅漢で遊び、祖父から恐羅漢の自然の雄大さを聞かされて育ってきている主人公を設定した。その主人公が遭難事故での恐羅漢の知らなかった一面を知らされることで、恐羅漢に対する見方が変わってくる構成としている。「母なる山、恐羅漢」や「恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった」、「大きいんだよ、恐羅漢は…」などをキーワードとしながら、自然への畏敬の念を深めさせていきたいと考えている。



【心に響くちょっといいはなし】

実際の捜索活動では、2名の地元消防団員の機転が遭難者の発見を早めている。当時、恐羅漢ゲレンデ側の捜索に多くの人員が動員されており、匹見町方面への捜索へは20名程度があたっていた。遭難者はスノーボードをしていて行方不明になったことから、ゲレンデ側を中心に捜索をしていた。しかし、実際は吹雪の中で方角を見失い、匹見町方面に滑り下りていっていたのである。そのことに気付いたのが2名の消防団員で、厳しい自然の捜索環境の中でも、あきらめず人命救助のために努力する姿がそこにはあった。

古くから匹見町に暮らしていた人々にとって、遭難者が匹見町に下りてくる可能性があることは、経験から感じていた。そこで、匹見町の人々は遭難者が町に下りてきたときに安心できるように雪道に足跡をいろいろな場所に残していたのである。恐羅漢の自然とともに生きてきたこの地域の人だからこそのできた行為であり、匹見町の地域の人々の温かさも感じられる。

ウ 資料全文

「恐 羅 漢」

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰り、ずっとスキーの手入れをしていた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノー⁽¹⁾といって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。

ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリ⁽²⁾やナルコユリ⁽³⁾などの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした秘密基地のようになっており、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。

ある日、ひろしがいつものようにその秘密基地で遊んでいると、祖父がやって来た。

「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」

「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」

ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。

「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさん水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの。」

「母なる山、恐羅漢？」

ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」
と言って外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしがその雪を見て、
「このぐらいの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」
と言うと、隣で新聞を読んでいた父は、降り続ける窓の外の雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をし始めた。

平成20年2月3日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月4日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは体がかんじき⁽⁴⁾を掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。捜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて捜索していた2つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の捜索活動を終え、捜索隊がもどった現地捜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。

「こんな恐羅漢は初めてだ。」
すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。
「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじっとな…。」

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の捜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での捜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから2日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月5日の朝がやってきた。匹見町での捜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名がたった。捜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には15センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」

友だちの声が聞こえてきた。

「ああ。」

と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

【注】

- (1) 水分が少なく、スキーなどに快適な雪質のこと。
- (2) 日本特産で日本を代表するユリ。地域によっては、ヤマユリと呼ぶこともあり、最近ではその数も減ってきていると言われている。
- (3) 山林や丘陵地などに自生するユリ科ナルコユリ属の多年草で、北海道から九州、中国や朝鮮半島に自生している。白い花が列をなしている容姿が、鳥を追ひ払う鳴子に似ていたため、ナルコユリと呼ばれるようになったとされている。
- (4) 雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように、靴などの下につけるもの。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「大きいんだよ、恐羅漢は」というキーワードに着目し

自然への畏敬の念を考える展開

～話し合い活動を生かした指導～

(ア) 主題名 自然に対する畏敬の念 3－(2)

(イ) ねらい 祖父や父から恐羅漢の話を聞いた主人公が、恐羅漢に対する見方が変化していく心情に共感することを通して、自然に対する畏敬の念を深める。

(ウ) 資料名 「恐羅漢」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	○留意点 ☆評価の観点
導 入	1 恐羅漢でのスキー教室の様子を振り返る。 (スキー教室の様子を撮影した写真)	○ スキー教室で恐羅漢のことをどんな風に思っていますか。 ・楽しい所 ・きれいな所 ・気持ちいい ・眺めがいい所 ・滑りやすい雪質 ・人がたくさんいる	○ 恐羅漢でのスキー体験を振り返らせることで、プラスのイメージをしっかり引き出したい。
展 開	2 資料の前段を読む。 ○ ひろしが幼い頃から感じていた恐羅漢について考える。 3 資料の中段を読む。 ○ いつもと違う恐羅漢の状況に気付く。 ○ 午前中の搜索を終えたあと、年配の消防団員は何を伝えようとしているのかを考える。	○ ひろしは、「母なる山、恐羅漢」ということばから、恐羅漢に対してどんな印象をもったでしょう。 ・すごい山 ・懐が深い ・自慢できる山 ・あたたかい山 ○ 「いつもの恐羅漢ではなかった」とはどんなところが違っていたのでしょうか。 ・怖いところ ・命に関わる ・体が腰まで埋まって、はって進まないといけない。 ・視界が1メートル程度 ○ 年配の消防団員は何を伝えようと思ったのでしょうか。 ・恐羅漢は何も悪くない。 ・恐羅漢は昔から何も変わっていない。 ・恐羅漢がいつもと違うと思うのは人間の見方。	○ 生徒が気付いていない、恐羅漢の「敬」の部分を考えさせる。 ○ 恐羅漢の自然のすごさについて考えさせる。 ○ 恐羅漢での搜索活動での厳しい様子を出させる。 ○ 若い消防団員が「こんな恐羅漢は初めてだ。」と言った言葉に対して、年配の消防団員が言っていることに注目させる。 ○ 恐羅漢への見方が変わるの、人間の勝手な見方によることに気付かせる。 ○ 今回の搜索活動では600名を超える人が携わるほどの大きな事故だった

	4 資料の後段を読む。 ◎ 父が「大きいんだよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしがどんなことを感じたかを考える。 ○ 恐羅漢の頂上に立っているひろしの気持ちを考える。	◎ 父が「大きいんだよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしはどんなことを感じたでしょう。 ・恐羅漢は色々な姿をもっている。 ・恐羅漢は今も昔も変わらず大きな存在だ。 ・恐羅漢の力に比べれば、人間の力なんてちっぽけなものだ。 ・恐羅漢を甘くみてはいけない。 ・恐羅漢のことは何でも知っているなんて思っていない。 ・恐羅漢の自然は厳しいときもあれば、やさしく温かいときもある。 ○ ひろしはどんな思いで、恐羅漢の頂上から、あたりを見つめていたのでしょうか。 ・やっぱり恐羅漢は大きいな。 ・昔からずっとこの場所に恐羅漢はあったんだ。 ・この恐羅漢であんな事故が起こったなんて信じられない。 ・今日は天気がよくて楽しいけど、いつ天気が変わってどうなるかわからない。自然って怖いな。 ・人間なんてちっぽけな存在なんだな。 ・この恐羅漢の自然の中で自分も生かされているんだ。 ・自然と上手につきあっていければいいな。 ・恐羅漢の色々な面を知った上でスキーを楽しもう。	たことを伝える。（その内の20名が匹見町での捜索に携わった。） ○ 学習プリントに記入させる。 ○ 自然の力は人間の力がおよばない程大きなものであることに気付かせる。 ○ ひろしが小さいころに祖父から聞いた「母なる山、恐羅漢」と遭難事故とを照らしながら、恐羅漢の大きさについて考えさせる。 ○ 厳しさだけでなく、温かさもあることに気付かせる。 ○ 恐羅漢とともに生きてきた匹見町の人々の姿にも目を向けさせる。 ☆ キーワードに対する多様な見方や考え方を交流することにより、自ら自然に対する畏敬の念を深めることができたか。 ○ 祖父や父の言葉から感じたひろしの心情を振り返らせる。 ○ 自然の畏怖の部分だけでなく、その懐の深さに気付かせたい。 ○ 恐羅漢の風景が今までとは少し違って見えていたことに注目させる。
終末	5 恐羅漢の四季の自然を描いたDVDを視聴する。	○ 恐羅漢の四季の自然を描いたDVDを見て、恐羅漢の自然について考えてみよう。	○ 恐羅漢のDVDを視聴させることで、自然への畏敬の念を疑似体験させる。

(キ) ワークシート

「恐羅漢」

年 番 名前

父が「大きくなったよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしはふんふんを
感じたでしょう。



(2) 活用のポイント

本資料では、生徒達がもっている恐羅漢の自然に対する畏敬の念をさらに深めることをねらいとしている。「敬」については、スキー教室で感じている恐羅漢の自然のすばらしさを、四季を超えた時間の流れの中でさらに深く感じさせていきたい。「畏」については、遭難事故の様子を振り返らせることで、普段は見せない恐羅漢の恐ろしさを感じさせていきたい。さらには、そういった畏敬は、人間の存在を超えた大きなものとして感じさせていくことが肝要である。その点を踏まえて、以下のような活用の工夫が考えられる。

ア 発問の工夫

本資料には、生徒に注目させたいことばがある。それは、最初に祖父が主人公に言っている「母なる山、恐羅漢」と最初の搜索活動を終えたあと若い消防団員が言っている「こんな恐羅漢は初めてだ」である。これらの言葉は、恐羅漢の自然を象徴することばで、いろいろな姿をもつ恐羅漢を想像することができる。しかし、これらの恐羅漢像はすべて人間がつくりだした勝手な見方で、恐羅漢は恐羅漢でしかないという、恐羅漢の自然の大きさ（畏敬）に迫っていくことが大切である。そのために、話を終えた父が最後に主人公に向けて言っている「大きいんだよ、恐羅漢は……」に注目させ、「大きい」には、恐羅漢の外観上の大きさだけでなく、色々な面をもち、人間の存在を超えた大きな存在としての「大きい」の意味に気付かせていきたい。

イ 話し合い活動の工夫

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」や「その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。」という場面を通して、その言葉の意味をじっくり考えさせ、恐羅漢に対してもったイメージを話し合わせることで、中心価値に迫っていききたい。

ウ 体験活動を生かした工夫

本資料は、生徒がスキー教室で体感している恐羅漢の自然を糸口に、自然への畏敬の念に迫る資料である。導入では、スキー教室を通して感じている恐羅漢の自然をしっかりと出させ、資料の中で

描かれている恐羅漢の自然と対比させる中で考えさせていくことができる。

エ 資料提示の工夫

生徒が感じている恐羅漢の自然は、冬のスキー教室で感じているものが多いと考えられるので、恐羅漢の自然を四季を通して感じさせることで、自然への捉えを広げさせていくことが必要である。

(3) 授業の実際～児童生徒の反応を踏まえて～

ア 発問の工夫

「母なる山、恐羅漢」と「いつもの恐羅漢ではなかった」を対比させることで、恐羅漢の「敬」と「畏」の両面を感じさせることができた。その上で、「大きいんだよ、恐羅漢は……」の意味を考えさせることで、自然の懐の深さを感じさせることにつながった。

イ 話し合い活動の工夫

実際の授業の中で生徒たちは、「大きいんだよ、恐羅漢は……」ということばを受けて、次のような発言をしている。

- ・楽しくもあり、恐ろしくもある山。
- ・長い歴史の中で恐羅漢の自然がつくられている。
- ・人が思うようには動かない程の大きさをもった山。
- ・人も飲み込んでしまう程の大きな存在。
- ・恐羅漢は、美しいだけではなく、自然の恐ろしさを伝えてくれる大きな存在。
- ・親のような偉大な山。

これらの発言からも、生徒たちが本資料や授業を通して、恐羅漢の様々な姿に触れ、人間の存在を超えた大きな存在として自然を考えてきていることが分かる。

ウ 体験活動を生かした工夫

導入でスキー教室の写真などを提示していきながら、スキー教室で感じている恐羅漢の自然などについて思いをしっかりと引き出すことができた。また、授業に対する関心を引きつけることができた。

エ 資料提示の工夫

生徒が知っている恐羅漢の自然は、スキー教室での雪景色の自然がほとんどであるが、冬以外の季節の恐羅漢の自然に触れることで、恐羅漢の自然に対する見方が広がった。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

生徒は、小学生のときから恐羅漢でスキー教室を体験しており、とりわけ冬季の恐羅漢の自然のすばらしさは十分に感じている。それらの思いをしっかりと出させることで、本資料と自分たちの思いをつなげていくことが大切である。その一方で、冬季以外の恐羅漢の自然については、十分な知識や体験がない生徒が多いので、資料中に出てくる冬季以外の恐羅漢の自然環境のすばらしさにも気付かせていくことで、恐羅漢の自然に対する「敬」の部分を広げることも大切である。

また、本資料で出てくる遭難事故当時のような荒れ狂う恐羅漢の自然環境を、生徒が直接的に体験することはできない。そのことを踏まえて、搜索活動中の厳しい自然の状況をしっかりと感じとらせることに留意する必要がある。

自然が身近な場所にある生徒にとって、自然のすばらしさについてあらためて実感する場面は多くない。そのために、お花見弁当やもみじ狩り弁当などの季節行事を設定し、地域の自然の豊かさやすばらしさを再認識する場を設定することが、自然に対する畏敬の念を深めることにつながる。

(5) 心のノートを活用

本資料は資料の内容を考えていくことで、自然に対する畏敬の念の価値の一般化をはかることができると考えるが、より広げるために、「心のノート」PP. 78-79 の「大自然に何を想う」を活用し、そこにある文章を通して、自然を一般的なものに捉えて考えさせることもできる。

このことで、授業の中で考えた恐羅漢の自然の大きさを、その他の自然に置き換えて考えることができる。

